

---

# 異世界の王子様

ティシー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界の王子様

### 【Nコード】

N6011M

### 【作者名】

ティシー

### 【あらすじ】

3人兄弟の末っ子・夜月。終業式の日、突然兄から異世界行きを告げられた。異世界先で出会ったのは、青年ガクフォンスとペットのロウティス。

私は元の世界に帰れるの？

完結 番外編

## キャラ紹介（前書き）

がつつりネタバレあります。初めて読まれる方は上2人でいいかと。

## キャラ紹介

【深頼<sup>みら</sup> 夜月<sup>やつぎ</sup>】 16歳 高2 160cm 黒目・黒髪

【ガクフォンス・ローヴェンド】 王子 20歳 182cm 金色の瞳・青髪（変装時：銀の瞳・黒髪）三大宝龍角の一つ、王剣<sup>レストシエラン</sup>を持つ。 愛称：ガク

【深頼<sup>みら</sup> 滝月<sup>ろっげつ</sup>】 夜月の兄 23歳 愛称：ロウ、ロウ兄

【深頼<sup>みら</sup> 銀月<sup>ぎんげつ</sup>】 夜月の兄 20歳 愛称：ギン、ギン兄

【宮城<sup>みやぎ</sup> 桜花<sup>おうか</sup>】 夜月の親友 16歳 167cm 黒目・茶髪

【ヴァルク・ローヴェンド】 ガクの異母兄弟 28歳 185cm 金色の瞳・銀髪 ローヴェンド現国王。三大宝龍角の一つ、死<sup>メデュー</sup>ファイユス剣を持つ。

【ティルフェミナ・ローヴェンド】 ガクの姉<sup>シアスメランテ</sup> 21歳 165cm 金色の瞳・金髪 三大宝龍角の一つ、純剣を持つ。 愛称：テイル

【ロウティス】<sup>ブリズム</sup> ペット 顔はドラゴン、体は一応鳥。手あり。3本の尾。額に結晶。変化可能。愛称：ロウ

<ローヴェンド> 広大な土地と絶対的な戦闘力を誇る大国。5国の中心部に位置しており、ドラゴンの顔にあたる形をしている。

現国王：ヴァルク・ローヴェンド

<フユイレス> ローヴェンドの北にある、ドラゴンの首にあたる形をしている国。

現国王：ディゼイド・フユイレス

<シリーズ> ローヴェンドの南にある、ドラゴンの3本の尾にあたる形をしている国。5国では最小。

現国王：ジェイネル・シリーズ

<リネイメル> ローヴェンドの東にある、ドラゴンの右翼にあたる形をしている国。

現国王：ウエヴィア・リネイメル

<グークル> ローヴェンドの西にある、ドラゴンの左翼にあたる形をしている国。

現国王：ハーデウス・グークル

ヴァーギス大陸    ローヴェンド、フユイレス、シリーズ、リネイメル、グークルの5国を表す超大陸。

【ヴァージス】 ドラゴン 龍神 ドラゴン系の最高神。

以下おまけ？

超高速竜 リンド・ウルム 翼がなく、胴が長いドラゴン。戦闘系ではなく、ひたすら飛行スピードを追及した希少種。速度は・・・「もんのすごく速い」で

【グレスティーン・リンド・クエル・アルシェイ・ヴィジアンヌ】  
雌 メス 愛称：グレスティーンヌ

【ハイウェイド・ウルム・スイーザ・アン・グライク・ラス】 雄 オス

＊ムダに名前が長いって言うのは突っ込まない。付けたかったんでススイマセン。

鳥神竜 ちようしんりゅう ヴァージス フェニックス 龍神の直系に不死鳥の能力を加えた神。

【イフィス・シルティス・ファア】 光の不死鳥の力が宿るとされるシルティス・プリズムから生まれた光の鳥神竜。光剣Ⅱファアを持つ。

【ロート・クレファリナー・シャロー】 炎の不死鳥の力が宿るとされるクレファリナー・プリズムから生まれた炎の鳥神竜。炎剣Ⅱシャローを持つ。

【ピアス・メルエノール・リヴァ】 水の不死鳥の力が宿るとされるメルエノール・プリズムから生まれた水の鳥神竜。水剣Ⅱリヴァ

を持つ。

【ウィール・エフィズ・クライマリー】 風の不死鳥の力が宿るとされるエフィズ・プリズムから生まれた風の鳥神竜。風剣Ⅱクライマリーを持つ。

【ゾルト・ラミュール・ブレッディ】 雷の不死鳥の力が宿るとされるラミュール・プリズムから生まれた雷の鳥神竜。雷剣Ⅱブレッディを持つ。

## キャラ紹介（後書き）

増えていく予定です。鳥神竜は・・・ヴァージスの次に偉いドラゴン系の神々、ぐらいでいいかと。



## 01：理想の王子様

「行つてきまーす！」

そう言つて元気良く家を飛び出した彼女、深頼みら やつき夜月はこの春、高校2年生になった。

ジリジリと肌を害する太陽も、生ぬるい風も、鳴り止まないセミの声も、今日の彼女には関係ない。

今日は、終業式なのだ。

「桜花おうか、おはようー!!」

「おはよう夜月。今日は一段と元気だね」

「だって明日から夏休みだよ？ テンション上がるでしょ！」

そう、明日からは夏休み。買い物したり、海へ行ったり、美味しい物食べ歩いたり！  
あゝ楽しみだあ。

「ねえねえ夜月、ロウさんの写メ内緒でもらえない？」

「んゝどうだろ。ってかロウ兄はやめな。ギン兄のがまだいいよ？」

「ギンさんもカツコイイけど、やっぱりロウさんの顔が一番！もゝ前に夜月の家にお邪魔した時に撮っておけば良かったあゝ」

「確かにロウ兄の顔はいいかもしれないけど、あれは相当な女垂らしだよ？」

「目の保養になるからそれだけでいいの！ ああ写メ欲しゝ」

「私は王子様の写メが欲しい」

「いやいや、十分ロウさんとギンさん王子様フェイスでしょ！？」

「そうかなゝ？ なんか違うんだよねー」

「夜月はそんなんだから告られないんだよ！夜月だってしゃべらなければ良く見えるし、影でモテてるのに、理想高いからみんな引くんだよ！！あの2人で満足できないなんて乙女としてどうにかしてる！！贅沢だあ！！！」

ああなんかヒートアップしてるよ桜花ちゃん。とりあえず落ち着いて、周りの目がイタイ。特に女子。

「お、桜花分かったから落ち着いて？ 私が悪かった、うん」

「ホントに分かった！？ 大体夜月は「キンコーンカーンコーン・

・・」

おお神の音！

「ああもう！ 夜月また今度ね！」

と言って自分の席に座る桜花。できればその今度は一生来ないことを願いたい。

私も自分の席に座ると、少しして担任が入ってくる。1年の時も持ってもらったが、その時よりハゲてきたと感ずるのは気のせいではない。

そんな担任の話も右から左へ受け流し、どうやら話が終わったように皆体育館へ向かう。

体育館での長ったらしい話しも寝てやり過ごし、いよいよ帰り。

桜花と放課後遊び、家に帰る。

「夜月、バイバイ！ また夏休みにねー！」

「うん！ ばいばい桜花！」

桜花は朝の事を忘れていようだ。さあ私も帰ろう。

「ただいま」

「おかえり、夜月。ロウも帰ってきてるし夕食にしようか」

そう出迎えてくれたのはギン兄。

「うん！ 着替えてくる」

着替え終わってリビングに行くのとロウ兄とギン兄が既にテーブルに座っていた。

「おう夜月、早く食うぞ」

「うん。ロウ兄今日は帰ってきたんだね」

「ああ、いい女がつかまらなかった」

「そうですか。いい加減１人に絞ったら？」

「夜月に彼氏が出来たらな」

くっ、むかつく。

食卓に座り3人で食べ始める。今日は焼きだ。

黙って肉に手を伸ばしていると、見かねたのかギン兄が

「大丈夫、夜月だっていつかは彼氏作れるよ」

と微妙なフォローをしてきた。

「あのね、私は王子様を待ってるの！中途半端な彼氏なんていらないもん」

「王子様あ？　んなもん異世界へ行ってこい」

「行けるなら行ってるもん！」

「じゃあ行ってみる？」

「うん！……って、え？」

「異世界、行きたいんでしょ？夏休みだしいいんじゃない？」

「そーだな、夜月行ってこい」

とロウ兄が言いながら手をこちらに向ける。

え？ええ？まじで？ホントに行くの？ねえ？！

「じゃーな」「またね、夜月」

2人がそう言った瞬間、私の体は光に包まれた。

## 02：美形青年と私

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

ああかれこれ何分だい？目の前にはなんだかとても美形な青年。瞳はグレー、髪は黒。恐らく180を越える身長にキリっとしたまゆ、そして切れ目気味な瞳。私の中の王子様センサーがフルに活動している。しかし、その顔にどこか違和感を感じるのは何故だろうか。

まあ違和感は置いといて、この場をどう切り抜けるべきか？いきなり青年の前に現れたであろう私、うーん不審者以外の何者でもない？

周りは・・・森？なんか雄たけびか聞こえるような・・・

と、思案していると、青年が目を細め口を開いた。

「来る」

え、何が？と考える間もなく

「ガアアアアア!!」

雄たけびの聞こえた方を向くと

く、ま? にはではデカイからあ!!

「おいおまえ。走って逃げろ」

と言われても体が震えて動かない。ああなんて世界にきたんだ。なんて思考は働くのに。

「おい?・・・動けねえのか。チッ」

青年は舌打ちを一つこぼすとクマ似の生物に向かって走り出した。

「ロウティス、あの女を連れて行け!」

空に向かって何か言う。  
すると

「グルウ!」

空から鳥? みたいな生物が飛んでくる。



それは途中で大きくなり（変身？）、私の上に来ると3本の尾で私の腰をつかみ、また飛び出した。

ってムリムリムリ！

「キヤアアアア」

叫ぶと

「後から追っ、黙って行け」

下は見えなかったが声がした。

しばらくの飛行の後草むらに降ろされた。

「えっと・・・ありがとう？」

「グル」

言葉が分かるらしいその子は最初に見たサイズに戻り、座った私の膝の上に乗ってきた。

顔はドラゴン、体は鳥みたいな構造なのだが、ちよろっと出た手がなんともかわいい。

「さっきの人、大丈夫かな・・・」

「ググルウ、ググル！」

大丈夫だと言ってるんだろう、自信が伝わってくる。

しばらくその子の毛を撫でているといきなり頭を挙げ、飛んできた方角を見つめた。した。

### 03：ガクとロウティス

「グル！」

「ああ。ロウ、良くやった」

さっきの青年がこちらに歩いてくる。

私も立ち上がり青年に向かって歩き出す。

青年の顔が少し驚いているように見えるのは気のせいだろうか。

「無事か？」

「はい、ありがとうございます。あの、大丈夫ですか？」

「問題ない。俺はガク。こいつはロウティス。おまえは？」

「夜月です」

「何故あそこに居た？」

どうするべきか。本当のことを言うべきか？この人には助けてもらったし悪い人には思えない。

「えっと、その私も信じられないんですけど、異世界から来たよう  
で・・・」

「・・・異世界？」

「はい、日本って聞いたことがありますか？」

「いや」

「ですよ。でも確かに私はそこに住んでいたんです。さっきまでは・・・」

「・・・分かった。宿を取ってゆっくり話を聞く、ロウ」

「グル」

ロウティスはまた大きくなると2人を乗せて軽々と飛ぶ。翼を広げると全長4mくらいだろうか。

「ロウ、エルルスの入り口までだ」

「グル」

賑う街の入り口まで来ると下降し始めるロウティス。  
飛行中ガクさんに、落ちないようにと腰に手を回されドキドキしたのは内緒だ。

「ここにするか。ロウ、ヤツキと待ってろ」

「グル」

そう言って入っていくガクさん。

ちよつとして出てくると

「2部屋取れた。行くぞ」

とまた入っていく。

私も恐る恐るついて行く。

階段を上がり、ガクさんが部屋のドアを開ける。

「まずこっちの部屋で話しをしよう。いいか？」

「はい」

部屋はシンプルな造りだった。

「さて、さっきの続きだが話せるか？」

「はい。私はさっきまで家で夕食を食べていたんです」

そう、大好きな肉を。そういえばこっちは昼過ぎぐらい？

「で、兄2人が突然異世界へ行つて来いとか言い出して」

王子様云々の話は恥ずかしいのでパスだ。

「それで気付いたらあそこに・・・」

ああこんな話し信じてくれるんだろうか？

自分でも信じれないのに。

くそうバカ兄貴め、可愛い妹が死んだらどうしてくれるんだ！

しばらくガクさんは目を瞑り黙っている。

ロウティスはガクさんの肩に乗り、顔はガクさんの頭に乗せて眠っている。

ガクさんは何も言わなかったし、あれが定位置なんだろうか。中々カワイイ光景だ。

するとガクさんが目を開き、私と目が合う。

途端に、心臓が激しく動き出す。ああこれだから美形は困る。

## 04:これから

「正直驚いたがウソを言っているとも思えない」

「じゃあ信じてくれるんですか?!」

「ああ」

「ありがとうございます!!」

良かった! ああなんか安心したのかな? 泣けてきた。けど俯いてグツと堪える。

「だがこれからどうするんだ?」

そうだ、それが問題だ。特にすることもなく、お金もない。この世界の知識も皆無。

俯いたまま黙っていると、上から小さな溜息が聞こえ、

「・・・ついてくるか?」

神の声が聞こえた。バツと顔を上げるとガクさんと目が合った。

「俺についてくるのが安全だとは言い切れない。嫌なら他の策を考えてやる。どうする」

嫌じゃない。行きたい。ついていきたいけど、邪魔だね。

「・・・他の策を考えるか」

私が黙っているのは、嫌だと言にくいからだとかくさんは解釈したみたいだ。違うの。

「あのっ、連れて行って欲しいんですけど、でも、何もできないし、荷物にしかないからっ」

また泣けてきて、そこで押し黙ると

「俺はそこまで弱くない。1人ぐらいなんともない。そうだな、じやあ・・・俺はおまえを守る。その対価におまえはロウの世話をする。これでどうだ？」

言葉が出なくてコクコクと頷く。すると頭をポンポンと軽くなでられる。

「交渉成立だ。よろしくな」

頭に手を乗せられたままかくさんを見る。

すると、フツとかくさんが笑った。・・・・・・カッコイイ。なにその無駄なカッコ良さ！



ごめん桜花、ロウ兄も真っ青だよ!!

これぞ王子。

ああ、実は王子様なんです、なんてオチはないだろうか。ないか。王子様があんな森を1人でうろつかないか。

しばらく感動に耽っていたら、

「ヤツキ？」

とガクさんが呼ぶ。いけないいけない。はっ、と我に帰り挨拶をする。

「何から何まで本当にありがとうございます。よろしく願いします」

「ああ。それと敬語はいらないしガクでいい」

でも多分年上だし、カツコイイし（関係ない）ちょっと難しい。

「・・・直せたら、じゃダメですか？」

「・・・好きにしろ」

「ありがとうございます」

「ん」

## 05：この世界

それからガクさんにこの世界のことを教えてもらった。  
まず今居る大陸は世界でもとても大きいということ。

大陸と大陸は離れており、リスクが高いため滅多に他の大陸には移動しないらしい。

そしてこのヴァーギス大陸は5国で形成されており、それぞれがドラゴンの体の一部を表しているとのこと。

5国の中心となるのが、顔の部分に位置するローヴェンド。5国で最も大きく絶対的な戦闘力を誇るらしい。

ローヴェンドを中心に北にフイイレス、南にシリース、東にリネイメル、西にグークルがあり、右翼龍神が創ったとされるこの大陸は、左翼元々一つだという概念の下、各国とも仲が良いという。そのためこの国をいつ行き来しても問題はないそうだ。

ゼッドヴァンしかし巨大魔獣が多く時々討伐に悩まされるという。

ローヴェンドは他の4国と隣接しているが、シリースはローヴェンドのみ、フイイレスとリネイメルの間は、途中でブデイという街がある以外は山道で、フイイレスとグークルの間は、途中でエルルスという街がある以外は森らしい。

今居るのはフイイレスとグークルの間を繋ぐエルルスという街で、私がトリップして来たのは危険なモンスターも多い森の奥だったみたいだ。

ああ改めて怨もうバカ兄貴共よ。特に滝月君。なみづき君のせいでロウテイスをロウと呼びにくいじゃないか。ティスカ、ティスでいいのか！？

銀月君、君が少し腹黒いことは気付いていたが、ロウ兄と手を組むなんて恐ろしい。いや、違うか。

あとこちらのこともガクさんに話した。ウチは5人家族で両親は長期海外旅行中で、兄2人がいるということ。私は学校に通っていて桜花という面食いの親友がいるということ。等々。

話し込んでいる内に夕食時になっていたらしい。ガクさんが下に行くぞと言った。

下に降りて夕食（変わった肉が出てきたけど美味しかった。）をいただき、

今日は疲れているだろうから、もう部屋で休めと言われた。その際用心棒にロウティスを貸してくれた。

部屋に入り、ベッドにダイブするとロウティスも枕元で丸くなる。ロウティスにおやすみというと、クルルと返ってきた。カワイイ。

あー、ガクさんと会えてよかった。いや変な意味じゃなく。会えなかったら今頃モンスターに襲われてエサになっていただろう。

ていうか兄貴ズは何者なんだろう？だつていきなり異世界へ行って来い！とか言つてヒューと送れるもんじゃないでしょ？

もしかして、逝つて来い！の間違いだったんだろうか。いやそんなハズはナイ。ロウ兄の好物のプリンを一昨日食べちゃったのは確かに私だけど、しらばっくれたし証拠は残さなかったハズ。

ギン兄の気に入っていたコーヒークップを一週間前に、ちよつと手元が過って割っちゃったのは確かに私だけど、即よく似た物を買ってきてうまくカモフラージュしたハズ。

うん、どこにも落ち度はナイ！

私は帰れるんだろうか？

帰ったらとりあえず一発お見舞いせねば・・・・・・・・

## 05：この世界（後書き）

今更ですけど、なんか始めちゃいました。書いてるとドキドキします。

とりあえず完結目指してがんばるぞー。  
テキストに応援よろしくお願いします。

## 06：異世界の朝

クルルウ・・・クルクルウー・・・

・・・グガルルウ！ 「うわっ。・・・んー？何？朝？」

んー・・・ここはどこ？

「グル」

私は、夜月。

「グル」

この子は・・・ロウティス。

「グル」

ああ、異世界の初めての朝か。

「グルグー」

もうさっきからどうしたのロウティス？

ってああごめん。抱き殺すところだったか。

昨日は考えている間に寝ていたらしい。

ついでに抱き枕感覚でロウティスを引き寄せたらしい。

ロウティスを解放すると窓際に飛んでいった。

ごめんってばロウティス君。

よし今度ガクさんに好物聞いておこう。

「ごめんロウティス。和解しよう」

「グルル」

「変な夢みたんだよ。（ということにしておこう。覚えてないけど。）  
（それでちよつと力が・・・）」

「グルル」

そんなに苦しかったんだろうか。ホントに悪かったよロウティス君。

どうやってロウティスと和解しようか悩んでいると

コンコンッ

と扉を叩く音がした。

「はい」

「ヤツキ起きたか？俺だ」

ガクさん『オレだ』はダメですよ。オレオレ詐欺になっちゃいま

すよ。なんてアレは日本独特のものか。  
手で軽く髪を整え扉に向かう。

「今、開けます」

ガチャッと扉を開けるとやっぱり今日もカッコイイガクさんが立っていた。

「ガクさん、おはようございます」

「ああ、朝食行くぞ」

「はい」

と言った瞬間ロウティスがシュッと通りすぎる。

「グルッ」

そしてガクさんの肩に乗り私の方を見る。

「ロウ？何かあったのか？」

「いやあ、ちょっとした手違いが・・・」

「まあ下で聞こう」

「はい」



## 07：エルルス

朝食を取りながら昨晚あったことを話す。

「・・・ロウ、災難だったな」

「グル」

「ごめん」

「今度から避けることだな」

「グル」

「そうしてください」

「グル」

一応和解できたっぽい。よかったよかった。

「さてそろそろ行くか」

「はい。どこに向かうんですか？」

「最終目的地はローヴェンドだが、特に急ぐ必要もない。まずはこの街で生活用品の調達の後、森を抜ける。それと昨日みたいにロウに乗って移動することは少ない」

「そうなんですか？」

「ああ。ロウみたいなタイプは珍しいからな、目立つ」

「へえ」

と言つてロウティスを見る。ふと、「ティス」と呼んでみる。  
あ、ものすごく怪訝そうな顔した。やっぱりやめよう。

「ロウとは呼ばないのか？」

「バカ兄貴が滝月っていうんです。それでロウ兄って呼んでたのでなんか呼びにくくて」

「そうか」

そうなんです。

「まあいい。行くか」

「はい」

立ち上がり宿主に挨拶して、街に出た。

街は朝から賑っていて色んな所から声を掛けられる。

果物どうだいとか、兄ちゃんカツコイイねー安くするよーだとか、彼女ですか？だとか、一日どうですか？だとか・・・

そう！たえロウティスを肩に乗せていようとロウティスと頭が合体していようと、ガクさんの基本的なカツコ良さは変わらない！しみ出る色香は変わらないのだ！

しかしそれらの声を全て無視してズンズンと歩いて行くガクさん。

街を歩いていて気付いたのは目の色や髪の色は多種多様らしい。

中々カラフルな世界だ。黒目黒髪の方がめずらしいかもしれない。

横を歩くガクさんに声を掛ける。

「目や髪は色んな色なんですネ」

「そうだな。両親の色を受け継がない場合もある。ニホンという所は黒が多いのか？」

「はい。日本人は黒目黒髪が多いですね。染めたりカラーコンタクトで色を変えることはできますが」

「そうか。・・・あああそこだ」

どうやら目的地に着いたらしい。



## 08：買い物

「好きな服を買ってこい」

「え？」

そう言って袋を渡される。ジャラリ、と音が鳴った。

「足りなかったら言いに来い。外で待つ」

「ええ、そんな・・・」

「なんだ俺も行った方がいいのか？」

「あ、いやそうじゃなくて、お金・・・いいんですか？」

「ああ金か。気にするな。行け」

「・・・はい。ありがとうございます」

「ん」

「じゃあ行ってきます」

そういえば今着ているのはＴシャツにジーパンという、桜花が見

たら乙女としてあるまじき格好だ、と言っただろう。

店内に入ると色々な服が並んでいた。

手に持っている袋にはきつと相当なお金が入っている。

旅に適する服ってどんなのがいいんだろう。

店の人に聞いた方が早いかな？そう思い奥にいる店のお姉さんに声を掛ける。

「すみません」

「はい。いらっしやいませ」

「えっと、旅に合う服ってどんなものがいいですか？」

「旅？そうねえ・・・これはどう？」

ワンピースに似たものだったが中々動きやすそうだった。  
しかし・・・淡いピンク。似合うかな？

「試着してみてもいいですか？」

「ええ、こつちよ」

着てみるとサイズはぴったりであり待たせるのも悪いと思ったのでこれに決めた。

ついでに靴も選んでもらったが、お金が分からないことに気付いた。

「すみません、これで足りますか？」

とりあえず入っていたお札を2枚出してみた。ら、すごく驚いた顔をされたので多かつたんだと気付いた。

「1枚で十分よ。はいお釣り」

お姉さんが驚いた顔を見せたのは一瞬ですぐに笑顔で答えてくれた。

買った服と靴を身に付け、着ていた服はもらってもらった。

「ありがとうございますー」

お姉さんの元気な声を聞きながら店を出た。

ガクさんは近くのベンチで座っていて私に気付くと手招きした。

近くに行くのと横に座るよう促される。

相変わらずロウティスは肩だ。

「すみません、お待たせしました。あと、お金ありがとうございます」

普段着ない服を着ている所為かどことなく恥ずかしい。

ガクさんがチラッと視線を寄越し、私が差し出した袋を受け取る。

「いや、次は何が欲しい？色々要るだろう？」

そこまでしてもらっていいのだろうか。たしかに欲しい物はまだあるが・・・

「金なら気にするなよ？そんなに困ってない」

「あ、はい・・・？いや気が引けるっていうか」

「そうか？なら慣れろ」

若干ムチャクチャな気がするがでも買ってもらわなきゃ他にどうしようもない。

「じゃあお言葉に甘えて」

「ああ」



09：現れた女（前書き）

後半はガク視点。

## 09：現れた女

それからリュックを買ってもらって、食糧やら水やらを放り込んでいく。

あと、服をもつと買うぞと言われて、数着服と下着を買ってもらった。

もちろん下着は自分で選んだが服はガクさんが選んだ。結構セクシー系を選ぼうとするガクさんともうちょっと控えめがいい私とで、ちよつと対立したが無事、中間の服で和解した。

これから旅をするのにそんなに服を買ったら邪魔なんじゃ？と思つて聞いたら、空間に消すからいいのだと、よく分からないことを言われた。

そうそう生理用品も下着と共に売っていたので勝手に買ってリュックに入れておいた。

だって言いにくかつたんだもん。

その他適当にガクさんが買っていくからずつと見ていたが、買い物が終わった頃にはガクさんの両手に袋がいっぱいだった。（私は持たせてもらえなかった）

近くのベンチに座って一休みする。

「あと欲しい物はないか？」

「いえ、十分です」

「そうか。じゃあこの中から自分で持ちたいものだけ選べ。あとは消す」

消すの意味が分からなかったが、途中で買ってもらったお菓子とタオルをリュックに入れた。

「もういいです」

私がそう言うと、ガクさんが荷物に手をかざす。すると、フッと荷物が消えた。

「なんですか、今の？」

「ん？ああ魔法だ」

「すごいですね」

「そうか？ああそれとこれを付けておけ」

ガクさんから渡されたのはネックレスだった。あれ？このダイヤモンドの飾りどつかで・・・

ああ、ロウティスの額だ。

「きれいですね、これ・・・」

「ロウの額にあるのと同じで結晶プリズムと呼ばれる物だ。どんな物より硬く、決して割れることはない」

「いいんですか？」

「ああ、お守りとして持っとけ」

そのあと付けてもらい（もちろんドキドキした）いよいよ街を出る。

「森を抜けるのに数日掛かる。とりあえずフユイレスに向かってそれから後のことを決める」

「はい」

「行くぞ」

そうして私達は森の中へ足を踏み入れた。

捜している巨大魔獣は今日も見つからず、俺とロウはこれから街へ帰る所だった。

ロウを空へ放ち、一応いなか確認させる。奴等は戦闘力が高い上に知能も高い。もうここには留まっていけないだろうが。

すると突然、俺の目の前で何かが光りだした。ソレは段々と形を帯びて人になった。

何故いきなりこんな所に現れたのか、俺は珍しく固まってしまった。

だがそれも少しの間で、モンスターが近づいてくるを感じる。敵を見つけたら即襲い掛かる凶暴なグレストだ。比較的小さなグレストだったが、女を置いておくのはマズイ。

女に逃げると言ったが、そういえばここは森の奥だ。どこへ行っても危険。予想以上に俺は動揺しているようだった。

しかし女は動けないようだった。震えているのが分かる。しかたなくロウを呼ぶ。

悲鳴が聞こえたが、できれば静かに行っていたきたい。

空間から、さんだいほうりゅうかく三大宝龍角の一つと言われる切れ味抜群の王剣レストシェランを取り出し、グレストに向けて一発放つ。

最後に見たグレストの目には、目が金に光り青髪がなびいた額に、プリズム結晶が浮かぶ俺が映っていた。

そのままロウの位置を捜し、ロウが飛んでいった方向に走る。

近くなると目と髪を銀と黒に戻し、平然と現れる。

久しぶりに驚いた気がする。ロウが女に寄り添っていたのだ。ロウは警戒心が高く懐くのに時間はかかる。

ロウが飛んできた後女も走ってくる。

名前はヤツキと言うらしい。

宿に向かい話を聞くとどうも本当に異世界から来たみたいだ。あれだけの話で信じるのは早計かもしれないが、見る目には自信がある。それにこの女には何かを感じる。

恐らくヤツキの兄はこちらに來たことがある人間で、ヤツキも元はこちらの住人じゃないかと思う。

空間を移動する魔法もある。不可能ではないだろうが、かなり格の高い人間か？

旅が決まった夜、俺は宿を抜け、森へと向かった。少し入ると力を解放し結晶<sup>プリズム</sup>を作る。

その内ヴァルクにヤツキ<sup>コト</sup>の存在は伝わるだろう。見張りは付けていないだろうが、力を解放したから調べにくるはずだ。

大体俺がこんな所にいるのもヴァルクの所為だ。

いきなり“最低6ヶ月間旅に出て、女心を分かって来い”とか言っ  
て王の権限で城から追い出しやがった。意味が分からない。職務乱用だ。

しかし何故かテイルまで、というか周りの侍女達もノリノリだった。

テイルが前に、女の敵だ。とか言ってた気がするがやっぱり意味が分からない。

まあいい、後一ヶ月で半年だ。帰ったら問い詰めてやる。  
が、その前にヤツキだ。

一緒に旅をするのはいい。1人くらい問題ないし、守れる自信はある。しかし一ヶ月禁欲か。

俺が見てきた中でもヤツキは中々だ。だがまあ・・・大丈夫だろう。

俺のプリズムに呼応するように、春の夜空には満月が輝いていた。

## 09：現れた女（後書き）

今回はちよつと長めで、後半は初のガク視点です。  
設定を曖昧にししか決めてないので書く度に困る。



10：森

森の中は涼しかった。木々が生い茂り光を遮っているからだ。それは逆に空に出られないことも示していた。

先の見えない森を特に話すことなく黙々と進む。

聞きたい事はあったが、話しながら歩いて体力を消耗するのもしうかと思っただからだ。

ガクさんのスピードについていくのはつらかった。恐らくガクさんは遅めてくれているのだろうが、こんな所を歩いたこともない私は早々と疲れ始めていた。

休むか？とガクさんに数回聞かれたが私はそれを断っていた。ただでさえ迷惑をかけているのにさらにかけるのは嫌だった。

しかしその考えは些か浅はかだった。

昼とおやつ時に休憩を挟んだものの、慣れない私の足は夕暮れ時には震えだし悲鳴をあげていた。

これでは逆にこれからのスピードに支障が出てしまうだろう。

おかしい私に気付いたガクさんが近寄ってくる。

「どっした」

私は言い出せないでいた。うまくいかない自分が情けなくて仕方ない。

震えている足に気付いたのだろっ、休むぞと言われ、近くの小川まで引つ張ってもらった。

「すまない、無理をさせたな」

「いえっ、わたし、ホントにつ、「ごめんなさい」

泣けてきてうまく言えない。  
ガクさんは悪くないのに・・・

とりあえず足を浸けると言われ、靴を脱ぎ川に足を入れる。ひんやりとして気持ち良かった。

そのあとガクさんは、少し待てと言ってロウティスを私の元に置いてどこかに行ってしまった。

「グルルウ？」

「大丈夫、ごめんね」

「グルル」

ロウティスが心配そうに私を見る。

泣いていても仕方ない。私は元気がとりえ（なハズ）なのだ。  
気持ちを切り替える為に顔を洗おうと思いリュックからタオルを

取り出す。

川の水は澄んでいて洗うついでに飲んでみたが、おいしかった。

しばらくするとガクさんが帰ってきた。

そしてその手には焼いた肉が握られていた。

「食えるか？」

「はい」

疲れていても食欲はある。

もう一個あったよ私のとりえ。食欲だ！

いただきます、と言い一口かぶりついでみる。

「おいしい・・・」

「だろ？向こうから寄ってきてくれたんでな」

そう言つてガクさんは意地悪そうに笑った。ガクさんが笑うのは私の中で貴重だ。まだ会つて二日目だけだ。こんな人が学校にいたら絶対ファンクラブができてるだろうなあとボンヤリ考えているとお肉を落としそうになって慌てて持ち直した。

「今日はここまでだ。よくがんばったな」

「いえ、ごめんなさい」

「俺は急いでいないと言ったよな？それに森は多少危険があるが奥深くに入り込まなければそれほどだ。野宿は多くなるがな。俺は気にしない」

「はい。ありがとうございます」

心のモヤモヤは消えないがお礼を言う。

そうすると、ガクさんがふと優しく微笑む。あ、めっちゃめっちゃツコイイ。

「ヤツキ、途中で置いていくようなことも見捨てることもしない。俺を信じる。何も焦る必要はない」

「グル」

その顔でその言葉は反則だよ、ガクさん。ついでに（ゴメン）ロウティス。

コクコクと頷くとポンポンと頭に手を置かれる。  
あれ前にも同じことがあったような。

モヤモヤが消え心がみるみるうちに元気を取り戻す。が、根本的な問題は解決していない。

足は相変わらずイタイ。明日からどうしようか。

## 11：魔法

ガクさんが空間から寝袋を取り出す。あ、そんなサイズもイケるんですね。

「ん」

私に寝袋を差し出す。それを受け取ったが、もう一つ出す気配はない。

「ガクさんはどうするんですか？」

「俺は必要ない。元々おまえのだ」

てことは今日の買い物で買ってくれていたんだろうか。しかしやつぱり気が引ける。

そんな空気を感じ取ったのか

「遠慮するなよ」

とガクさんが言う。

私が何を言っても同じだろうから、ありがたく使わせてもらうことにする。

「ありがとうございます。えと、おやすみなさい？」

「ああ、・・・おやすみ」

『おやすみ』と返してくれたことが意外だった。だって今日の朝も、『ああ』だったし。

なんとなく嬉しくて笑みがこぼれた。

寝袋に入ると、一気に眠気が押し寄せるが、ロウティスは近くで寝ないのかとロウティスを見る。

それに気付いたガクさんがロウティスに声をかける。

「ロウ」

「・・・グル」

あれなんか間があつたよ？大丈夫だよロウティス君。同じ過ちは・・・するようないようなダケド。

ロウティスはパタパタと飛んできると私のお腹の上らへんで丸くなる。ああ、来てくれた。良かった。

「おやすみ、ロウティス」

「グル」

足の痛みに耐えながらふと気付く。確かに足は痛いけど外傷はなか

った。足を覆うものは靴以外身に付けていなかった。木の枝や大きな石もあったが手も足もケガをしていない。不思議に思いながらも意識は落ちていった。

ヤツキが寝たのを確認すると一息つく。ロウも静かに肩に移動してきた。

渡したプリズムの効力で肌を強くしているため、ちょっとしたことで外傷はできないが、逆に内側のことに気付きにくかった。

どうしたものか、あれでは明日は無理だろう。背負っていてもいいのだが、本人が納得するか・・・。

あまり人に頼らない性格なのか、何も言ってこない。

今まで女は適当に扱ってきたし向こうから勝手に寄ってきたのでそれでよかったのだが、ヤツキはあまり見ないタイプで戸惑う。

さつきも返事を返したら嬉しそうに笑っていた。

何がいいのか分からなかったが、ヴァルクの言っていたことを思い出し、返してみた。

ヤツキの笑顔を見た時、暖かい気持ちになったような気がしたが、なぜなんだろうか？

女にこれほど気を遣ったことはない。

寄って来る女の笑みには裏があるのがハッキリ分かってた。  
だから純粋な笑顔は珍しく動揺するのだと、そう結論付けた。

さてヤツキにはああ言ったが、實際夜の森は危ない。

一日で森を一気に抜けるのが一番良い。

ロウで飛ぶことも考えたが、この森ではきつい。空にも行けないし、木同士の間も狭い。ロウのサイズでは無理だ。

『どうするのだ？森を破壊するか？』

ロウの額が輝き、話しかけてくる。

「無闇にんなことできねえだろ」

『理由はあるではないか』

チラリとヤツキを見る。

「・・・焦るほどじゃない」

『そうか？だがあの娘・・・熱があるようだぞ？』

「早く言え」

『先程気付いた』



ヤツキの元に行き額に手を当てる。少し熱い。そういえば息も荒い。

思考に耽り過ぎて気付くのが遅れたか。恐らくこれから上がってくる。

「チッ、ロウ」

そう言つとロウがでかくなる。

俺は手を空にかざし、呪文を唱える。

「導かれし聖なる光よ、我と共に歩み、力を貸したまえ。光聖の初・  
デンコウハ【伝光波】！」

ゴオッ      ゴウンッ

派手な音と共に木が消滅する。

「ロウ」

「ゲル」

ロウの額は、すでに輝きを帯びてはいなかった。

## 11：魔法（後書き）

ロウテイス君しゃべれるんです。

あれ魔法が漢字？っていうのは気にしない。気にしない。

自然は大切に！

## 12：兄と姉

『　、気をつけるのよ』

『ママみて！きれい！！』

『ええ、そうね。私達の国の誇りよ』

『ほこり？』

『そうよ。ロイウェルトやギラティルト、そして　もいつか戻  
つて来て、この滝と月のように輝くのよ。分かった？』

『？、はあい』

『いい子ね』

．．．．．ん．．．．．夢？

あれは何？

あの女の子はダレ？

銀色に光るあの滝は？

ああダメだ、頭が痛い。

あれ？そういえば、ここは？

確か森で寝て・・・？

必死に思い出していると、ガチャと扉を開ける音がした。

「ヤツキ、起きたのか」

そう言ったガクさんの表情はホツとしているようにも疲れているようにも見えた。

上体を起こしガクさんに聞く。

「あ、はい。あの、ここは・・・？」

「フユイレスの宿だ。あの後、熱が出たんだ。だから・・・ロウで森を抜けた」

あの後というのは、森で眠った後のことだろう。  
熱なんて久しぶりだ。異世界へ来た反動だろうか？

「迷惑をかけてしまって申し訳ありません。ホントにありがとうございます」

ここまで度重なって迷惑をかけた女もいないのではないだろうか。  
だってガクさんで、周りから尽くされそうだ。

「そんなに畏まらなくてもいい。俺が思うままに行動しただけだ」

パツと見は少し冷たさを感じさせる二重の瞳も、今は穏やかに細められている。

今まで何人の女性が、この瞳に捕らえられてきたんだろうか。

私の心が警鐘を鳴らす。

困ったようにガクさんを見ていると

「まだ休んでいろ。3日も寝ていたんだ、起きてすぐに行動を起すのは危険だ」

「ええ、3日間ですか？」

「ああ、だからしばらく大人しくしている」

「はい……。あのロウティスは？」

「少し出ている。近く帰ってくるだろう」

「そうですか……」

「……」

少しの間、無言でこちらを見ていたガクさんだったが、不意に歩いて来てベッドの側にあったイスに座る。

「……寝るまでここにいます。ゆっくり休め」

驚いたが、素直に寝ることにする。

ふとんを被り目を閉じると、睡魔が襲ってきた。

まどろむ意識の中で、頭に暖かい手の感触と、良かったという声を聞いた気がした。

ローヴェンド

「随分と面白いことになっているようだ」

「何がですか？」

「ガクフォンスさ。この前森を中から無理矢理こじ開けたみたいだな」

「森を？守壁<sup>バリア</sup>を突き破ったと？」

「ああ。その代償に、毎晩力を返しに行っている」

「それはいつのことですか？」

「つい最近だ。バリアを破壊したのは3、4日前か。それも連れてくる女のためときたら面白い他ない」

「女性を連れて？それにしても情報が早いですね。そんなに可愛い弟が心配ですか？」

「何の話だ？わたしは楽しんでいるだけだ」

「・・・そうですか」

素直じゃないのはガクと同じだと、ティルフェミナは思う。

腹違いの銀髪の兄は5国で最も若く、それでいて賢王と言われる。まだ少し甘さを残すガクフォンスと違い、この兄は完成された美しさを持つ。

歳が少し離れている所為か、どうも小さい頃からガクと私に異常な過保護ぶりを見せている気がする。

本人曰く、“楽しんでる”らしいが。

そんな素直じゃない兄を見て育った所為か、ガクまでいつしか冷淡になっていた。

容姿は兄を越す勢いで成長を見せているようだが、気持ちの表現という面で少々問題が出ていた。

自分の容姿に興味がない分、気取らないのはいいのだが、周りにまで興味がない。

どんな美女が寄ってこようと、王女が寄ってこようと冷たい態度は変わらない。

苦情が相次いだ為、修行に出させようという結論に兄ヴァルクは至った。

それには賛成だった。確かにもう少し女心を理解して切り返しを巧くした方が良い。

やっぱり半分は同じ血が流れているんだろう、出発当日結局私も面白さ半分でガクを見送ったのだった。

それはそうと女性を連れているとは驚きだ。

これからどうなるのか、楽しそうに話す兄を見ると、ガクには悪いが同様に私も楽しくなってくる。

ローヴェンドは今日も平和だ。



### 13：一週間

次に目を覚ますと、ガクさんの姿はなかった。  
代わりにロウティスが枕元で寝ていた。

頭をそつと撫でてやると、クルウと寝言が返ってきた。ふふ、癒  
しだ。

しばらくそうしているとガクさんが入ってきた。

「起きたか。おはよう、ヤツキ」

「おはようございます、ガクさん」

「ロウ？寝ているのか」

「クルー」

「起きてんじゃねえか」

「グル」

「え、いつから？」

『つい先程』

「え！？ロウティスしゃべっ？！」

『くく、我は話せるぞ?』

「気が向けばだがな」

「ええええ、他のモンスターもしゃべれるんですか?」

「いや、知能が高い者だけだ。そいつらもロウみたいに完璧に言葉を操れるわけではない。ヤツキ、少し待っている」

そう言つと、ガクさんは部屋を出て行った。

「へえ、ロウティスすごいんだ」

「グル」

「あれ、もう終わり?」

「グル」

「また話そうね?」

「グル」

ああお腹空いた。3日間食べていないのだから当然か。なんて考えているとガクさんが戻ってきた。

「好きなものを食べ」

ガクさんの持ってきた皿には肉に野菜、果物、ミルクと色々並べられていた。

「わあ美味しそう。ありがとうございます」

「ああ」

「いただきます」

しばらく私の食べる様を見ていたがガクさんだったが不意に部屋を出て行った。

残された私は、特に考えず久しぶりの食事を堪能していた。

全て食べ終わりウトウトしていた所にガクさんは帰ってきた。そして何も乗っていない皿を見て驚いているようだった。

「全部食べれたのか」

「はい。美味しかったです」

「そうか、良かったな。一週間はここに滞在する。ゆっくり体調を戻せ」

「はい」

それから一週間は、ガクさんと街を散歩したり、時々ロウティスとしゃべったり、毎日同じような過ごし方だったがガクさんとロウティスに一步近づけた気がして有意義に感じられた。

「そろそろここを出るか」

一週間を過ぎた頃ガクさんは言った。

「次はどこに行くんですか？」

「ローヴェンドへ向かう。ここはフユイレスの端の方だ。2週間程度か」

「ローヴェンドへ何をしに行くんですか？」

「故郷へ帰るだけだ。訳あって旅をしていたが、その必要もなくなつた」

「？、そうなんですか」

「さあ行くぞ」

ロウティスが特等席へ向かう。やっぱりガクさんの肩が落ち着くようだ。

すると、宿を出た瞬間、複数の悲鳴が聞こえた。



## 14：クウェグリー

悲鳴が聞こえた方向からは人が押し寄せてくる。

「この気配、ゼッドヴァン巨大魔獣か」

「グル」

「しかも捜していた翼獣か」  
クウェグリー

「グルル」

ガクさんが呟く。

そこには顔と胴体が狼で尾が蛇のような生物がいた。ソレには立派な牙と翼が見えた。

大きさはライオンより2周以上大きい。

「空へ誘導するぞ」

「グル」

「ヤツキは逃げる。後で追っ」

「でもっ」

「心配ない。行け」

「・・・はい」

そう言つと私も人々に乗じて走り出す。

「グオオオオオー！」

「相手をしてやる。来い」

後ろで雄たけびと冷静な声が聞こえた。

私はやっぱり気になって足を止める。

振り向くと、大きくなったロウティスに乗り空へ飛び上がるガクさんとクウェグリーが見えた。

グアアアという咆哮と共に炎の玉が数個飛んでくる。

それをロウは器用に避けながら旋回する。それに合わせて詠唱を唱える。

「導かれし聖なる風よ、我と共に歩み、力を貸したまえ。風聖の初・  
シンブウハ  
【刃風破】」

風の刃が、クウエグリーを襲う。

しかしクウエグリーも炎の玉で相殺し、同時に尾から雷を吐き出す。

「グルウ、グーグー」

「かすっただけだろ、文句言っな。というかもうちよっとやる気を出せ」

そう言つとロウの額が光りだす。

『それはおまえだろう。早くプリズムを発動させたら良いではないか。何を嫌う』

「バレたら面倒なのは知ってるだろ」

『自国へ帰れば良い』

「できたら帰ってる」



『あの娘も居ることだし入れてくれるだろう』

「ヤツキ？なぜ」

『今までの経験から・・・おっと危ない。とにかくプリズムを出せ』

「チツ、まあ確かに戦いにくくてしょうがない」

『であるっ？ではがんばれ』

ロウの言葉に溜息を吐くと額に集中する。

額にプリズムが現れ、力がみなぎるのが分かる。

ロウの背を蹴り、クウェグリーの正面に止まった。

すると下から歓声が沸いた。

## 15：英雄（前書き）

残酷な描写あり？

## 15：英雄

え、あれガクさん？

なんだかロウティスと言いついていたガクさんは突然、瞳が金色になり髪も青くなった。

その瞬間、いたる所から歓声が上がる。

「ローヴェンドのガクフォンス様だ！！」

「ガクフォンス様！」

「これでもう安心だ！」

「ガクフォンス様ー！」

ええ？何々？どうしたの？ガクフォンスサマ？

え、ガクさんのこと、だよな？

本名ガクフォンスなの！？ていうか、様って何！？

内心でパニックしていると、ロウティスが私の元へ降りてきた。

「え、ちよつとロウティス！ガクさんて何者なの？！」

『ガクフォンスはローヴェンドの王子だ。世間からは英雄とも呼ばれているな』

「王子！？英雄！？うそおー！だって森にいたよ？王子が1人であんな所いるもんなの？！」

『その話しは後だ』

色々とショックが大きい。でも今はガクさんの応援だ。  
みんな声を上げてるし、私もそうしよう。

「ガクさん、がんばってー！」

「雷聖の中・【飛震雷】<sup>ヒシンライ</sup>」

プリズムを発動したお陰で魔法の詠唱もいらなし、自由に飛んでいられる。

「オオオオオウー!!」

「風聖の中・【守風】<sup>シュフウ</sup>」

さて、今日は遊んでいる場合じゃないか。  
空間から、王剣<sup>レストシエラン</sup>を出し、切っ先に手を当て爆気系呪文<sup>アルテア</sup>を唱える。

「悪いな、遊びは終わりだ」

「ガアアアアア！」

向かってくるクウエグリーに向かってアルテアを纏った剣を一振りした。

ドオン、という音と共に下から歓声が上がる。

珍しい気配のモンスターだったから捜していたが、別段特別なこともなかったな。

と、思っていたら・・・

ガンツ、と強い衝撃が体に走った。下へ激突する寸前でロウが受け止めた。

「ぐっ、」

「フハハハ、ユダンシタナ！」

何だ？まさか、その場で転生するタイプか？言葉も話せるようになってる。

上昇するロウの背で体制を整える。

『油断大敵だな』

「チッ、水聖の中・【復水】<sup>フクスイ</sup>」

傷を負った箇所へ、瞬間的に手当てを施す。  
しばらくは持つだろう。

「ロウ、ここら一帯にデカい防<sup>バリア</sup>御壁を張れ」

『・・・御意』

ロウから離れ、再びクウエグリーの正面に立つ。

「新しいタイプか」

「フフフフ、オドロイタダロウ？ユカイダ！」

言語力も上がったか？

「愉快そうな所悪いが、準備が整ったようなのでな。消えてもらっ

「オマエガキエロ!!」

ふむ、ロートにするか。

「クレファリナー!!プリズムより生まれし炎の鳥<sup>ちゅうしんわう</sup>神竜、ロート・クレファリナー・シャロー。今こそ時空を越え、我に力を貸したまえ」

そう唱えるとレストシエランが形を変える。

「『姿を変えし激情よ、炎華になりて乱れ咲け』」

そして炎が剣を包みだす。

「エンエンカ【炎々華】！！」

炎を纏った斬撃はクウエグリーに当たった瞬間、大きく火花が燃え、やがて華が咲くように広がる。

それが消える頃にはクウエグリーの姿はどこにもなかった。

下からは歓声と感嘆の聲が沸き起こった。

## 15：英雄（後書き）

【炎々華】のイメージは椿です。



## 16：兄と弟

炎の華が咲いた。

花火みたいで綺麗だった。

上空にいるガクさんは私の知っているガクさんとは別人に感じた。  
圧倒的なオーラが溢れている。

金色の瞳がこちらを見下ろす。目が合うと思わず慌てて逸らしてしまった。

ロウティスの鳴き声と共に降りてくる気配を感じて、俯く。なんだろう、何か気恥ずかしい。

「ヤツキ」

降りてきたガクさんが私に声を掛ける。

顔を上げるのを躊躇していると

「ヤツキ、恐いか？」

優しい声色でガクさんが問う。  
その声にパツ、と顔を上げ否定する。

「恐くなんかありません！ただ・・・」

「ただ？」

「い、いやなんでもありません」

顔を上げたはいいが、予想外に近かった上に、本当の姿であろう  
ガクさんは魅力が増していて顔が火照る。

それにこの気持ちをどう表したらいいのかわからない。

「とにかく、恐くはありません」

「そうか」

そう言うってガクさんは金の目を細め嬉しそうに微笑んだ。直視で  
きなくて、また俯き加減になる。

そうか、最初に感じた違和感に変装していたからなんだ。

金の瞳と深海を思わせる青髪は、ガクさんに本当に似合っている。

突然ガクさんが若干嫌そうに呟く。

「ヴァルク・・・」

「グル」

ロウティスも呟いた（？）直後、上空から雄たけびと上空に向け

た人々の歓声が聞こえた。

驚いて顔を上げる。上空にはドラゴンのような生物とそれに乗る金の瞳と長い銀髪を揺らす男が見えた。

「ヴァルク様ー！」

「ヴァルク様ー！」

「キャー、カッコイイー！」

「ヴァルク様ー！」

ガクさんの時も凄かったが、今回はなんだか黄色い歓声が多いような？

と、ヴァルクと呼ばれた男性が突然飛び降り、私たちの近くに着地する。え、足は無事なんですか？

周りからは、よりいっそう歓声が上がる。

「久しぶりだな、ガクフォンス」

「おかげさまでな」

「くく、ところでそちらの女性は？私はヴァルクだ」

「おまえには関係ない」

私も挨拶をしようとしたらガクさんが、ヴァルクさんと私の間に立ちふさがる。

「仮にも一国の王に向かって、いやその前にお兄様に向かっておま

えとはずいぶんじゃないか？」

「え、王様！？ていうかガクさんのお兄さん！？」

思わずガクさんの背中から覗いて叫ぶと、2つの金色の瞳に見下ろされる。

うおう、迫力満点。言われてみれば似ているかも。ほら、この威圧感とか。

「ヤツキ、こんな奴に構わなくていい。行くぞ」

「待て待て、ではその娘のことは後にしてやる。とりあえずローヴエンドに帰るぞ」

「どついう風の吹き回しだ」

「お優しい兄上様が半年の期限を縮めてやると言っているのだ。大人しくついて来い。勿論、娘も一緒でよい」

方や愉快げな金。方や不満げな金。

「グル、グル」

黙るガクさんを、ロウティスがつつく。

「ロウもそう言っているではないか。早く行くぞ。おまえもこの場には長居したくはないだろう？」

『十分長居しておるがな』

「黙れロウ」

につこりと笑ってヴァルクさんが即座に言い放つ。

ロウティスもヴァルクさんも、くくくく笑っている。恐い、リアルホラーだ。

ガクさんの袖をちよいと握ると、金色の瞳が動く。

あやす様に頭に乗せられた手に安心感を感じる。

その後、一つ溜息をつくとヴァルクさんに向き直る。

「ならさつさと行くぞ。それと2人共その笑いをやめろ。ヤツキが恐がっている」

「それは失礼した。では行くぞ。グレスティーン！」

「ギャルル」

ほう、あの胸の長いドラゴンはグレスティーンというのかい。中々・・・なんというか合っているのかいないのか。

グレスティーンが側に降りてきて、ヴァルクさんが飛び乗る。

私はどうしたいいのかと思っていると突然浮遊感を感じる。

ガクさんが、乙女の夢・・・所謂、お姫様抱っこをしてくれていたのだ。

そう認識した瞬間、顔の熱が急激に上がるのが分かる。

「首に手をかける」

こんな時にそんなこと言われても！

「落ちたいのか？」

いや、落ちたくはないです。

おずおずとガクさんの首に手をかけると、行くぞと言ってガクさんは飛び上がる。

グレスティーヌの上に着くと、私を降ろし自分の前に座らせる。

そして今度は腰に手を回してきた。

さっきからイロイロ限界なんですけど、私。ロウティスー助けてー、なんて心の中で叫んでも聞こえるわけなく、いつも通りロウティスは特等席へ。

しかしそんな寿命の縮まるようなドキドキも、グレスティーヌが動き始めるとそれどころではなかった。

そう、グレスティーヌは超<sup>リンド＝ヴルム</sup>高速竜だったのだ。

## 16・兄と弟（後書き）

夜月ちゃんの視力は2・0。

## 17:ローヴェンド

「・・・ヤツキ？大丈夫か？」

「ちょ、ちょっと時間を、くだ、さい」

グレスティーヌに乗り超スピードで飛行して、ローヴェンドの城の飛行場へと無事着いた。

しかし、何の覚悟もしていなかった夜月には、あのスピードは堪えた。

グレスティーヌに降りた後フラつく夜月にガクが声をかけたのだった。

「・・・大丈夫か？」

しばらく経ってからガクさんが再び聞いてきた。

「はい。大分楽になりました」



「そうか。グレスティーヌが喜んでいたみたいだからな。あのよう  
な飛行になったんだろう」

あのような飛行、とはやはりグネグネ飛行だろうか。

雄たけび（ガクさん曰く喜びの声）をあげながら顔を上下させて  
飛ぶもんだから、胴体もそれに合わせて動く。加えてあのスピード  
なのに何故ガクさんやヴァルクさんが平気なのか不思議だ。

ともあれ、乗せてくれたお礼はいうべきだと思い、グレスティー  
ヌに向き直る。

「ありがとう、グレスティーヌ。・・・でも今度はもうちょっとゆ  
っくり乗せてもらいたいな」

「ギャルル・・・グギャル！」

「？」

「悪かった、今度は任せろ、と」

いきなり横からヴァルクさんの声がして、そちらを向く。

「言葉が分かるんですか？」

「大体な」

かわいいだろう？といいながらグレスティーヌを撫でるヴァルク

さん。

かわいい、のか？

「超高速竜リンドーヴルムといってな。グレスティーヌは希少種なんだ」

「へえ。誰が名付けたんですか？」

「私だ。本名はグレスティーヌ・リンド・クエル・アルシエイ・ヴィジアンヌと言う。略してグレスティーヌだ」

な、長っ！しかも微妙な略し方してあるのね。

「良い名だろう？」

「え、ええとても」

ひたすら覚えにくいですけど。

どっちかっていうと覚えてるヴァルクさんにびっくりなんですけど。

「もう1頭いるんだ。ハイウェイド・ヴルム・スイーザ・アン・グライク・ラスといってな。ハイウェイドは雄オスなんだが、見ていくか？」

こっちも負けず劣らず長い。

なんだかヴァルクさんの瞳が輝いているような……。ていうかグレスティーヌは雌メスなのね。

「ヴァルク、それは今度でいいだろう」

「グル」

「む、まあしょうがない。今度で良いか。では行くぞ」

するとグレスティーヌはどこかへ飛んでいった。

お城は白を基調とした明るめの色でできあがっていた。豪華過ぎず派手過ぎず質素過ぎずの目に優しい感じである。

キョロキョロしながら着いていっていると、王の間に通された。

そこには、ゆるいカーブをした金髪の美女がいた。ガクさんとヴァルクさんと同じく金色の瞳だ。

「まあ、ガクフォンス！久しぶりね」

「ああ」

「そちらが兄上のおっしゃっていた方ね？」

「ああ。ヤツキだ」

「ヤツキさん、ガクがお世話になったわ。私はガクの姉のティルフ  
エミナ・ローヴェンドです。ティルと呼んでくださいな。よろしく  
ね」

「お世話だなんて全然、むしろいつもお世話してもらってます！こ  
ちらこそよろしく願います！」

「ふふ、可愛い子ね。ガク？」

かわいい！？てかそこでガクさんに振るの！？

「……………そうだな」

そうなの！？いや、ものすごい間があったけど。

ティルさんの方が何倍も可愛いもんね。

美しいというよりは可愛いという表現の方が合う人だ。

美しいという表現が一番合っているのはヴァルクさんだろう。

ガクさんはとにかくカッコ良い。

素晴らしい美貌の兄弟だ。

## 17:ローヴェンド（後書き）

グレスティーンとハイウェイドの名前ムダに長くね？なんて言わないで。

単に言わせてみたかったです、ヴァルクに。

ホント言うど気に入っちゃってるんです、私が。

いつか2頭の番外編が書きたい。

お気に入り登録やら何やらしていただくと物凄く励みになります！  
今後とも（気だるげな）応援よろしくです。

## 18：夜の会談

ティルと再開した後、そのまま4人でお茶会となり、俺も洪々付き合った。

だが、ヤツキが楽しそうに笑っていたから悪くもなかったと思う。

それも終わるとヤツキに城を案内し、一々反応を見せるヤツキを新鮮に感じながら案内し終わった頃には、日も暮れていた。

まだ行っていない場所もあったが今度でいいだろう。

4人で夕食を食べ、まだ見せていなかったヤツキの部屋を見せると、今日一番の笑顔が返ってきた。

何かが胸に沸き起こるのを感じたが、無視してヤツキの頭を撫でながら、良かったなと言うとロウと共にヴァルクの部屋へ向かった。後から来いと言われていたのだ。

扉の前に立ち、気配で分かっているだろうが一応中に声を掛ける。

「ヴァルク、入るぞ」

「ああ」

扉を開けヴァルクが座っている長椅子の向かい側の長椅子へ座る。  
間にある机には書類と酒が置いてあった。

「で、何の用だ」

「おまえ、兄上様に向かってその言葉遣いはどうにかならないのか」

「今更だろう」

「それもそうだ」

「で？」

「ガク、女心を理解する所か手に入れてくるとは、旅の成果もあつたな」

「そんな話なのか。大体ヤツキは俺のじゃない。たまたま異世界から来たあいつを保護しただけだ」

「……ガク、おまえ気付いていないのか？」

「何がだ」

「本当にか」

「だから何が」

『ヴァルク、ガクは本当に気付いておらぬぞ』

「いや、そうか。まああの頃のおまえは女性に疎かったからな。今もだが」

「いい加減斬るぞ」

「明日の朝、手合わせをしてやるからそれまで待て」

「誰も頼んでいないんだが」

「いいではないか。ところでロウは気付いていたのか」

『ああ。力は戻っていないようだがな。これから取り戻すだろう』

「ふむ。ガク、話しはもう一つある。シリーズの王と王妃が帰って来た。10年ぶり、いやもっとか」

「シリーズの？いつだ」

「ちょうどおまえが旅に出たぐらいか。近々ヤツキを連れて挨拶へ行つて来い」

「何故ヤツキを連れて行く」

「いいから、グレスティーンに乗って三つ滝<sup>みつたき</sup>でも見せて来い。良いな？」

「・・・ああ」



シリーズか。久しぶりに行く。あそこの3つの滝は有名だ。夜に見ると神秘的な光を帯びる。

「そうそう、ロイとギラも戻って来たと」

「そうか。あいつらも久しぶりだな」

「時空を操れるからな。好きにまた姿を消すかもな」

「あれも万能じゃない。しばらくはこっちに居るだろう」

「だろうな・・・」

結局その日はヴァルクとロウと語り通した。と言っても酒の間にポツリポツリとだが。

余計な事を言った気がしなくもない。酒には強いのだがな。

久々の城に、無意識に安心感を覚えながら酒も尽きた頃、意識を手放した。

## 19：自覚

ドオンッ！

ガキイン！

ガン！

ガゴオオン！

おおおおっ！

「・・・うるさい」

せっかく人が気持ち良く寝ていたのに邪魔するのは誰だ、と安眠を妨げた原因の音を探す。

・・・朝からヘビーなものを見た。

ガクさんとヴァルクさんが上半身裸で死闘を繰り広げ、外野で大量の兵士達が遠巻きに応援している、そんな状況を朝からガッツリ見るものではない。

何なんだろう。兄弟ゲンカでもしたんだろうか。

もう一度寝ようにも気になって眠れないので侍女を呼ぶ。

突然来た私に、侍女なんて申し訳ないと断ったのだが、ガクさんに押し切られた。

入ってきたのは私と同年のリヂェンダ。昨日ですっかり仲良くなつた。

160cmの私より低くて150cmだそうだ。

小さくってかわいいのだが、やることはテキパキしている。

「おはようございます、ヤツキ様」

「おはよう、リヂェ。やっぱりそれ、やめれない？」

それ、とは敬語と様付けのことだ。

「もう癖みたいなのなので・・・」

昨日も粘ったのだが、困った風に言うリヂェを見るとそれ以上は言えない。

「分かった。ごめんね」

「いえ、こちらこそ申し訳ございません。それにヤツキ様はガクフオンス様の大事な方ですので」

「ガクさんの？」

驚いて真顔で聞き返す。

「はい。ガクフオンス様が女性に優しく接しておられる所を初めてお見受けしました」

「え？ガクさんいつも優しくかったよ？」

「ふふ、それがヤツキ様だけなのですわ」

そうかなあ。そんなことないと思うけど。

「ヤツキ様はガクフオンス様をどうお思いですか？」

「どうって……優しくて、頼れて、カッコ良くて、何でもできて……」

「はい」

「近くにいるけど届かない……雲の上の存在、かな？」

「何故届かないと思われるんです?」

「うーん、あれだけ容姿が完璧で性格も良いつてくれば釣り合わないよ」

「そう思われるということは、ヤツキ様は届きたいと思われるんですね?」

「え?・・・うん」

初めて気持ちを認めた。ずっと警鐘を鳴らし続けていた心。誤魔化すのは限界だった。

「でも伝える気はないよ?」

結果が分かっているのに挑戦するようなチャレンジ精神はない。

「そうですか・・・」

残念そうにリヂエが言う。

「さあ!もう一度お眠りになる気はないようですし、着替えましょうか」

リヂエが少し重くなった空気を払うように元気に言う。

「あ、そうそう。あれを見に行きたくって」

「あれをですか？」

「うん。でも行き方分からないから・・・」

「了解しました。ではパパッと着替えて、参りましょう」

## 19：自覚（後書き）

ガク様にしようかガクフオンス様にしようか10分悩みました。あー、どーでもいいですか？もーしわからない。

ついでにリヂェンダにしようかリヂェンダにしようかも悩みました。あ、これもどーでもいいですか？もーしわからない。

## 20：兄弟のじゃれあい

ガンッ！

「腕は落ちていないようだな。安心したぞ」

「誰に向かって言っただ、当たり前だろ！」

ギン！

「旅に出ていたんだ、落ちるわけないだろ」

「旅と言っても相手をしていたのは所詮雑魚だろっ」

ギギ・・・！

「ゼッドヴァンも相手しただろうが」

「アレだけであろう。あとは女に現ヤツキを抜かしておったのかと」

ガゴン！

「バカ言え、あいつはそんなんじゃないと言っただろ！」



「ふむ、感情が豊かになったなガクフォンス。兄上はうれしいぞ」

ドガン！

「気色悪いこと言ってんじゃねえ！」

「兄に向かって気色悪いとは・・・私はそんな風に育てた覚えはない」

おおおお！（外野）

「いや確かに育ててもらってはないが・・・見てはきたぞ！好き放題、女とモンスターを狩っている所をな！」

「バカ者！女とモンスターを一緒にするな。大体な、女は狩ってもいたが・・・主に飼っていたんだ！」

「アホか！」

「あれは何、日常なの？」

「はい。兄弟の親睦を深めているのですわ」

「へえ……………」

兄上はうれしいぞ、辺りから聞いていたのだが、バカな会話とは思えな……失礼。素敵なじゃれあいだと思ひマス。

ガギン

「さて、そろそろ本気といこうか、ガクフォンス？」

「ふっ、相手してやるよ」

「くくっ、減らず口が」

「偉大な兄上様を見て育ったもんでな」

「うむ、やはり育て方を間違えた」

「だから、おまえには育ててもらってねえ」

「まあ良い。行くぞ」

「来い」

ヴァルクの額と俺の額にプリズムが現れる。

外野からは割れんばかりの歓声。防御壁を俺とヴァルクを囲むように広範囲に張ってあるが、音は防げないからな。うるさい。

「剣はどうする？」

「能力を発動したら、バリアの意味がなくなるぞ」

「そうだな。発動はなし、召喚のみだな」

「分かった。・・・来い、王剣」  
レストシエラン

「かい解せ、メディメフィユス死剣」

今まで持っていた剣は消え、2人の手に新たな剣が握られる。

久しぶりの高揚感。ヴァルクも同じだろう。目がギラついている。

ロウが高らかと吼えた瞬間、2人同時に地を蹴った。

## 21：兄弟の行き過ぎた戯れ（前書き）

すごく分かり難いです、スイマセン。ステキな想像力で乗り切ってください。

## 21：兄弟の行き過ぎた戯れ

ガン！ギン、ギイン！

反動を利用し、後ろへ飛ぶ。同時に剣を持っていない手で魔法を作る。

「光聖の初・デンコウハ【伝光波】」

「雷聖の初・ウライ【迂雷】」

俺が放った光とヴァルクの放った雷がぶつかり合い、爆発を起こす。

煙が充満するが、今の俺たちには問題ない。

プリズムは視力も聴力も飛躍的に上げる。正確に言えば、プリズムが確認するものを通して感じている。

この力はローヴェンドの王族にしか現れない、特殊な力だった。しかし、王族全員が所持しているわけではなく、どちらかと言えば所持している者の方が少ない。

さらに三大宝龍角と呼ばれる三つの剣、レストシエラメデイメフィエヌスメランテ王剣・死剣・純剣はその中でも主を選ぶ。

主となる者が生まれた時、自然に傍に現れるのだ。

そしてレストシエランを俺が、メディメフィユスをヴァルクが所有していた。

影が動く。火の力を感じる。弱いな、炎聖の初か。  
なら、避けて切り込む！

ボボツ、ボボボツ

予想通り向かって来た火の玉を避け、ヴァルクに切り込む。  
ところが火の玉は大きくなり、方向転換して向かってくる。

炎聖の中か！

「くく、騙されただろう？わざと力を弱めて撃ったからな」

「チツ、風聖の中・【守風】<sup>シュフウ</sup>」

風の壁が包み込む。その外から炎が被さる。

どうしようか。ゾルトにするか？いや少し危険か。ほぼ無差別だからな。

よし、イフィスに決めた。

外から風神の詠唱の波動を感じる。あっちはウィールか。

芸はヴァルクのが巧いが、力勝負なら俺。

イフィスで勝負だ。

「シルティス・プリズムより生まれし光の鳥神竜、イフィス・シルティス・ファア。今こそ時空を越え我に力を貸したまえ」

レストシェランがファア（イフィスの剣）へと形を変える。

「『進む無数の光よ、四方八方を包み込め』  
【光麗衝】<sup>「ウレイショウ」</sup>！！」

光を帯びたレストシェラン（今はファア）をヴァルクの気配のする方へと一振りする。

光の斬撃は守風と炎を突き破り、複数へ散らばる。

開けた視界には無数の風の刃が視える。普通なら見えないだろうが、流石はプリズムだ。

召喚まで使って‘手合わせ’は、行き過ぎと分かっているのだが、どちらも久々の興奮を抑えきれない。

さあ、俺の光がヴァルクの風か。

と、構えていると突然別の気配を感じる。

「純志を示せ、『シアスメランテ純剣』」

パリン、とバリアが破壊され、斬撃が飛んでくる。

「っ、」

顔のすぐ側に衝撃が落ち、地面を抉る。  
避け損ねた。1本か2本、線が入ったな。

そしてその斬撃を容赦なく叩き込んだのは……シアスメランテの所有者、ティルフエミナだった。

「朝から2人して何をしているのです？手合わせは構いません。ですが両者が、剣とはいえ神々を召喚するとは少々やり過ぎでは？いえ、迷惑です。破壊する気ですか。久々で嬉しいのは分かりますが、限度を考えなさい。お分かりで？」

「あ、ああ」

「……ん、悪かった」

ヴァルクも怒ったティルには敵わない。大人しくしておくのが一番だと知っている。

冷静になり、一気に気持ち冷める。



どちらとも放った攻撃は既に消していた。

「ガク、今日は終わりだ。では」

ヴァルクが逃げるようにして去っていった。

「俺も戻るか。悪かったな、テイル」

「分かればいいのです。・・・楽しかったですか？」

「ああ。次が楽しみだ」

今日はやり過ぎたが、プリズムぐらいならいいだろう。  
そんなことを思いながら城へ戻った。

## 21：兄弟の行き過ぎた戯れ（後書き）

鳥神竜の名前の最後の部分はその鳥神竜の持つ剣の名前です。

イフィス・シルティス・ファアーなら、剣〃ファアーですね。

ウィールはウィール・エフィズ・クライマリーなので、剣〃クライマリーです。

## 22：三大宝龍角

ヴァルクさんとガクさんが城に戻るのを見て、私たちも部屋へ戻ることにした。

途中までの会話は置いて・・・手合わせはすごかった。

リヂェ曰く、今日は特別白熱していたらしいが、とにかく迫力がハンパなかった。

にしてもティルさんが止めに入るなんて予想外だった。

剣とは無縁に見えるのに、2人が暴れて（失礼）いても壊れなかったバリアを一瞬で破ったのだ。

「ティルさんもすごいんだね・・・」

「ティルフェミナ様も三大宝龍角所持者でございますからね。この国で三番目にお強いですよ」

「三大宝龍角？」

「はい。<sup>ヴァージス</sup>龍神の角は三本あったと言われ、メディメフィユス・レストシエラン・シアスメランテはそれぞれの角が元だと言い伝えられています。そしてその3つの伝説の剣を三大宝龍角と呼ぶのです」

「へえ。ティルさんが三番目ってことは・・・」

「はい。ヴァルク様とガクフォンス様が上におられます」

「どっちが強いの？」

そう問うとリチエは困った顔をする。

「・・・このローヴェンドは身分に関係なく、強いものが国を治めると定められています。なので、現国王であるヴァルク様が一番強いという事になります・・・」

「？」

「私共にはヴァルク様も、ガクフォンス様も、ティルフェミナ様も同じように‘強い’としか分からないのです。ですが以前、ティルフェミナ様が‘あの2人は化け物だ’とおっしゃっていました。結局、強い者にしか本当の強さは分からないので、私共には判断のしようがないんです」

「なるほど」

「詳しいことはガクフォンス様にお聞きしてみたらどうですか？」

「うん、そうする」

「何が聞きたいって？」

「わっ、びっくりした」

角を曲がったら、未だ上半身裸＋額が光っているガクさんが現れた。リチエは気付いていたのかクスクス笑っている。

ガクさん服着てると細く見えるけど、腹筋割れてるし、案外がっしりしてるんだなあ。って変態か私は。

「・・・ガクさん、戻ったんじゃない？」

「ああ。だが、ヤツキの気配を感じたから引き返してきた。後で話しがある。朝食後、王の間に来い」

「はい。朝食は皆さん別なんですか？」

「ああ、朝は個人の自由になっている。それじゃあまた後でな」

「はい」

するとガクさんが私の前から消える。

「魔法？」

「というよりもプリズムの力ですね」

「プリズムって・・・これ？」

そう言ってリヂェに、ガクさんから貰ったネックレスの飾りを見せる。

普段は服の下で見えないのだ。

「！それは・・・ガクフォンス様に？」

「うん、お守りとしてって。そんなにすごい物なの？」

「はい、プリズムは身体能力を異常に上げるそうです。ですがプリズムは生来額に持っているもので、そのようなものは初めて見ました」

「へえ・・・これも聞いたこと」

その後世間話をしながら部屋に戻り、既に準備のしてもらった朝食を食べた。

やっぱり肉だね。

朝食後王の間へ行くと、ガクさんだけかと思っていたら、ヴァルクさんとティルさんもいた。

リヂェは一礼すると退室していった。

心なしかヴァルクさんが、にやにやしているように見えるのは気のせいだろうか。

そして何故、2人共髪から水が滴っているのだろうか。いや、力ツコ良いけどさ。水も滴るいい男ってのはこの2人のことだね。

でも気になるんだよね。

「あの、髪乾かさないんですか？」

「ん？ああこのバカの所為で」

「おまえ兄上様に向かって・・・いやもういい。・・・髪はそうち乾く」

「でもガクさんは短いですけど、ヴァルクさんは・・・」

ヴァルクさんのキレイな銀髪は腰のあたりまで伸びている。

自然乾燥には時間がかかるんじゃない？と思っているとヴァルクさんの額が輝き出す。

「大丈夫だ。数分後には乾いている。プリズムは万能だ」

え、そこで使えますか？

## 23：兄弟の反省会

ヤツキと別れた後、大浴場へ向かう。

手合わせの時は、上は脱いでやる。ベタベタになるのが分かっているからだ。

大浴場には、既にヴァルクの気配を感じていた。

部屋に風呂はあるが、幼い頃から手合わせをした後は大浴場へ向かっていた。

それは今も、暗黙の了解のように続けられている。

服を脱ぎ、ガララとドアを開けると案の定、浴槽に浸りこちらに背を向けたヴァルクがいた。

「遅かったな。ヤツキにでも会っていたか？」

「関係ないだろう」

そう返すとシャワーのある方へ向かう。

俺が身体を洗っている間、ヴァルクは何も話しかけてこなかった。あいつは湯に浸かっている時間が長い。のぼせないのが不思議なくらいに。

俺も長い方らしいが、あいつには勝てない。そこは譲ろう。



しかし今日はゆっくりしてられない。  
ヤツキを王の間に呼んでいるからだ。

一通り洗うと浴槽へ浸かる。急いでもいいこれは抜けない。  
ヴァルクとは5人分程距離を開けた。

するとヴァルクがこちらを見てにやり、と笑う。  
ああ嫌な予感しかない。まったく面倒臭い。

「ガク、顔の傷が治っているぞ。ヤツキに会う為に治したのだろうか？」

ほら、的中。人にちょっかいを出すのがそんなに楽しいか。

「さあな」

「くく、今日は一段と興奮していたな？ヤツキがいたからか？」

いかがわしい言い方をするな。

「アホか。おまえだって目がギラついてたじゃねえか」

「ヤツキが見ていたからな」

意味が分からない。いや、恐らくからかっているんだろうが、  
— 応釘を差しておく。

「あいつには手を出すなよ」

「さあな、私の勝手だろう」

「ヴァルク」

声が低くなり、苛立ちが籠ったのが自分でも分かる。

「くくく、本当に感情が豊かになったな。いいことだ」

これ以上は無駄だと、舌打ちを一つこぼして湯から上がる。

「ガク、しっかり捕らえておけよ？その方が奪い甲斐がある」

前ならば無視したが、今は無性に腹が立った。

無意識に、額のプリズムが輝きだす。

するとヴァルクの目が、射るように細くなる。次いでプリズムが現れる。

「どうした、感情の抑制が出来ないか？以前ならこれくらいで怒りはしなかっただろう」

「うるせえ」

「何故だろうな？」

「知るか」

「もたもたしていると他の男に穢されるぞ。いや・・・私が穢してやるつか？」

「ヴァルク！！・・・王<sup>おう</sup>誇<sup>こ</sup>よ来い！」

そう叫ぶとレストシェランが現れ、ヴァルクも立ち上がる。

「死徒<sup>しと</sup>に解<sup>かい</sup>せ、」

「レスト・・・」

「メデイ・・・」

ガラララッ、ガシャンッ！！

「いい加減になさい！」

2人が斬りかかろうというところで、ドアを物凄い勢いで開けたのは、額にプリズムを光らせたティルだった。

「メ・イ・ワ・クです。よろしくて？」

目が、目が笑ってないよ、ティル。危険ゾーンだ。

とりあえず一つ息を吐き、レストシエランを消し、プリズムも戻す。

「・・・うむ」

「・・・悪い」

2人してそう言うと、ティルはシャワーを2つ持ち、水量を最大にしてそれぞれにぶっかけてきた。

・・・冷たい。

「ティル、冷える。落ち着け」

ヴァルクが冷静に言う。ちゃっかり浴槽に浸かりながら。

「落ち着くのは貴方達です。頭を冷やすには丁度良いでしょう」

「落ち着いた。だからもういい」

「いえ、まだです」

・・・。

冷水を頭から被った俺は、冷静になり、時間が迫っていることを思い出した。

「ティル・・・」

そう言うと、ティルはシャワーを止めた。

「落ち着きましたか？」

「ああ、悪かった」

「では行きなさい。そろそろ来る頃では？」

「忘れていた、私も行こう。ああ、そうだガク。先程のは冗談だ、精々がんばれ。」

こみ上げて来る、なんとも言えない感情を無理矢理抑えると、濡れている髪もそのままに、大浴場を後にした。

「何を弟いじめなさっているのです？」

「くくっ、背中を押してやっただけだ」

「随分と雑ですね。もう少し素直に、穏便にできないですか？」

「ふつ、本当に奪ってみようか」

「どうでしょう？・・・ガクは容姿面でも性格面でも成長を見せているようですが、そろそろお兄様も容姿は置いておいて、性格面で成長を見せられた方が良いでしょう？」

「・・・・・・・・」

可愛い顔してハツキリともの言うティルフェミナは、ヴァルクを黙らせられる貴重な人物であった。

## 23・兄弟の反省会（後書き）

ティルさん強し。

## 24：兄弟の強さ

「ヴァルクは放って置いて、質問があるんじゃないか？」

「あ、色々あるんですけど。プリズムに限界はないんですか？」

「ない」

「さあ」

「あるわよ。貴方達がおかしいだけでしょ。普通は朝から2、3回も使いません。というか、3日に1度くらいです。それ以上は身体に負担が掛かるので滅多に使わないものなんです」

「初耳だ」

「ほお……。だがそれならテイルだって、おかしい分類だろ」

「私は歴代より、少しだけ強いだけですわ」

「まあ3人共突然変異ってことだな」

「そういうことだな。そういえば父上も滅多に使わなかった」

「それはお兄様が代わりに、喜んでモンスター狩りに行っていたからでは……？」



「帰りに女もな」

「若気の至りだ。次」

「・・・誰が一番強いんですか？」

言った後に、これケンカにならないかな、と心配になった。

「俺」

「ガクだな」

「ガクね」

あれ、すんなりと・・・。

「どうした？驚いた顔して」

「ああ、私が認めたことが意外だったか。まあ技量は私のが上だが」

「ガク自身が強いのもあるけれど、剣の能力もあるわね」

「剣、ですか？」

「剣自体に能力があるんだ。俺のレストシエランは、‘自然’以外の全ての効力を相殺する力を持つ」

「私のメディメフィユスは、‘生’を持つものに対し防御不可能な攻撃を持つ」

「そして私のシアスメランテは、主の‘決意’と呼応し、自らの意思で力を出せるの」

「？」

「斬撃の強さだけでいうと、レストシエランを100とするなら、メディメフィユスは80、シアスメランテは40〜120だな」

「シアスメランテは主の精神力や意思に大きく左右されるからな。朝の一撃は中々だったぞ」

「そうでしょうね。‘バリアを破壊して殺せ’という気持ちで撃ちましたもの」

「ティル、冗談になってねえ」

「シアスメランテは一見、一番能力が低そうに思えるが、主次第で唯一‘何でもできる’剣だからな」

「あら、その‘何でも’を軽く防ぐのは誰です？」

「俺だな」

「私だな」

「ふっ、むかつくわ」

「テイ、ティルさん・・・」

「ほら、ヤツキが恐がってんぞ、ティル」

「レストシェランの能力を見たらおまえも恐がられるんじゃないか？」

「メディメフィユスののが恐がられると思いますが？」

「吸うからな・・・」

「言っな。・・・アレは疲れるんだぞ」

「貴方にとつたら微々たるものでしょう」

「そう考えるとレストシェランが一番普通だな」

「いやいや、メディメフィユスの能力を防ぐ剣が普通なわけないだろう」

「お兄様のアレを防げるのは、一体化したガクだけですからねえ」

「??？」

「・・・よし、次。まだあるか？」

「あ、はい。・・・コレ、なんですけど・・・」

そう言ってガクさんに貰ったプリズムを見せる。

「っ、今か」

「ガク、おまえ……。くはっ」

「あら」

「????」

「……。まあいい。その説明だな？それは俺が作ったプリズムで、俺たちが額に持っているプリズムよりは数段効力が劣るが、身につけているだけで肌を強くしたり、魔力を上げたりする。持っていて損はない」

「……。作れるものなんですか？」

「この人たちが例外なだけよ。普通は作れないわ」

「くつくつく、」

「ヴァルク、いい加減にしろよ。……。あとは？」

「もうないです。ありがとございました」

「また何かあったら聞け。じゃあこっちの話だ」

「はい」

「明日、シリーズ王と王妃に会う為にシリーズへ向かう」

「明日、ですか？」

「ああ。急だが、向こうに滞在するわけでもない。グレスティーンに乗って、王に挨拶して帰ってくる予定だ。ああ俺も見ろんだったか」

「王に挨拶？私も？」

「ああ。ヴァルクの命令だ」

「もう少し言い方はないのか」

「本当のことだろ。まあそういうことだ。あっちの王も適当な所があるからな、畏まらなくてもいいぞ」

「そんなわけには・・・」

「それに、俺が側にいるから大丈夫だ」

「、ふはっ」

「なんなんだ・・・。そんなに斬られたいか」

「いや？・・・くくっ」

「お兄様。ガクはお兄様も経験されたことのない、人生初めての経験をしているのです。応援しなくてどうします」

「なんかむかつくんだが、気のせいかな？」

「あら？お優しい姉上様はいつでもガクの味方ですわよ」

「・・・今ヴァルクとティルに同じ血が流れていることが確認できた、うん」

「姉上はガクが感情豊かになって嬉しいわ」

「・・・」

「くっはっはっ」

「ふっ、・・・斬る。王誇<sup>おうこ</sup>よ「ガ・ク？まさかここで？また私の手を煩<sup>わづら</sup>わせるの？」

「・・・いや、「冗談だ」

「そうよね？・・・お兄様もよ？」

「あ、ああ分かっている」

「ふふ、そういうことでお話しはこれまでよ。今日はゆっくりして明日に備えて？」

「あ、はいっ」

ティルさんの本気を垣間見て、放心している所に声を掛けられたので、少し声が上擦ってしまった。

ティルさんは怒らしたらだめだ。ある意味、ローヴェンドの王だ。



## 25：ガクフォンスの一日（前書き）

なぜか治し方がグロいです。ご注意ください！



## 25：ガクフォンスの一日

ヤツキをティルに預け、俺は兵士の指導に向かった。

ガン！ガン！キーン！

いたるところで剣同士のぶつかり合う音がする。  
俺が近づいて行くと、近くにいた兵士が気付き、「ガクフォンス様！」と叫び慌てて敬礼を取る。

それに他の兵士が気付き、全員が頭を下げてきた。

それに苦笑しながら

「久しぶりだな。俺に気にせず、続けてくれ」

そう言つと一斉に顔を上げ、練習を再開する。

俺はこちらに歩いてくる短髪の若い男に声を掛ける。

「よおグライド、今日はどっちだ？」

「お久しぶりです、ガク様。本日は、午前が剣で午後は魔法となっております」

「どっちもか。・・・なあ、おまえプリズム出せるよな？どれくらの期間出している？」

「期間、ですか。・・・今は30分持つかどうか、ですね」

「30分？そんなに短いのか」

「はい。1度出すと、次は数日置くのが理想ですね」

「テイルの言ってることは本当だったのか」

「それでも長くなった方なんですが。失礼ながら、ガク様はどれくらいなのか？」

「さあ、限界を感じたことがないんだが、一日はいけるな」

「流石、鳥神竜を召喚できる方は違いますね」

「鳥神竜か。今朝は召喚したらテイルに怒られたぞ」

「はは、ですが皆久しぶりの『手合わせ』を食い入るように見てましたよ。ヴァルク様とのやりとりも」

「ヴァルクには、ああ言ったが実際、勘が鈍ったようだ。今日は俺も指導じゃなく、訓練だな」

「まさか。あなたの『訓練』に合わせられる者なんてここにはいませんよ！」

「一級騎士グライド、おまえがいるだろう」

「俺だけ、ですか？」

「あとプリズムが使えるのは・・・同じ一級騎士アギアか」

「アギアは今日は午後からです」

「では午後から始めるか」

「ホントにですか」

「おいおい、ヴァージスの血を引く者が何を恐がってる」

「いやいや、恐がってはいないですし確かに一応王族ですけど、あなた方とは格が違い過ぎるんですって」

「・・・分かった。じゃあ今回は攻撃を放つだけでいい」

「本当ですか！」

「ただし、プリズム使えよ」

「分かりました！アギアにも伝えておきます」

「俺ですか！？隊長1人で頼みますよ」

「大丈夫だ。今回はプリズムを使って攻撃を放つだけでいいそうだ」

「何が大丈夫なんですかっ！それにプリズムって、俺まだ使いこなせないんですけど」

「訓練の一環だ」

「隊長と違って幼い頃からの面識もないんですけど」

「少し前に同じ血が流れている。さあ行くぞ」

「マジですか」

「マジだ。ついでにガク様にプリズムの扱い方でも教えてもらえ」

「・・・分かりました」

「初めまして、ガクフォンス様。アギア・ジオスです」

「ガクでいい。話しは聞いている。特に魔法が優秀だそうだな」

「ガク様には遠く及びません」

「何歳だ？」

「16です」

「4歳下か。プリズムは操れるか？」

「まだまだ波があります」

「自らの意思で全開にしたことはないだろう？一度プリズムを全開にすることも大切だ。今日は思う存分ぶつけて来い」

「はい」

「ではグライド、アギア行くぞ」

「はい」

「バリアを一面に張っておいた。まずはプリズムを出してみろ」

そう言って、自分もプリズムを出す。ところが2人の額にプリズムが現れない。

「どうした？」

「ちょ、っと待って、いて、ください」

「？」

それから少し待つと、グライドの額が輝きます。

「ふう」

「そんなに時間が掛かるのか？」

「はい。特にアギアは・・・」

「つつ、だあっ！」

「おお・・・」

「隊長隊長つやバイっ、暴走しそ」

「覚醒するのは20歳か？」

「一般的には。俺はあなたのおかげで少し早かったですけど」

「そうか。アギア、プリズムが求めるままに俺に当たって来い」

「でもこれっ、マジで」

「大丈夫だ。おまえ程度の力で俺は死なん」

「うつ、じゃあ・・・水聖の初・【離水創】<sup>リッスイソウ</sup>！！」

「そうだ、来い。グライド、おまえもな」

「では、炎聖の中・【追跡炎】<sup>ツイセキエン</sup>！」

「はあ、はあ・・・やっぱり、化け物ですね。あなたは」

「そうか？」

「無傷って、しかも攻撃、してるっ。こっちは腹に、穴・・・うつ」

「悪い、条件反射だ。ふむ30分弱か、いい運動になった。グライドは大丈夫だな。さてアギア、生きてるか？」

「な、ん、とか」

「おう、そりゃ良かった。痛い所は？」

「ぜ、全身・・・」

「そうか。テイルの所へ連れて行く。ちょっと我慢しろよ」

そう言つと俺は2人を担ぎ、ヤツキと雑談をしているティルの元へと運んでいった。

「ガク、痛々しいのですが」

「だから治してやってくれ」

「私のシアスメランテはこのような使い方ではないのですが」

「だが、単体なら【復水】より効くだろ」

「今2人ですけど」

「1人1人やれば単体だ」

「あの・・・2人とも苦しそうなんですけど・・・」

「ほら、ヤツキも言ってるし、今度からは気をつける」

「はあ。しょうがないですね」

「ヤツキ、出てる」

「いえ、見えます。治すんですよね？」



「そうだが、酷だぞ」

「大丈夫です」

「・・・テイル」

テイルはプリズムとシアスメランテを出し、まずグライドの腹に切っ先を当てる。

「・・・（傷を癒せ）純志を示せ、『シアスメランテ』」

そう言つてグライドの腹に剣を突き刺す。

「ぐ、あぁっ、」

「きゃっ、」

ヤツキが息を呑む。

ゆっくりとテイルが剣を抜く。

すると剣には血が一切着いておらず、グライドの腹部は光だす。

「次」

「アギア、叫ぶなよ」

「ちょ、まっ、、」

「（傷を癒せ）純志を示せ、『シアスメランテ』」

構わずテイルが突き刺す。

叫ぶと判断した俺はアギアの口を手で塞ぐ。

「うあゝっ、ぐ、」

テイルが剣を引き抜くと、傷が治りだす。

「す、ごい・・・」

ヤツキが口を押さえて目を見開く。

「ガク、高いわよ」

「勘弁」

「お兄様は知ってるの？」

「時々上から見てたな」

「まったく・・・」

「訓練に怪我は付き物だ」

「やり過ぎです」

「そうか？」

「力の違いを考慮してあげなさい」

「加減はした」

「・・・まあいいです。2人ともお大事に。では・・・ヤツキ」

「っはい！」

ヤツキとテイルは出て行った。違う部屋でお茶を再開するんだろ  
う。

元気になったが、未だ放心状態の2人に声を掛ける。

「どうだった？色々良い経験になったろ」

「っ！え、ええ。久々にあれしてもらいましたよ」

「あれ、おまえ初めてじゃないっけ？」

「・・・幼い頃、あなたに数度・・・」

「そうだったか？アギア、おまえはどうだった？」

「痛い治し方でびっくりしました」

「まあな。だが、よく効くだろう？」

「はい、信じられないです」

「くく、・・・今日は終わりだ。しくろーさん」

「はい。ありがとうございましたー!」

そうして俺の一日は終わった。

## 25：ガクフォンスの一日（後書き）

やっとヴァルク、ガク、ティルの身長を決めました！  
キャラ紹介に足しておきます。

## 26：ジェイネルとファレスピア

訓練後は、ヴァルクが仕事を手伝えと言ってきたが、無視して部屋へ戻った。

戻る途中でロウがどこから飛んで来て、肩に乗ってきた。遊び飽きたか。

気にせず部屋へ入るとベッドへ腰掛ける。

ふう、と一息つく。ロウの額が輝きだした。

『随分楽しんでいたようだな？』

「腕が鈍っていたようだったからな。訓練してきた」

『くくつ、付き合わされた方は堪らん』

「何がだ」

『どうせ大怪我させたんだろう？』

「腹に穴が開いただけだ。もう1人は全身苦しそうだったが」

『まだマシか。昔はもう少し酷かったからな』

「そつか？覚えてねえ」

『ところでガク。あの娘をどう思う？』

「ヤツキか。どうって、何が」

『あの娘を見ていて何か思わないか？』

「ああ好きかって聞いてんのか」

『うむ、おまえは直球男児であつた。失念しておつた、カワイイ乙女心なんぞ持っておらぬのだつた』

「当たり前だろう。ローヴェンドー強い男が、乙女心満点ってどうなんだ」

『それはどうでもいいが、好きなのか？』

「・・・さあな」

そう答えるとベッドに手転がり、目を閉じた。

浮かぶのはヤツキの笑顔。

・・・俺は常に戦いを側に置いてきた。

‘好き’という感情が分からない。

言い寄ってくる女に、何の感情も沸かなかった。ただ適当にあしらっていただけだ。

ヤツキへの対応に戸惑っている自分がいるのは本当だ。

俺自身どうしたいのか分からない。

考えるのが段々面倒臭くなってきた俺は、眠気に逆らわず、少し

早いがロウの温もりを近くに感じながら眠った。

『色々とは故気付かぬ・・・天然か？』

そう、ロウが呆れた声を発したのも知らずに。

「ヤツキ行けるか？」

‘手合わせ’の翌日。お昼を食べた後、ガクさんが私の部屋の前に来て言う。

「はい！」

今日は王様に挨拶に行くということで、ドレスを着ていた。黒の大人びたドレス。派手ではないけれど、胸元にプリズムの形



の宝石が埋まっていた。

いつもは隠れている本物のプリズムも、今日は首元で存在を主張していた。

ガチャ、と扉を開ける。ガクさんも正装なのだろう、いつもは戦いやすそうな騎士っぽい格好だが、今日は「王子様」だ。

いつも以上に格好良くて直視できない。  
なのにさらに

「思った通りだ。似合っている」

なんて言われたら、もう心臓も顔も大変だ。

「行くぞ。用意はできている」

「はい」

飛行場ではグレスティーンが待っていた。

ガクさんに促されて人が5人ほど乗れそうな、四角いマンホールみたいな上に乗ると、それはゆっくりと上に上がりだした。

びっくりしてビクツと体が動くと、ガクさんが「動くな」と言っ

て私の腰を引き寄せる。

ちよつと近い！近いから！！

それはグレスティーヌの胸の高さまで着くと止まった。

グレスティーヌがそれに近づいて胸を寄せる。

ガクさんが先に乗り、私に手を差し出す。私は少し躊躇したがその手を取ると、一気に引き寄せられた。

「グレスティーヌ、多少遅くなってもいい、安全飛行で頼むぞ」

「ギャギャルル」

「ん」

グレスティーヌがゆっくりと飛びだす。

「グギャー！！」

と、一声上げて。

すると

「ギャルルルー！」

とどこからか声が返ってきた。

「もう1頭の超高速竜、リンドーヴルムハイウェイだ」

「仲良いんですか？」

「そうだな」

そんな話をしながら、前回よりはゆっくり、グレスティーンが飛行してくれたおかげで気持ち悪くなることもなく、夕方にシリーズに到着した。

降りる所はやっぱり飛行場で、グレスティーンに乗った時と同じ機械に再度乗ってグレスティーンの背を降りた。

「ヤツキ大丈夫か？」

「はい」

「じゃあもう行くか」

「もうですか。ああ緊張する・・・」

「くく、大丈夫だ」

そう言つて頭を撫でてくれるガクさん。どっちにも緊張するんですけど。

するとその様子を見ていたシリーズの人の1人がこちらに歩み寄り、頭を下げる。

「お久しぶりです。ようこそおいでくださいました。既に我が君は王の間におられます」

「ああ。もう勝手に行っていていいか？」

「相変わらずでございますね」

「面倒臭いのは嫌いなんだ」

「承知しております。では、どうぞ」

「ん、行くぞヤツキ」

「え、はいっ」

え、ええそんな勝手に行っちゃっていいの？ねえ？！

「いいんですか？」

「何が」

「いや、勝手に・・・」

「長い付き合いだから大丈夫だ」

「そうですか・・・」

「ほら、もう着くぞ」

「ええ！」

「ん、ここだ。行くぞ」

「早い早いつ、待ってください！」

「なんだよ」

「ちよつと、心の準備が」

「・・・よし、行くぞ」

「えええ」

私の願いもむなしく、扉はガクさんによって開かれる。

緊張で顔が上げれず、ガクさんの足元を見ながら着いて行く。  
少し歩いた所でガクさんが止まる。

「お久しぶりです。ジェイネル王、ファレスピア王妃」

「おお、よく来てくれた。相変わらず好青年だね、君は」

「ふふ、そちらはあなたのお姫様かしら？」

「・・・ん？なんかどっかで聞いたことが・・・、と思って顔を上げると」

「ん？」

「へ？！」

「あらあら」

「おおっ」

## 27：月夜の三つ滝

そこにいたのは、半年前に海外旅行に行くと、家を出て行った父と母。

「お父さん、お母さん・・・なんで？」

「はっ？」

ガクさんが横で驚いている。

「やっと戻ってきたか」

「でも記憶はまだのようね？」

「強く封印し過ぎたか？」

「あの時は気持ちが高ぶって立ってから」

「懐かしいなあ。新婚旅行で行って以来だったからなあ」

「感傷に浸っているところ悪いですが、どういふことが説明をお願いします」

「あら、ガク君気付いてないの？」

「あの時から君は、女性に冷めた所があったからな。覚えていないんだろう」

「ちょ、ちよつと、海外旅行じゃなかったの？」

「うん？ある意味海外旅行だろう？まあ本当は元の世界に戻ってきただけだが」

「メフィ、いえまだ夜月ね。この話はまた後でしてあげるわ。今日は夕食後、滝を見に行ってきたさい」

「滝？」

「ガク君もね」

「はぁ・・・」

ガクさんは珍しく、戸惑った返事をしていた。

「さあ、食事にしましょう。用意を」

「かしこまりました」

テーブルが用意され、次々に運ばれる料理。それらをイスに座りながら、ぼんやりと眺める。



どういうことだろう？ 私はこちらの人間？ ロウ兄とギン兄がなかできたのもその為？

色々考えていると、料理は並び終わったみたいで、お父さんが声を掛けてきた。

「夜月、今は考えず食べなさい」

「あ、うん。でも、気になるじゃん」

「そのうち思い出すわ。気になるといえば、あなたこっちの言葉をしゃべってることは気にならないの？」

「え？・・・あつ」

「ん？・・・ああ」

「まさかガク君も？ 君意外と天然だったんだねえ」

「はは・・・、ロウが懐いてたんで、何も気にせず・・・」

「ああそつえば、昔ヴァルク君が言っていたよ。『あいつの将来が心配だ。命が関わると勝負勘は抜群だが、変な所が抜けている』ってね」

「ヴァルクが？・・・そんなに抜けてませんよ」

「はっはっ、まあ国王になる気はないんだろう？」

「ええ、王はあいつのが向いています」

「なら、多少抜けていても問題ないよ」

「・・・」

「夜月はどうやってこっちへ来たんだ？」

「ロウ兄とギン兄が、‘行って来い’って感じで。危険な森だったんだよ？もうちょっと安全な所にしてほしかったよ」

「ああそれはね、ガク君の居る所に送るようになっていたんだ」

「え？」

「？」

「これも後かな。さあ食べ終わったら行っておいで」

「・・・ヤツキ、行くか？」

「はい」

「では、失礼します」

そう言ってガクさんは歩いて行く。

王の間を出てもガクさんは無言だった。何か考えているようだった。

さっきの道を引き返し、グレスティーンがいる飛行場へ戻る。

グレスティーンに乗ると、ガクさんが口を開く。

「グレスティーン、滝まで頼む」

「ギャルル」

グレスティーンはゆっくりと飛ぶ。今日は少し、雲が多く月を隠していた。

しばらくすると見えてきたのは、巨大な三つの滝。

ドクンツ、・・・何？なにか・・・

グレスティーンが真ん中の滝の正面に止まった時、雲が分かれ、欠けた月が姿を現す。

すると・・・

月夜に照らされ、滝が銀色に輝く。その光景は、神秘的だった。

ドクンツ、

あ・・・

『メフィリア、気をつけるのよ』

『ママみてーきれい！！』

『ええ、そうね。私達の国の誇りよ』

『ほこり？』

『そうよ。ロイウェルトやギラテイルト、そしてメフィリアもいつか戻って来て、この滝と月のように輝くのよ。分かった？』

『？、はい』

『いい子ね』

そうだ。あれは幼かった私が、夜の滝を初めて見た日の記憶。

そして幼い頃のこの世界の、最後の記憶。あの時はママと、呼んでいた。

ということはその後、記憶を封印され、地球へ行っただ。

そう、私のこの世界での名は・・・メフィリア。

「メフィリア・シリーズ」



## 28：過去

「メフィリア・シリーズ」

もう一度、ゆっくり呟く。

父はジェイネル、母はファレスピア、兄2人はロイウエルトとギラティルト。思い出した、全部。

そしてこの男は、ガクフォンス王子。初恋の、相手。

「メフィリア？・・・ああ。あの生意気な」

そつえば、ガクって呼び捨てだった気がする。  
6歳だった私と、10歳だったガクさん。いや、ガク様？

「あ、あは。若き日のちょっとした過ちです」

「くつく、思い出した。そうか。ぱったり姿を見なくなったからって  
つきり、どっかの王子の所に嫁いだのかと」

「ち、違いますよ！私は昔から・・・」

と言いかけて慌てて口を塞ぐ。危ない危ない、あなたが好きだった、'と言ってしまうところだった。

「昔から？」

「あ、いや、昔から・・・えっと」

「まあいい。ああそうだ、その話し方やめないか？思い出したら違和感があり過ぎるんだが。俺に敬語も敬称も付けたことなかったろ」

「ですから、あれは若き日の・・・」

「いいからやめろ。前みたいにガクでいい。敬語もいらねえ」

「う、うん。分かった・・・」

「ん、それでいい。しかし、随分と変わったもんだな」

「そうです・・・そう？」

「ああ、綺麗になった」

突然、後ろにいるガクが耳元で囁く。低音が頭に響く・・・綺麗になった？私が？

理解すると、顔の熱が一気に上がる。耳まで熱い。

「くくっ、真っ赤だぞ」

「う、うるさいっ」

なんかキャラ変わった？うん、戻った？昔は確かこんなだった。

いつも苛められて・・・でも好きになるって、私M！？いやいや、あの時から顔が良過ぎたから。うんそう、あの甘い顔が。

「さて、戻るか。グレスティーン」

「ギャルル」

「なあ、どう呼べばいい？メフィリアか、ヤツキか」

「あ・・・」

今はもうメフィリアとしての記憶が戻った。でも、ヤツキとして過ごした日々が、消えたわけじゃない。

でも、ここで生活していく以上・・・

「メフィリアでお願い」

「分かった」

再び王の間へ戻ると、料理は片付けられ、テーブルだけが残っていた。



「おかえりなさい、メフィリア」

「・・・ただいま」

「ガク君も思い出しかね？」

「はい」

「それは良かった。さあ話しの続きをしよう」

2人とも元の席に座るとお父さんが話し始める。

「ファレスピアとの新婚旅行が、地球だったんだ。若かったからね、適当に時空を操ったら地球に着いたんだ。それが始まり。」

私達の能力は、時空を操れる以外に、どこ言葉も理解し話せる能力がある。それに魔法が使えるだろう？だから、犯罪者を次々に捕まえてね？お金を稼いで家を買ったんだ」

おいおい。

「で、お金が溜まって十分生活できるようになったんだが、半年地球に滞在してたからそろそろ帰らなくちゃってことで、帰ったんだが・・・どうしてももう1回行きたくてね」

「それにあっちの‘ママ’っていうのは魅力的だったわ。だからメフィリアに呼ばせたの。ふふ」

・・・。

「ロイやギラに地球を見せておくのも経験だと思って、1年の家族旅行に出かけることにしたんだ。でもお転婆だったメフィリアは、きつとこっちの世界の記憶を地球で話してしまうと判断してね、地球に着いてから記憶を封印したんだ」

まあ確かににお転婆だったけど。

「それがダメだった。記憶の封印には、自分より力が格段に弱い者でも、最低3人はいる。それをファレスピアと2人でやったら、力が底を尽いてね。加えて地球だった所為か、力の回復が急激に落ちたんだ。結局、時空を操れるまでに回復したのは10年後。今から半年前だね」

「でも地球での生活も楽しかったわねえ」

「そうだな。ロイとギラに、能力を使えるようになったらこちらの報告をさせていたから心配もいらなかったしなあ」

なるほど、時々2人が数日帰ってこなかったのはその為か。

「また行こうか、ファレスピア」

「そうね」

「ちょっと待って、私は！？卒業してない！」

「あら、記憶が戻ったのなら、卒業は必要ないでしょう？」

「でも、桜花とか・・・桜花を連れてくるのは無理？」

「無理ではないが、あちらのご両親が認めないだろう？それに桜花ちゃんも信じるかどうか」

「でも、1度地球に帰りたいの」

「分かったわ」

「俺も行ったらいけませんか？」

「ガク君が？ローヴェンドはどうするんだ。君達のご両親も今・・・」

「放浪してますね。でもヴァルクとテイルがいたら大丈夫でしょう」

「ふむ」

「娘さんの護衛としては、ダメですか？」

「・・・よしっ、娘をしっかり守ってくれよ？」

「はい。任せてください」

そこで私は横のガクを突き、小声で聞く。

「ちょっと、どういふこと？」

「いや？俺も地球を見たいな、と」

「金色の瞳に青髪なんて地球にはいないわよ？」

「変えればいいだろう？というか何で小声なんだ？」

「いや、なんとなく」

そこで普通の声でガクが話した。

「誰が地球へ送ってくれるんです？」

「私達2人とあと、3人必要か。メフィリアはもう16だろう？能力が開花していてもおかしくないんだが・・・」

「やっぱり地球へ行っていた影響かしら？勝手に操り方が分かるようになるのだけど」

残念ながらサツパリだ。

「今回は2人共、私達で送ろうか」

「そうね」

そうして話は終わり、私は久しぶりに「自分の部屋」で夜を過ごした。



## 29：戻った感情

『ガク、あれ取って!』

『またおまえか。ガク様、だろ』

『ガク、早くう!』

『はあー。．．ん』

『ありがと、ガク!』

『．．．．．』

『きゃあ!何するのガク!』

『．．．生意気なメフィリアが悪い』

『うえええん、ガクが苛めたあ。ガクきらい!』

『．．．取り消せ、嫌いじゃないだろ!』

『うわあああん』

「……ん。夢、か」

懐かしい、昔の夢。樹に生っていた果物を取つてと、その日も呼び捨てで言いに来たメフィリア。

なんだかむかついて、もぎ取った果物をメフィリアに渡す前に、頭上で握りつぶしてやった（幼少期から握力ハンパない）。

そしたら、果物の蜜がメフィリアの頭の上にダラダラこぼれて、メフィリアは泣き出し、俺を嫌いと言い出した。それが気に入らなくて、怒鳴ったら更に泣かれて……。うるさかったから放って城に帰った。

……。後からテイルに散々怒られたが。

その後姿を見なくなり、初めのほうこそ寂しく感じていたものの、モンスター狩りに目覚めてからは思い出すこともなく、女とも幅広く関係を持ち感情も消え、メフィリアのことは全く頭になかった。

あとから考えてみれば、あれを初恋と呼ぶのだろう。

漆黒の黒髪と、輝く大きな瞳。ころころと変わる表情につられていたあの頃が、俺自身、一番感情豊かだったかもしれない。

「ふつ、懐かしいな……」

そう眩き、ベッドから起き上がると顔を洗う。  
そうか、ロウは置いてきたんだったか。

服を着替えていると、メフィリアの気配がした。次いで扉を叩く音がする。

「ガク？起きた？」

「ああ、今行く」

扉を開けると、当たり前だがあの頃より随分と大きくなったメフィリア。

思い出してフツと笑いながら頭を撫でれば、メフィリアが戸惑いながら顔を赤くした。

それを見て暖かい気持ちになりながら、迎えにきたであろうメフィリアに案内を促す。

「メフィリア？」

「え？あ、あのうん、朝食に」

「何どもってんだ」

「いやほら、ね？うん、行こう」

「くくっ」

「もっつ」



ふて腐れるメフィリアを宥めながら、王の間へ向かう。

既に料理は並んでいて、ジェイネル王とファレスピア王妃、ロイとギラもいた。

「やあガク君。よく眠れたかい？」

「はい。メフィリアとの懐かしい夢まで見れました」

「夢？それはいい。あとで聞かせておくれ」

「はい」

「ねえ、それ私がバカやった夢、とかじゃないよね？」

「さあなあ」

「あ、ちょっと！」

騒ぐメフィリアを置いてイスへ座ると、その横にメフィリアが座る。

今を楽しんでいる自分がある。この頃感じる懐かしい感情に、おかしくって笑う。

「なんだガク、ちょっと見ねえ間になっちゃったな」

ロイが話しかけてくる。

「そうか？戻っただけだ」

「？」

「なあ？」

「え？あ、うん」

「良かったね、メフィリア。さあ揃ったし、いただくか」

「そうね」

ギラが言うと、ファレスピア王妃が応える。

「メフィリア、どうだった？‘ヤツキ’としてのこっちの世界は」

「あ！あのねえ、来た瞬間モンスターに遭遇したんだからね！！」

「でもガクが助けてくれたろ？」

「えっ？うん、そうだけど。なんで」

「最初からそういう予定だったからな。『予約結合』つつってな、メフィリアの場合は、‘次に時空を渡る時、ガクの元へ行く’っていうことになってたんだ」

「なんでガク？」

「ガクが一番強いだろ？ならどこ着いても安全だ。違うか？」

「そうかも、だけど。ガクに何も言ってなかったの？」

「その方がおもし・・・いや、ガクに断られると思って？」

「なるほど。ヴァルクと一緒に、ロイも斬られたい性質<sup>タチ</sup>か」

「待て待て。俺そんなMじゃないし、むしろSってかヴァルクもあきらかSだろ！？」

「まあどうでもいいだろ。大人しく斬られとけ」

「早まるなって！あ、そうだ昔の夢見たんだって？どんな夢だったんだよ？」

「くはっ、おまえ面白いヤツだったんだな」

「おまえは相変わらずSだな。で？夢は」

若干、ロイがイラつきながら聞いてくる。それに俺は、メフィリアの方を向きながら笑って応える。

「ああ、メフィリアに果物を取ってやった夢だった」

「なんだ、普通だな」

「・・・待つて、そんな普通の記憶はないよ?」

「覚えてねえだけだ。人の好意を忘れるとは」

「そ、そうだっけ? うーん・・・」

「ところで、いつ2人は地球へ行くんです?」

ギラが聞く。

「もう今から行ったらいいじゃねえか。俺らもいるし」

「そうだな、そうしよう。ヴァルク君には私から言っておこう。ガク君、いいかい?」

「はい。ありがとうございます」

「メフィリアも、いいわね?」

「う、うん」

「送り方はどうするんだ?」

「『期限結合』にしようか」

「了解。じゃやるか、2人共こっちへ」

「え、早くない? もう?」

「急がば回れ」だ」

「バカ？回ってどうするの。『善は急げ』でしょ」

「おうギラ、それだ」

なんだかんだ言いながら、魔法円の準備は進んでいるようだ。

「はい、これに乗って」

言われた通り、書かれた円の上にメフィリアと乗る。

「じゃ、行くぞ？あ、向こうでは『夜月』だからな」

「ああ」

「あ、期限は夜までな」

「ああ」

「ああ、それと・・・」

「一気に言え」

「ああ、悪い最後。向こうの家に服が置いてある。それ着ろよ」

「ああ」

「じゃあ・・・」

そう言つと4人が何かを呟き始める。

『・・・我等は望む。【地球】へ』

### 30：地球の王子様

ああ、久しぶりの我が家。  
近所の家よりも随分と広い我が家。  
まさかまさかの我が家。

「ああ久しぶり」

「1人耽ってないで、案内しろ」

感動の再開は、リアル王子様によって壊された。  
って……

「何で日本語？」

「コレ、貰った」

そう言ってガクが見せたのは、中指の指輪。

「プリズムと似た物だろう」

「へえ……まあどうぞ」

「ん」

中に入ってリビングに向かう。ロイとギラが度々来ていたんだろ  
う、変わらずキレイだ。

「あ、携帯！」

「けーたい？」

ソファに放り出してあった携帯を見ると・・・ん？  
未読メールゼロ、着信履歴・・・ゼロ？

そ、そりゃメールも電話もしない方だったけど、これは・・・悲  
しい。

「おい？哀愁漂ってんぞ」

「今はほつといてっ」

「・・・なぐさめてやろーか？」

び、つつくりしたー！！

「い、いきなり耳元でしゃべらないでよー！」



「ん？落ち込んでるようだったから」

「もーっ」

となんとなく送信ボックスを見てみると・・・あれ？

この日付は異世界<sup>あっち</sup>へ行っている間の日付。  
不思議に思い開けてみると・・・

「ロウ兄、いや・・・ロイとギラかー!!」

「落ち込むか怒るか、どっちかにしろ」

「だって、だって人の携帯見て勝手に返信するなんて・・・!!」

「よく分かんねえけど世話してくれたんじゃない？」

「ええ？あつ、電話してみよう!」

桜花、桜花つと・・・・・・・・プルルル・・・

『はい』

「あつ、桜花？」

『夜月！？帰ってきたの!?!』

「えっ？うん、え？知ってるの？」

『うんっ！ロウさんとギンさんから聞いたの！やっぱりあの2人は王子様だったんだね！？』

「え、うん？そうだね・・・？」

『今、家？』

「うん」

『じゃあ今から行くからっ、待っててね！・・・プップーップー・・・』

「切れた・・・」

「友か？」

「うん、今から来るって」

「そうか」

「あ、服着替える？」

「ああ」

見渡すと・・・あれかな？って制服！？

「は？なんで・・・」

そこには私の高校の女子の制服と、男子の制服が一着ずつ。

「こんなものを着るのか？動きにくそうだな」

「いやそれは、学校の制服で・・・もしかして今日登校日？」

「？なんでもいいが、これを着るんだろう？」

そう言って手に取る。

「ガクさんが学ラン・・・いやブレザーか」

「あ？」

「いえなんでも」

「？」

「ねえガク。違う服あるよ？動きやすいのが。そっち着る？」

「いや・・・これ着て学校行くんだろう？面白そうだ」

「え？ガクも行くの？」

「俺のも用意してあるんだ。行くんじゃないのか？」

「とりあえず、今日の確認を・・・」

冷蔵庫に貼ってあるプリントを見る。今日は・・・午後から登校日。

「はあ」

「どうした」

「午後から登校日だ・・・」

「午後から？」

「うん、あれは午後から着るの。今はやっぱり、違っの着よう？」

「別にいいが・・・」

「じゃロイの部屋行こう！」

階段を上り、ロイの部屋へ入る。

「うーん、何がいいかな？シンプルにジーパンにティーシャツでもいいか」

「あれは何だ？」

「何？ああテレビ？これをね点けると・・・」

『今日の１位はおとめ座のあなた！周りからチャホヤされて気分は

天狗。鼻は天まで届くでしょう!」

いや、よく分らないけど。

「鼻が天まで届くのか?初めて聞く魔法だ」

「え?違つよ、違つから!この世界に魔法なんてないから!」

「そうなのか?だが今」

「ほらっ、これどつっ?うん、これにしよう!」

説明が長くなると思った私はテレビを消し、素早くガクの前に服を差し出す。

「着替えたら正面の部屋来て?私も着替えてくる」

「ああ」

返事を聞くと、自分の部屋へと駆け込んだ。

「何にしようかなあ」

どうせすぐ着替えるんだよねえ。  
うん、軽い服装でいこう。

「これと・・・これでいいやつ」

夏らしくロングタンクトップと短パンにした。

コンコン、

「はい！待って、もう行く！」

ドアを開けると・・・

「ツイイ・・・」

「は？」

「いえいえ」

ポロシャツにジーパン。ただそれだけ。

元がいいっていうのは反則だね。

恨めしげにガクを見ると、玄関のインターホンが鳴った。

「桜花だ。行こ」

ガクを連れて1階へ降りる。

「はい！桜花？」

「うん！」

ロックを外し、ドアを開ける。

「桜花！」

「夜月！」

桜花を中に入れ、きゃーっ、と2人で抱き合っていると、後ろから声がした。

「メフィリア」

### 30：地球の王子様（後書き）

いつも見てくださってありがとうございます！

T e aとS e aの響きが大好きなティシーです。

なんだが30話突破しちゃって、驚きです。

誤字脱字・感想等、大歓迎です。返信しないなんて、携帯メールの現状みたいなことは致しません！

これから完結目指してがんばります！



### 31：増えた異世界人

その声にパッと振り向く。

「ごめんガク。紹介するね。この子が親友の桜花」

「・・・」

「桜花？この人がガクフォンス・・・って、大丈夫？」

「ちょっと待って、時間を頂戴。まさかリアル王子様がいらっしやるとは夢にも・・・」

「あ、言ってなかったっけ」

「・・・よし、オーケー。初めまして桜花です。夜月がお世話になってます」

「ああ、ガクフォンスだ。ガクでいい」

「ガク、もうちょっと挨拶の仕方ないの？」

「何がだめだった？」

「初対面の人に『ああ』ってどうよ」

「だめなのか？以後気をつける。まあ上がれよ」

「あ、お邪魔します」

「ちよつと！私の家！」

前に行くガクについていきながら、桜花が私をつつく。

「ホントに王子様じゃん。私金色の瞳なんて初めて見た！髪が青だから若干、不良王子に見えるけど、メチャメチャ格好良い！」

「でしょ？カツコ良さは認める」

「ああ、で？恋してるんだ？」

「はっ！？」

「隠すな隠すな。桜花ちゃんには分かるから。でも私は殺生丸様みたいな銀髪の人がいいなあ」

「殺生丸！？犬夜叉じゃん」

「うん、だから現実でそういう人がいい」

「そんな人いるわけ……」

いる。バリバリいた。銀髪で金色の瞳で、強い。いた。そういえばリアル殺生丸がいた。

「・・・いるんだ？」

「いる」

「それはどちら様？」

「王様俺様ヴァルク様」

「恋に壁はない」

「マジで？壁っていうか、まず越えられない空間があるような気がしますけど」

「なんとかなるでしょ。夜月が行けるんだから」

「うん、まあなるけどさ。桜花の両親が・・・」

「大丈夫！ウチ放任主義だから」

なんだか行く気満々な桜花。そりゃ私も連れて行きたいとは思ってたけど、こんな簡単でいいの？

リビングに着くととりあえず3人で座る。

すると・・・

「ヴァルク・・・」

「ガク？どうしたの？」

「外」

「？」

外を見てみると・・・ちまたでうわさの（？）リアル殺生丸がいた。

「チツ」

「王子様が舌打ち・・・やっぱり不良王子様？」

「いや、違ってから桜花。確かによく舌打ちするけど、不良じゃないから」

弁解しているとガチャ、とドアが開く音がする。  
ん？私、ロックしたよね？

足音が段々近づく。そしてリアル殺生丸はリビングに入ってきた。

「ガク。1人だけ旅行とはずるいじゃないか？」

「王が勝手に来るんじゃないか？」

「勝手ではない。テイルとロウが良いと言った」

「ほんとか？」

「まあ少しの間だな」

「リ、リアル殺生丸様・・・」

「落ち着いて、桜花。殺生丸だけど殺生丸じゃないから」

「殺生丸？私はそんな物騒な名前ではない」

「やることは幼少期から物騒だけどな」

「おまえも変わらんだろう。さて娘、私はヴァルクだ。おまえは？」

「桜花、です」

「王か？」

「オウカだ、バカ」

「兄上様にバカとはなんだ」

「きよ、兄弟なんですか！？」

「腹違いだな」

「不本意ながらな」

「似てるでしょ？威圧感タップリな目と、無駄な色気が」

「うん、似てる」

なんて話を延々と4人（私と桜花中心）でしゃべり続けていると、時計は12時を指した。

「ねえ登校何時からだっけ？」

「1時半」

「じゃそろそろお昼行こうよ」

「そうしょっか」

「どこか行くのか？」

「うん、お昼食べに行こう！何食べたい？」

「なんでも」

「じゃ、近くのファミレスでよくない？」

「ふぁみれす？」

「あ、いいねえ！この2人には絶対似合わないけど！桜花、服替える？制服・・・」

「大丈夫！ありがと！さ、行こう？」

「うん！」

「よく分からんが金があるんだろう?・・・ほら」

「え?なんで?」

「ロイに貰った。好きなだけ使え、と」

「・・・これ1日で使う金額じゃないよ。ま、いつか。行こう!」

なんだか諭吉さんが、何枚も見え隠れしている財布をガクのポケットに押し込むと、桜花と、はしやぎながら家を出た。

「なんで俺がサイフを持つんだ?」

「私達が持ってたら違和感たっぷりでしょ?」

「そうか?」

「そう」

話していると徒歩2分のファミレスが見えてきた。あー、やっぱり混んでる。

「ちょっと待たなきゃいけないかも」

「んー、でも他の所行くのもねえ」

「まあ待つのもいいよ」

「そうだね」

「あ、ガク。さっきもメフィリアって呼んだけど、こっちでは夜月だよ！」

「ああ、そういえば」

「ヴァルクさんどうしよう？外人でもいけるっていつか髪と目、人共変えないの？」

「ああ、そういえば」

「ふむ、そういえば」

「もういいんじゃない？この際、ムダに目立たせとけば？」

「名前は？」

「ヴァルク、テイレイにしろよ」

「何故私が、父上の愛称を使わなければならんだ」

「テイレイ？」

「ティファレイマス。俺達の父親の名だ。略してテイレイ」

「ガクは漢字に直すと、学？いや額ひたいにプリズム出るから額がく？テイレイさんは帝麗かな？ヴァルクさんには合ってそうだけど」



「なんか面倒臭いから、カタカナでよくない？」

「そうだね」

ファミレスのドアを開けると、いらっしやいませー！という元気な声が聞こえた。

「何名様で？」

「4人で」

「かしこまりました。こちらの席へどうぞ」

案外空いていたらしい。窓際の席へ座ると、いたるところから歓声上がる。主に黄色い。

「ちょっとちょっと！誰あれ？芸能人？」

「カッコ良すぎるんだけど！」

「ホントに誰！？」

「私銀髪の人のが好みかも！」

「ええ！？青髪の人のがイケメンだよ！！」

「どいて、見えない！」

瞬時に店内の注目は、私達の前に座る2人へ。当の本人達は慣れているのか全く気にしていない。  
店内を珍しそうに見渡すだけだ。

「イケメンも大変だね」

「くく、羨ましいか？」

「はぁん！？」

「ちょっと、夜月！」

「あ、ごめん」

「イチャつくなら家でね」

「今どこもイチャついてなかったよね」

「そーお？」

「そう」

「しかし狭いな」

「ああ、足がきつい」

「あなた達が長すぎるんです！」

「まあまあ、何頼む？」

「ハンバーグ！！」

「夜月、そればっかだね」

「肉こそ全て！」

「ああそう。まあ私もそれでいいや」

「ガクとヴァルクさんは？」

「ヤツキと同じのいい」

「私もだ」

「じゃハンバーグ4つだね。すいませーん！特大ハンバーグ4つで  
！」

### 31：増えた異世界人（後書き）

犬夜叉を知らない方、すみません。  
でも、殺生丸はカッコイイと思います。

### 32：登校

高速で出てきた4つの特大ハンバーグ。

気のせいかな外からも視線を感じる。

「夏休みだからねえ。学生も多いよね」

「うん、まあ気のせいか女の子ばかりだけどね？」

「ヤツキ、さつきから時々光っているが、なんの魔法だ？」

「うん、あれは魔法じゃなくて、カメラのフラッシュだよ」

「ふらっしゅ？」

「お2人がカツコ良過ぎて、写真撮りたくなるんですってー」

「何いじけてんだ」

「いじけてないよ。ちょっと目障りだな、とは思っただけ」

「消すか？」

「ヴァルクさん、物騒なこと言わないでくださいよ！ここはそんな

所じゃないですから！」

「殺すとは言っていないだろ。気絶させようかと……」

「気絶もダメ！問題になるから！」

「なんだかんだ言っただけで食べるの早いなヤツキ」

「まあね。特技ですから」

得意気に言うと、背中にビンタが飛んできた。  
イタイ。

「何すんの、桜花」

桜花は、小声で怒ってくる。

「好きな人の前で微妙なアピールをするな！」

「いやアピールはしてな」もうちょっとこう……おしとやかにでき  
ないの？夜月って一応姫だよね？」

「う、うん、一応？遠い昔の記憶だよね」

「ならば記憶を呼び戻せ！」

「ムチャだ……ってデザート忘れた」

「ちょっと、話聞いてた？」

「うん、とっても。おしとやかに食べればいいんだよね。すいませーん、追加お願いしまーす」

そう言うとき女の子が飛んでくる。

「はいつ。ご注文は？」

バッチリ、ヴァルクさんを見て。オネーサン、オネーサンこっちだから。

「みんなどうする？私バナナアイス」

「甘いのか？」

「うん、苦い飲み物もあるよ？」

「じゃあそれ」

「私もだ」

「桜花は？」

「ストロベリー」

「じゃあバナナとストロベリーが1つずつで、コーヒー2つ」

「畏まりましたっ！」

数分でやってきたコーヒーが2つとアイスが2つ。すでにハンバ  
ーグは食べ終わっていた。

「どう？」

「ああ、悪くない」

「・・・」

「ヴァルクさん？」

「おまえ苦いの昔から無理だろ。なんで選んだんだ」

「いや、克服したかと・・・苦い」

「ヴァルク、さん？コレ・・・食べてみます？」

桜花がストロベリーアイスを差し出すと、ヴァルクさんはすぐさま飛びついた。

「うむ」

「ガクも食べる？」

「いや、いい。おまえが食べる」



「やっぱりバニラは美味しい」

「ストロベリーでしょ」

じっくり味わいながらアイスを食べ終わると、会計へ向かう。

テーブルから出たガクの肩を叩き手招きする。耳を寄せたガクに

「ガク、あそこでお金出すの。で、財布から1枚出して『釣りはいい』って言うって」

と、告げた。

「分かった」

財布に入っているのは全て万札だ。絶対に足りる。

レジにいる女の子はソワソワしている。

ガクの少し前を私が歩いて、先に金額の書いてある紙を渡す。  
それを女の子が読み上げようというところで、ガクが諭吉さんを出した。

「釣りはいらねえ・・・」

「「「きゃー!」」」

「ふはっ」

「え?!」

店を出てから桜花が詰め寄ってくる。

「何言わせてんの」

「だって、絶対似合うと思って。ちょっとタイミング早かったけど、良かったよガク」

「ん? ああ」

「さて、帰りますか」

帰り道、なんだがニヤニヤが止まらなくて、桜花に数回叩かれながら帰宅した。

再びリビングでまったりしていたが、時計が1時を指したのを見て、慌てだした。

「桜花、もう行かないと」

「え、あ」

「・・・ガク、やっぱり待っててくれない? っていうか不自然だね。いきなり行ったら」

「容姿が目立つのが一番だけだね」

「うん、普通の授業ならまだしも、今日は全校集会でしょ？」

「あれ何するんだっけ？」

「さあ。生徒会が、毎年何か企画するらしいよ」

「ふうん？まあ2人には待っててもらった方がいいかもね」

「私はそろそろ戻るぞ。また来い、オウ力。城に住ませてやる」

「え、」

「不満か？」

「い、いえ！是非ともよろしく願いします！」

「ああ」

「（ちよつと？あれはどういう風の吹き回し？）」

「（知らねえよ。気まぐれだろ）」

「（気まぐれで城に呼ぶの？）」

「（昔はな。この頃は知らねえが）」

「まあいいや。じゃガクは、待っててね？」

「分かった」

返事を聞くと制服を持って、桜花を連れて着替えに行く。

「おい、ヴァルク。あいつどうするつもりだ」

「オウカか？久々に面白い娘を見たと思ってな」

「あ？どこらへんが」

「くく、私の勝手だ。放っておけ」

「おまえに泣かされた女は数多く見てきた。あいつはメフィリアの友だ。今回は放っておけねえな」

「随分と入れ込んでいるようだな？おまえこそ散々泣かしてきただろっ」

「うるせーよ」

タンタンタンタンタンッ

「じゃ、行ってくるから！2時間経っても終わらなかったら勝手に帰ってくるから」

「ああ」

「行ってきまーす！」

「で？いつ式は挙げる」

「は？何の話だ」

「あ？まだ言っていないのか」

「ん？何が」

「ガク、好きなのだろう？いい加減認めたらどうだ」

「・・・」

「ああそついえば、学校とは男子也多いらしいな？」

「そうか」

「おまえより性格も顔も良い男が、多くいるだろうな？」

「そうか」

「何かの間違いで奪われるかもなあ？」

「・・・俺にどうしろと？」

「学校へ乗り込んで行ったらどうだ？アレを着て」

「・・・プリズム使わなきゃ分かんねえな」

「さて、そろそろ時間か？」

そう言うと、ヴァルクの体が光りだす。そして光は包むようになり、段々小さくなり、消えた。

とりあえず、着るか。

サイズは合っているが・・・動きにくいな。  
ネクタイを緩め、ボタンを2つ開ける。

「ん、こんなもんか」

次にプリズムを出すと、目を瞑り人の気配に神経を集中させた。



### 33：阻止せよ

駅まで徒歩5分、学校まで電車で15分。

「ギリギリだね」

「うん、次の電車じゃ間に合わなかったよ」

「あー、電車数年ぶりくらいの感覚」

「はは、向こうは魔法とかの次元だもんね」

「うん、でもなんかこっちの世界に違和感感じる」

「夜月も、元は向こうの人なんでしょ？」

「うん、メフィリアっていうんだけどね」

「ふうん。ロウさんやギンさんもだよな」

「うん、ロイウェルトとギラティルト」

「ホントに違う世界なんだねえ」

「・・・桜花本気で来るの？」



「行きたい」

「危ないかもよ?」

「得意の飛び蹴りがあるから大丈夫」

「・・・」

「でも夜月が迷惑ならやめる」

「それはないよ!でも、ヴァルクさんは難しいよ?」

「それは分かってる。あの顔は誰でも落とせそうだもんね」

「うん、ガクもね」

「あ、そういえばいつ告るの?」

「えっ?」

「何、告られるの待つ気?」

「そんなじゃないよ。一生片思いの予定」

「は?」

「だって無理って分かってるもん・・・」

「アンタばか?恋は突進してなんぼでしょう。何その消極的な考え」

「突進は行き過ぎだと思う。そりゃ桜花みたいに、高校生ながら大人の色気だせたらいいけどさあ」

「アンタねえ、その顔持つといて何言ってるの。今まで告られなかったのは、ロウさんとギンさんでもダメだとかいう、理想が高過ぎる思考が周囲に漏れてたからよ。あ、あと私が睨み利かせてたのもあるけど」

「ロウ兄とギン兄の顔は、毎日見てたら慣れてくるもん」

「いいなあ。写メ欲しい」

「ヴァルクさんは？」

「それはそれ、これはこれ」

「ああそう」

「アンタこそガクさんの写メ欲しくないの？」

「・・・欲しい」

「ちょっと、髪が不良王子っぽいけどね」

「だから違ってる」

桜花との久しぶりの会話はすごく楽しかった。  
話していたらあつという間に電車は目的地に着き、すぐ前に見え

る学校へと向かう。

校舎に入ると皆体育館へ行く様子だった。

「これ直で体育館？」

「みたいね」

冷房の効いた体育館へ入ると、ズラリとイスが並べてあった。

壇上は幕が引いてあった。

「とりあえず、座ろうか」

「うん」

各クラス横並びで、前から3年、2年、1年という順だ。

桜花の右横に私が座る。

しばらくすると皆座ったみたいで、いきなり電気が消える。

一瞬ざわめくが、幕が開きスポットライトが当てられ、マイクを持った生徒会長が出てくると一斉に沸いた。

今の生徒会長は、勉強はそこそこらしいが、バスケット部の元エースで、2年生の時にケガで引退して生徒会長になってから、ものすごい人気だ。

顔が良いのもあるんだろうが、男子からもノリの良さでウケている。

『みんな暑い中悪いな！今日は面白い企画を用意したから存分に楽しんでくれ！！』

「「「キヤー！！！」」

「「「おおおお！！」」

とりあえず、私達もノッておくが・・・

「桜花、うるさいよ」

「私に言つな。でもやっぱり会長もカッコ良いよね」

「まあ・・・」

「ヴァルクさんとガクさん見た後だと、見劣りするけどね」

「うん」

『それでは！今から名前を呼ばれる生徒は壇上へ上がってください！  
1年A組・伊藤・・・』

呼ばれた5人の生徒が壇上へ上がる。全員1年生だった。

「何するんだろうね」

「さあ」

すると新たに5人の生徒が現れる。

『それでは始めます！世紀の、大告白ー！！』

「「「・・・わあああああー！！！」」」

「告白ー！？」

「すごいね。1年生から告ってく感じかな？」

『えー、1人ずつ参りましょう。皆様暖かい目で応援をお願いします』

『勇気あるトップバッターわあ、1年A組・一君ー！！』

「「「わあああー！！！」」」

『では、マイクをお渡しします』

『・・・1年A組・一頑場はじめ がんばです！伊藤 姫さん、オレと付き合ってくださいー！！』

「「「わああああ」「」

異常な盛り上がりを見せながら、5人の告白は終わった。

出来たペアは3組で、全校生徒の前で告白とあって、流石にブサイクはいなかった。

『次々参りましょう！2年C組・宮城 桜花さん、2年D組・・・』

「は？呼ばれちゃったよ」

「うん、がんばれ」

次にまた5人が呼ばれ、全員2年生でその中には桜花も入っていた。

桜花に告白した子は、野球部副キャプテンの子だった。

桜花の返事は・・・

「ゴメン。私には心に決めたリアル殺生丸様がいるの」

その断り方はなくないかい、桜花ちゃん。意味が分からないと思うよ？

無事に（？）告白を断った桜花が帰ってくる。

「何あの断り方？」

「だってヴァルク様がいるもの」

「うん、分かってるけど」

「夜月、私ここじゃもう恋出来ない」

「はい？」

「だって誰もカッコ良いと思えない」

「・・・」

3年生の告白も終わり、終了かと思つたら・・・

『それでは図々しいですが！最後にこの私、尾美<sup>おひ</sup> 飾<sup>かざ</sup>が、告白させていただきます！！

「「「きゃあああああ！！」「」」

ものすごい歓声。いや悲鳴？

『えー、2年C組・深頼 夜月さん。壇上へ上がってください！』

「へ？」

「うわ、ここできたか。がんばれ夜月。1人だよ」

「えええ、どうしよう桜花」

「アンタにはガクさんがいるでしょ。すっぱり断ってきな」

「そうじゃなくて・・・」

「ほら、早く行きな！」

「えええ」

私はビクビクと壇上へ上がる。

ちよっ、これきつい。視線がイタイ。超イタイ。

『深頼 夜月さん、一目惚れでした！オレと付き合ってください！』

「「「ぎゃあああー」「」」

え、ええ何て言えばいいんだっけ？

ガクが好きだからムリです？これでいいかつ。

「えっと、ガク『悪いな、こいつは俺のなんだ』」





### 33：阻止せよ（後書き）

名前適当コメン。特に、ハジメ ガンバ。よく頑張った

### 34：さらば地球

「「「キヤアアアー!!!!」」」

突然私を後ろに引き寄せたのは、青髪と制服を乱した・・・ガク。

「ガク・・・」

なんで・・・

ガクは私を見ない。

「こいつは渡せねえんだ。手え出さないでもらえるか」

先輩が驚きを隠せない中で、不敵に笑うガク。

「え、え!?!ちよ、」

『き、君は?』

「ガク。メフィリアの・・・婚約者だ」

「!？」

『メフィ?』

「ああ違ったか、ヤツキの婚約者だ。つーことで、帰るぞ」

「え?え?」

私を抱き上げると早々と出口に向かう。

体育館から出ると、中から爆音と化した声が聞こえる。

ガクはプリズムを出す。

「ロウ連れてこればよかったな・・・」

そう呟くとどこかの家の屋根に飛び乗る。

「行くか」

え?まさか・・・

思った通り、私を抱いたまま、屋根をトントんと渡っていくガク。

驚きながらも、さっきのガクの言動を思い出し、1人赤面する。  
いや今の格好も赤面物だけどね？

「何、赤くなつてんだ」

「そこは空気読んでスルーしとこつよ」

「そうか？悪いな」

さも悪くなさそうに言い放つと、それきり無言で走り（跳び？）  
続けるガク。

私も無言で、考えるのは帰ってからにすることにした。

「ん、着いた」

「ありがと」

カギを差し込み、ドアを開ける。ガクはさっさと入っていく。

私も後を続けると、ガクはソファに倒れこんだ。

「ガク？どうしたの？」

「分かんねえ、時間、くれ……………」

「…………ガク？」

それきり返事が無くて、熱かと思っておでこに手を当ててみたけど普通だった。

なんだか気持ち良さそうに眠っているから、そのままにしておくことにした。

携帯を開いて見ると、桜花から1通メールが来ていた。  
一言。

【お幸せに】

何それっ！？思わず電話をかける。

『はい？』

「もう終わったの？」

『そりゃ、先輩がラストだったしい？』

「皆の反応、どうだった？」

『すごかったよ。誰だ誰だ！？どこの貴公子だ！？って感じで。で、その貴公子は？』

「寝てる」

『はい？』

「帰ってきたらすぐ寝た」

『なにそれ』

「私は桜花のメールの方が、なにそれだった」

『あれだけ言われれば、そーでしょーよ』

「期待していいのかな？」

『違ったら殴ってやるわ』

「ふふ、ありがと」

『うん、また連絡待ってる。できれば夏休み中にお願ひね』

「え？」

『だって今日はもう帰るんでしょ？』

「うん、そうだけど」

『じゃ、待ってるから』

「・・・切れた。・・・私も寝よ」

もう1つのソファで横になるとすぐに眠気がやってきた。

目を覚ましたら、既に夜になっていて、戻ってきていた。  
久々の地球とは、意識のないままお別れになってしまった。



### 35：私の王子様

「なんでどっちも寝てんだ？ナニしてたんだ」

「あのねロイ、あきらかに違うでしょ」

「まあメフィリアはなあ」

「珍しいな。ガクの力が弱まっている」

「あら、ホント」

「ああ、あっちの空気に慣れる前に力を使つたからだろ。ってかヴ  
アルクとティルがここにいていいわけ？」

「「面白いものが見れそうだと思って」」

「おまえら正真正銘、兄妹だよ。若干ガクが哀れに思えてきた」

「・・・誰が哀れって？」

「おう、ガク」

「・・・戻ってきたか。急に体が重くなつたんだが」

「慣れない環境で力を使つたからだ」

「ああ、なるほど。だから前にメフィリアも熱出たのか」

「熱出したのか？」

「ああ。こっちの力が体に戻ってなかったところに、激しい運動をしたからだろう」

「激しい運動？」

「森を歩いた」

「じゃあちょっと前に、森が揺らいだのは・・・」

「少々破壊した」

「おまえ・・・」

「代償は払った。問題ない」

「プリズム使っても相当だったろ」

「ああ。流石にきつかった。自然は怒らすもんじゃない」

「・・・ん」

「メフィリア？」

「んー？」

「戻ってきたんだ」

起き上がると、王の間だった。・・・あれ？何でヴァルクさんとテイルさんがいるの？

「ロウはいるか？」

ガクがヴァルクさんに聞く。

「外でグレスティーヌと遊んでいる」

「そうか。メフィリア、行くぞ」

そう言つと、私の手を取つて外へ出て行く。

「ロウティス！」

「グルル！」

「滝まで頼む」

「グル」

大きくなったロウティスに2人が乗り、ロウティスは雲のない空

を、優雅に羽ばたく。

銀色に輝く3本の内、真ん中の滝の前で降りると、ガクが手招きする。

ロウティスは高く舞い上がり、夜空を楽しんでいるようだった。

「メフィリア・・・」

ガクが、甘く私を呼ぶ。それに応えるようにガクの腕に収まると、しばらく抱きしめられた。

鼓動が、高く波打つ。

ガクが私を解放して、目を合わす。

「未来永劫、メフィリアだけを愛す。俺と結婚しよう」

「は、い」

一気に実感が沸いてきて、嬉しくて涙が溢れる。

「メフィリア・・・」

私の涙をガクがぬぐう。それでも止まらなくて俯こうとしたら、手を添えられ、上を向かされた。

ガクが・・・近づいてくる。

「」「」おめでとー！！」「」

「チッ」

「へ！？」

現れたのは、さっきまでシリーズの城にいた面々。

「はあー。気配は分かってたけどな、空気読むかと」

「まあガク。がんばれ」

「うつせーよ。おまえらの所為だろ」

「メフィリアは一筋縄じゃないぞ？」

「大体分かるって」

「忍耐訓練に、滝修行よりも効果があるんじゃない？」

「おまえら、人事だと・・・」

「ガク、おめでとう」

「くっ、ヴァルクだけは、なにがあっても素直に喜べねえ！まずその、からかい顔をやめろ」

「元からだ」

「ウソつけ」

「娘を頼んだぞ」

「なんでジエ<sup>あんた</sup>イネルもからかい顔なんだ!？」

「おいおいガク、おとーさまにあんたはないだろう?」

「うつせえ、ヴァルク!・・・斬る!」

「くくつ、」

「メフィリア、良かったわね。10年越しに叶って」

「ティルさん・・・知ってたんですか」

皆が現れた驚きで、涙は止まっていた。

「ふふ、バレバレよね。知らなかったのはガクぐらいだわ」

「メフィリア、お母さんも嬉しいわ。ガク君なら安心できるもの」

「お母さん・・・私、幸せになるから」

「ええ、当たり前よ。・・・ところで、桜花ちゃんはどうなったの？」

「また連絡してって」

「そう。近い内に貴女 능력도開花するわ。その時に行きなさい」

「うん」

「メフィリアは学校どうするの？」

「・・・・・・・・」

少し悩んだ後、ガクの方を向く。

「ガク!!」

「!？」

私は走っていき、勢いよくガクの胸に飛び込んだ。



「決めた！高校を卒業したらガクと暮らす！」

月は今日も、夜空を優しく照らす。

完 あとがき

### 35：私の王子様（後書き）

ありがとうございました。

## あとがき

TeaとSeaの響きが大好きなティシーです。

私の処女作である『異世界の王子様』に最後までお付き合いいただき、ありがとうございました！

何も考えずに突っ走った作品でしたが、少しはお楽しみいただけたでしょうか？

所々、アレ？的箇所は、寛大なお心でスルーをお願いします。

ガクが天然な所は、一番スルーをお願いします。

あの説明以外思いつかなかったんです！

ついでにロウティスの好物も考えてなかったんです。

今回の完結は、夜月&メフィリア中心の物語が完結ということでこれからは番外編としてガクフォンスらについて書きたいと思います。

ご希望の人物で何かリクエスト等がありましたら、応えたいと思っていますので遠慮なくご連絡ください！

この物語は私が中学生の時にメモ（落書き）していたのを少し抜き取った作品で、

全て詰め込んだのが、今連載中の『龍神の想いと守神の願い』です。

基が同じなので設定が時々似ていますが、ぜひそちらも読んで見てください。

私の本命作でかなり力入れてます（笑）

また、私のホームページではアンケートも設置しております。  
ご協力いただけたら幸いです。  
では、今後とも応援よろしく願いします。

番外編：巷の噂・・・？（前書き）

ガクとメフィリアが結婚直後。

番外編：巷の噂・・・？

グレスティーン（ちょっと幸せ太り気味）とハイウェイド（天然入り気味）の会話を訳してお届けします。

ローヴェンド昼・上空

『ねえ（2人の結婚）聞いたあ？ハイウェイド』

『ああ聞いたよ（グレスティーンの体重減）グレスティーン。おめでとう、だね。ボクとしては複雑なんだけど』

『ふふ、でも私は嬉しいわ。長年願ってきたことでしたもの』

『そんなにかい？』

『ええ。小さいころはよく会っていたのに、いつの間にか・・・』

『ああそうだね。いつの間にか、（体重と体長が）合わない日が長

くなっていたね』

『ええ、難しいものね』

『そうだね・・・』

『だから、今度はこのままうまく行ってほしいわ』

『・・・ボクは、どんな（太った）君でも愛すよ』

『嬉しいわ、ハイウエイド』

『グレスティーン・・・』

城の上空で2頭の超高速竜リンド＝ヴルムが尾をくつつけながら見詰め合っている様は、それはそれは不気味だったという。

ローヴェンド夜・上空

『でもねグレスティーン、他の男にまで報告はやめてほしいな』

『え．．．？』

『グレスティーンの体重や体長を知っているのはボクだけがいんだ』

『ハイウエイド．．．．．ごめんなさい』

『いいんだよ、ボクも大人げなか』ごめんなさい、何の話かわからないの』

『．．．え？昼間の話の続きでしょ？』

『．．．え？昼間の話の続きならなんで体長まで出てくるの？いや体重もだけど』

『．．．え？昼間の話ってグレスティーンの体重が減ったことの話じゃないの？』

『．．．は？ガク様とメフィリア様のご結婚のことでしょう？』

『．．．』



『・・・』

『・・・』

『・・・むしろ体重の話はどこから聞いたわけ？』

『・・・う、裏ルート・・・？』

月夜の空に、グレスティーンのものすごい咆哮が鳴り響いたそう  
な。

番外編：巷の噂・・・？（後書き）

意味不、ですか？・・・ですよ。

ちよつと噛み合っているように噛み合っていない2頭の会話が書いてみたくなっただけです、すみません。

## 続・キャラ紹介（前書き）

『異世界の日々』の内容を全てこちらに移動しました。

『異世界の日々』は検索除外設定を致します。

このページとVSシリーズの（7）までは『異世界の日々』にあった内容と同じです。

ご迷惑をおかけします。

## 続・キャラ紹介

【ガクフォンス・ローヴェンド】 182cm 金色の瞳・青髪  
愛称：ガク

【ヴァルク・ローヴェンド】 ガクの異母兄弟 185cm 金色  
の瞳・銀髪 ローヴェンド現国王

【ティルフェミナ・ローヴェンド】 ガクの姉 165cm 金色  
の瞳・金髪 愛称：ティル

【メフィリア・シリーズ】 ガクの妻 160cm 黒目・黒髪  
地球：夜月やつぎ

【ロイウェルト・シリーズ】 メフィリアの兄 愛称：ロイ 地球：  
滝月ろいげつ

【ギラティルト・シリーズ】 メフィリアの兄 愛称：ギラ 地球：  
銀月ぎんげつ

【宮城 桜花みやぎ おうか】 メフィリアの親友 167cm 黒目・茶髪

【ロウティス】プリズム ペット 顔はドラゴン、体は一応鳥。手あり。3本の尾。額に結晶。プリズム 変化可能。愛称：ロウ

プリズム 結晶 ローヴェンドの王族のみに現れる、守る力。通常、額に輝く。邪な心を持つ者、人を殺めた者、力に耐えられない者には、決して現れない。

さんだいほうりゅうかく 三大宝龍角 ヴァージス 龍神の3本の角を元につくられた、死剣・王剣・純剣の3つの伝説の剣。鳥神竜の力を宿せる。

メティメフィユス 【死剣】 能力：‘生’を持つものに対し、防御不可能な攻撃を持つ。発動：死徒に解せ  
現主：ヴァルク・ローヴェンド

レストシエラン 【王剣】 能力：‘自然’以外の全ての効力を相殺する。発動：王誇よ来い

現主：ガクフォンス・ローヴェンド

シアスメランテ 【純剣】 能力：主の決意さえあれば遠隔操作や回復など可能。主の‘決意’と呼応し、自らの意思で力を出せる。発動：純志を示せ  
現主：ティルフエミナ・ローヴェンド

ちようしんりゅう 鳥神竜 ヴァージス 龍神の直系に不死鳥の能力を加えた神。人化可能。

【イフィス・シルティス・ファア】 光の不死鳥の力が宿るとされ

るシルティス・プリズムから生まれた光の鳥神竜。光剣Ⅱファアを持つ。  
奥義：光麗衝コウレイショウ

【ロート・クレファリナー・シャロー】 炎の不死鳥の力が宿るとされるクレファリナー・プリズムから生まれた炎の鳥神竜。炎剣Ⅱシャローを持つ。  
奥義：炎々華エンエンカ

【ピアス・メルエノール・リヴァ】 水の不死鳥の力が宿るとされるメルエノール・プリズムから生まれた水の鳥神竜。水剣Ⅱリヴァを持つ。  
奥義：水冥想スイメイソウ

【ウィール・エフィズ・クライマリー】 風の不死鳥の力が宿るとされるエフィズ・プリズムから生まれた風の鳥神竜。風剣Ⅱクライマリーを持つ。  
奥義：風瞑嵐フウメイラン

【ゾルト・ラミュール・ブレッティ】 雷の不死鳥の力が宿るとされるラミュール・プリズムから生まれた雷の鳥神竜。雷剣Ⅱブレッティ  
奥義：雷孔禅ライコウゼン

ヴァージス大陸    ローヴェンド、フユイレス、シリーズ、リネイメル、グークルの5国を表す超大陸。

【ヴァージス】    ドラゴン    龍神    ドラゴン系の最高神。

以下おまけ？

超高速竜リンドーヴルム    翼がなく、胴が長いドラゴン。戦闘系ではなく、ひたすら飛行スピードを追及した希少種。速度は・・・「もんのすご

く速い」で

【グレスティーン・リンド・クエル・アルシェイ・ヴィジアンヌ】  
雌メス 愛称：グレスティーヌ

【ハイウェイド・ヴルム・スィーザ・アン・グライク・ラス】 雄オス

＊ムダに名前が長いって言うのは突っ込まない。付けたかったんデススイマセン。

<ローヴェンド> 広大な土地と絶対的な戦闘力を誇る大国。5国の中心部に位置しており、ドラゴンの顔にあたる形をしている。血に関係なく強い者が国を治めるが、プリズムを持つ者が圧倒的に強いいため、結局王族が王となる。

現国王：ヴァルク・ローヴェンド

<フуйレス> ローヴェンドの北にある、ドラゴンの首にあたる形をしている国。

現国王：ディゼイド・フуйレス

<シリーズ> ローヴェンドの南にある、ドラゴンの3本の尾にあたる形をしている国。5国では最小。夜月よつきに照らされると銀に光る3つの滝が有名。

現国王：ジェイネル・シリーズ

<リネイメル> ローヴェンドの東にある、ドラゴンの右翼にあたる形をしている国。

現国王：ウエヴィア・リネイメル

<グークル> ローヴェンドの西にある、ドラゴンの左翼にあたる  
形をしている国。

現国王：ハーデウス・グークル



## V S 異大陸（前書き）

V S シリーズは基本グロ表現が出てきます。お気を付けください。

V S 異大陸

「オイ」

「はぁ・・・」

「あら」

「・・・賞金付けたら早いだろう」

「頼む」

1週間後

「どこだ」

「なぜ」

「おかしいわね」

「あと考えられるとしたら・・・異大陸か？」

「厄介な」

事の始まりは1週間前に遡る。

メフィリアが俺の妻になってから、すぐにメフィリアの能力は開花した。

それが、1週間前だ。ところが、開花した瞬間メフィリアは消えた。ついでに側に居たロウも一緒に。

開花が遅かった分、力が大きくて暴走したのでは、というのが俺たちの見解だ。

しかしおかしい。メフィリアの搜索に多額の懸賞金を掛け、俺達も搜索したにも関わらず、全く気配が掴めない。

大体、ロウが居るのにこんなに遅いはずはない。

「異大陸は本当に厄介だぞ」

「搜索範囲が広すぎる」

「見つけたとしても・・・」

「戦闘覚悟だな」

「既に1週間か・・・」

俺、ギラ、ティル、ヴァルク、ロイの5人で会議を開く。  
異大陸となれば、通常じゃ渡れない。

「風の鳥神竜ウィールに探させるしかないか」

「それでどれくらいです？」

「早くても1日はかかるわよね」

「ロウも一緒のはずだからな、命は大丈夫だと思うが・・・」

「異大陸は俺も行ったことねえな・・・」

くそっ！メフィリア・・・

いくらロウが一緒と言っても、ロウにも限界がある。

今のロウの主は俺。俺が側にいなければ、力は発揮できねえ。

「ウィールを呼ぶ」

そう言つと、外へ出る。

その後に4人もついてくる。

プリズムを出すと、目を瞑り意識を集中する。

上空に、黒い雲が集まり始める。

「『エフィズ・プリズムより生まれし風の鳥神竜、ウィール・エフィズ・クライマリー。今こそ時空を越え、我が元へ現れたまえ』」

そう唱えると、俺の前に緑の円が現れる。

ソレは大きくなり、人型になる。

瞳は黒緑色、肩にかかる黄緑の髪、ウィールの人化時の姿だ。

『やあ、久しぶり』

「ああ。至急人探しをしてもらいたい」

『誰を？』

「メフィリアとロウ。共にいるはずだ」

『メフィリア・・・これはまた懐かしい。見当は？』

「恐らく、異大陸」

『異大陸？ああだから俺。了解、じゃ』

そう言つと、ウィールはロウと似た姿になる。瞳の色と体の模様が違つが。

「任せた」

『グル!』

応えるように鳴くと、大きくなり、黒い雲の中に姿を消した。

『メフィリア、無事か?』

「大丈夫、でもロウが」

『我はよい、しかしここは本当にモンスターが多いな』

「ごめんロウ。私のせいだ」

『仕方あるまい。誰でも最初は失敗するものよ。気にするでない。それにおまえに泣かれると、ガクに怒られる』

「ふふ、ありがとう」

『ああ。だが連中に見つかることだけは避けねば』

「うん」

私とロウがここに来てから1週間。どうやらここは、異大陸らしい。

異大陸のどこかはロウも分らないと言っていたけど、危険な所には間違いない。

ジャングルのような所で食料と水には困らないが、モンスターが多い。

私の力は、少しずつ戻ってきているようだけどまだ使えないし、帰る術は見つからなかった。

『メフィリア、伏せろ!』

言われた通り伏せると、頭上を炎が通る。

「ギャウウウ」

『グアルル!』

ロウが止めを刺すと、襲ってきたモンスターは静かになった。

ロウは何も言わないけど、私は気付いていた。

ロウの力が、弱まってきていることに。

平和なシリーズと地球で育った私には、戦う方法が分からなかつ

た。

それに下手に動けば、ロウの邪魔になる。  
今私に出来るのは、泣かない事、力を早く戻す事。

ガク・・・



## VS異大陸（2）

ウィールを召喚した翌朝、‘風’が俺に届いた。

王の間に、泊まっているロイとギラを含む5人を集める。

「見つかった。バズガル大陸だ」

「バズガル？守神の島しかない所か。なら安全だ」

「いや、あそこは変わった。守神バズガルの守護はもうない。かつては最も安全な島と言われたが、今は最も危険な島だ。守護が外れると同時に、他大陸のモンスターが押し寄せた。エサを求めてな」

「何故守護が・・・？」

「さあな。だが何億年も前に張られたバリアだ、いつ効力が消えてもおかしくなかったんじゃないか？大体あの島は、バズガルが気まぐれに創った島だろう」

「しかしバズガルと言えば、ヴァージスの親ともいうべき存在。そして私達はヴァージスの子。手を貸す義理ぐらいはあるんじゃないか」

「別にバズガルは助け求めてないけどな。まあいい、メフィリアにロウ、ついでに島奪還するか」

「ロイ、ギラ何人送れる？」

「この前、力使ったからな・・・父上と母上を呼べば5人でもいけるが」

「俺が先に行く。送れ」

「ガク、待て。私達は最強だが、万能じゃない。分かっているだろう」

「・・・」

「1度に2人送れるか？」

「厳しいな・・・失敗したら同じ島でも別々だ」

「それでいい。やれ」

「3人はできませんの？」

「3人とも違う大陸へ飛ぶぞ」

「テイル、おまえは待っている。私とガクが先に行く。ロイ、ギラこのことは伏せておけ」

「だが・・・」

「流石に異大陸に行くとなると騒動だ。適当に丸め込んでおけ」

「・・・分かった」

「では用意を」

「ガク、あいつらの具体的な位置は分かるか？」

「いや・・・ウィールは風で搜索する。それで島に2人の波動を感じた事を伝えてきただけで、詳細は分からねえ」

「じゃあ南で行くか」

「まあそれでいい」

「やるか、ギラ」

「了解」

書かれた魔法円にヴァルクと乗る。

『・・・我等は望む。バズガル大陸へ』

・・・

「・・・いきなりか」

目の前にはデカイ蜘蛛。

「来い、王剣」  
レストシエラン

手に大剣が現れる。

トン、と跳んで背後に回り、背中に剣を突き刺す。  
出てきたのは青い血。

剣を抜き、地面に降りると、巨体が倒れる。  
ヴァルクは・・・どうやら違う場所らしい。となるとここが南かも怪しい。

だが・・・

ドゴオオンン・・・

ヴァルクはあっちか、遠くはないな。  
とりあえず、合流すべきか。

俺は派手な音のする方へ、レストシエランを片手に向かった。  
すると現れたのは、さっきの蜘蛛よりも巨大な蜘蛛。しかも顔が  
2つ。

・・・なんか楽しそうだし、見とくか。

「ギシャアアア」

糸が向かってくる。くく、久々の実戦だ。  
直前で糸を交わす。

「雷聖の初・【迂<sup>ウライ</sup>雷】」

ゴオオン

メス顔の方に当たった。効いたか？

「ギヤギヤギヤギヤアア」

ん、なんか怒らしたっぽい。お顔は、でりけーと、らしい（メフ

イリア説）からな。

こんな所で遊んでいる場合ではない。が、大蜘蛛コレが雑魚敵だとしたら、この島は本当に厄介だな。大体足何本あるんだ。

「フン、全て潰す。解せ、死剣」  
かい  
メディメフィユス

後ろへ跳びながら、斬撃を繰り返す。

「ギャアアア！」

・・・足6本ぐらい逝ったか？

動きが鈍くなったソレの身体に、剣を突き刺す。

「死徒しとに解せ、『メディメフィユス』」

メディメフィユスの刀身が消える。いや私には見えるが、大蜘蛛には見えていない。

剣を伝い、気が流れ込んでくる。

慣れてしまったこの感覚。常人は、「気持ち悪い」と言っのだろう。

生気が抜けたソレは、軽い音で倒れた。

「ガク、いつまで見ている」

「・・・メディメフィユスを使う相手か？」

「久々の実戦で血が騒いだ」

「まあ分かるが。血に濡れた島だな」

「ああ。さて、どちらへ向かう」

「さっきプリズムで一帯を調べたが、2人の気配がしない。だが、あっちに何かあるな」

「では、あちらへ向かう」

「ああ」

ふと、思う。

「ガク、帰りはどうするんだ？」

「・・・」

## V S 異大陸（3）

鬼族。きぞく

それが私達を捕まえた者達らしい。  
連中はみな、頭になにかしら角が生えていた。

そして私達は今、鬼族から頭かしらと呼ばれている奴の前に差し出されていた。

ソイツは、頭から2本の角が出ていて、牙も見えていた。なににより体格が尋常じゃない。2mは軽く越す身長とゴツイ鎧。

「ぐはは、今度はどんな小物を捕まえてきたのかと思えば、守護獣と極上の女じゃあねえか。思わぬ大物だ。おまえらよくやった」

「ヘイ！」

「守護獣ということはヴァージス大陸からやってきたのか。女、名は？」

「・・・」

「コイツを殺されたいか」

「！・・・メフィリア」



「人に名乗る時はフルネームが基本だろうがぁ」

「ってか人？人なの？」

「とりあえず、気絶しているロウに危害を加えられないよう言うとおりにしなきゃ。」

「メフィリア・シリーズ」

「なんだ有名な戦闘種族ん所の姫じゃないのかい」

「戦闘種族？」

「思わず聞き返すと。」

「お嬢ちゃん、箱入りかい。ヴァージス大陸の戦闘種族と言えば、ローヴェンドの王族だろう？しかしまあ今じゃ龍神の力も弱まったと聞くがなぁ。それでも恐れられている力はあるが、所詮人を殺せぬ神の産物よ」

「ローヴェンドの王族・・・ガク達が戦闘種族？確かに強いみたいだけど・・・」

「我等は人ではないが、守護獣がやられるくらい弱まった種族に、我等が負けるわけがねえ！これからの時代は、鬼族の時代だぁ！」

「あ、人じゃないんだ。」

「「オオオオオ！」」

「今夜は宴だ！それまで牢に入れておけ！」

「ヘイ！・・・来い！」

グイ、と体に巻きつけられている鎖を引っ張られる。  
ロウは他の連中が、肩の上に担いで運んでいる。

牢は狭く、汚かった。そこに私達と一緒に放り込んだ男達は、卑下た笑い声を響かせながら出て行った。

「ロウ？・・・ロウ」

名を呼びながら、ロウの結晶<sup>プリズム</sup>を撫でる。

「ロウ・・・ごめんね」

するとプリズムが光だした。

『・・・メフィリア、無事か。すまない』

「私は平気。ロウが守ってくれたから」

『油断した。まさか鬼族とは』

「その鬼族ってなんなの？」

『名の通り、鬼の種族だ。人の型を取ってはいるが、本質は気が荒く、仲間内でも喧嘩が絶えないほどだ。頭はそれほど良くないが、戦闘能力は高い』

「どうしよう・・・」

『この壁を壊して・・・！！』

「ロウ？」

『ガクの気配がした・・・』

「ガクが？」

『恐らくヴァルクかテイルも来ているはず。ならば、まだ動くべきじゃない。機を待つぞ』

「分かった」

「あのバカデカい城と旗は・・・」

「ああ、ここに巢食っているのは鬼族らしいな」

「中から一瞬プリズムの気配を感じた。捕まっていると見て、まず間違いない」

「生きているか。良かったな」

「俺のプリズムにロウも気付いたはず。攻め込んだ時に巧く抜け出すだろう」

「そんな元気があるか？」

「なんとかするだろ。あいつは守護獣だ。大切なものを何がなんでも守り通す」

「なら正面突破にするか」

「派手にな」

「異議なし」

木に身を隠し、城の様子を窺っていた俺とヴァルクは、片手に相棒を持って同時に飛び出した。

「ん？敵が来たぞおお！！」

「落ち着け、どうせバリアは破られない」

門番が俺達に気付く。

「ガク、城にバリアが張ってある」

「任せろ。王誇よ来い、『レストシエラン王剣』」

刀身が光るレストシエランを、そびえ立つ鬼の城へ振り下ろす。

ピシッ、ピシピシ、バリイイン

「なっ！バリアが！！」

「敵襲だあああ！！」

その声に反応し、続々と鬼が出てくる。

「あれは人じゃないからいいよな？」

「ああ。だが、無闇に城は壊すなよ」

「分かってる」

「さて・・・俺も殺るか。ガク、巻き添えをくらうなよ」

「くらうか、誰に言ってるんだ」

冷静に見えるが、ヴァルクも相当感情が高ぶっているらしい。口調が昔に戻っている。

俺の前に黒い影が広がる。

プリズムを出し、影を避ける。

「なんだ？動けねえ！？」

「こいつが原因か！」

「おい、誰か！なんとかしろ！」

鬼どもが困惑の声をあげる。

「死徒に解せ、メデイメフィユス『死剣』」

ヴァルクが呟いた瞬間、闇の餌食になり生気を無くした鬼どもは、パタパタと倒れていく。

ヴァルクの目は、いつもより金色が強く光っていた。

## VS 異大陸（4）

「頭ア！大変だ！」

「どうしたあ！」

「敵が！次々とこつちがやられてく！」

「何人だ？！」

「2人です！でも無茶苦茶強くて！！！」

「オレもいく！恐らく取り戻しに来たんだろう。あいつらを人質に持ってこい！」

「ヘイ！！！」

騒ぎは私達にも聞こえていた。

「ロウ」



『ああ、頃合いか。逃げるぞ』

「どうするの？」

『壁を突き破る。今ならガクの波動も近い。我の後ろへ』

言う通りに動く。

ロウは狭い牢の中で大きくなる。

『少し我慢している』

ガゴオオオン！！

光が一点に集まったと思ったら爆音が響く。

「っ、」

『行くぞ！』

「なんだあ！？・・・あいつらあ！！逃がすな、追ええ！！」

「ヴァルク！」

「ああ。回収が先だな」

俺達は外へ出て、音のした方へ向かう。

「ロウー！！」

声に反応し、振り向いたそこには小さいロウを抱えながら落下するメフィリアの姿が見えた。

「メフィリア！ロウ！」

レストシェランを地面に突き刺し、2人に向かって飛ぶ。

空中で受け止めると、メフィリアの目から涙が零れ落ちる。

「ガク・・・ロウが」

「大丈夫だ。落ち着け」

「で、でもっ」

「大丈夫だ。死んでない」

「いたぞー！！」

「チッ」

「ふえっ」

混乱と安心と恐怖で、パニックになっているメフィリアに手刀を落とす。

今はこの方が都合がいい。

「ガクフォンス！上だ！」

「なん！？」

ヴァルクの声に上を見ると、2つ頭の巨鳥が俺達目掛けて急降下していた。

デカいくちばしをギリギリでかわす。

「ギエエエエアア」

「くっ、」

急いでレストシエランを取りに行きながら、片手で魔法を撃つ。

「光聖の初・【伝光波<sup>デンコウハ</sup>】」

しかし魔法は全く効いていないようだった。  
おかしい。魔法の耐性が異常に高い？

ヴァルクももう1羽の巨鳥と対峙している。

地面に2人を置いて、巨鳥から守るように立ち、レストシエランを構える。

「来い、相手をしてやる」

「ギエエエエエ」

2つの頭は火と雷を吐く。

ここは動けねえ。

「王誇よ来い！『レストシエラン』！！」

俺の斬撃は巨鳥の攻撃を突き破り、俺の背丈くらいありそうな巨鳥の両足を挟む。

レストシエランを阻めるものなどない。

「ギャエエエアア！」

「うつせえな。起きちまうだろ」

「」「ギエエエ」「」

追い討ちをかけるように、もう一度剣を振ろうとするが、上空から複数の鳴き声が聞こえ上を向く。

「おいおい」

上空にはあの2つ頭の巨鳥が3羽迫っていた。

ヴァルクを見ると、楽しそうではあるが苦戦しているようだ。本体に突き刺して生気を吸うか、影の上に留まらせて吸うかだが、あの巨体に飛行系となれば、相性が悪いんだろう。

「ヴァルク、2人を守れ！こいつらは俺が相手をする！！」

「チッ」

ヴァルクが剣を構えたまま、俺の横へ着地する。

「ぐはははっ！やはり落ちたな！戦闘種族と言っても所詮人間よ！」

「あいつは・・・」

「鬼族の頭だろうな」

「プリズムごとき人も殺せぬ龍神の只のなごりよ！それも退化したブツでは獣も殺せぬか！」

「黙れ！ヴァージスはおまえごときが侮辱できる相手じゃねえ！それにプリズムは人を守る力だ！殺すための力じゃない！」

「ならば守ってみよ！！やれ！！！」

「「「ギエエエアア！！」」」

「仕方ねえ。島はあまり壊しなくなかったが、召喚するか」

「他種族の龍神<sup>ヴァージス</sup>への侮辱は極刑に値する。バスガルも許すであろう」

「先にあの化け鳥どもだ。魔法が効きにくい、厄介だ」

「鳥神竜の威力ならば、効くであろう」

「いっそのこと、全員呼ぶってのはどうだ」

「ウィールはどうした？」

「帰らせた。こっちに留まらせているだけでも疲れるからな」

「ふむ……………」

「！」

「やっぱり来たか」

「まあ良いタイミングであろう」

俺達の目の前に現れたのは

「おいおいおいデカいな！顔2つだぜ！？」

「気味悪いですね」

「ペットにするには憎たらしいツラしてますわ」

ロイ、ギラ、ティルの3人だった。

## VS 異大陸（5）

「なんでおまえら来れた」

「父上と母上らが送ってくれた」

「なんで両親知ってるんだよ」

「すまん、バレた」

「はあ・・・」

「向こうじゃ、姫を救いに行ったって、英雄だぞ」

「英雄は前からだ」

「ガク、どうでもいいじゃない。巨鳥<sup>アレ</sup>を殺ればいいんでしょう？」

「テイル、落ち着け。目が一国の姫として、あるまじきコトになつてゐるぞ」

「だって久しぶりの実戦だもの。楽しませてもらうわ」

「まあいいか・・・」

「大将は誰が？」



「巨鳥<sup>アレ</sup>を倒した後、早いモン勝ちだ」

「分かったわ」

「巨鳥<sup>アレ</sup>は魔法の耐性が高い、気を付ける。そういえばヴァルク、苦戦しているようだったが大丈夫か？」

「ふっ……ガクフォンス、一人前に兄上様の心配か？偉くなったものだ。……私<sup>アレ</sup>がたかが獣相手に苦戦していた？笑わせる。ほんの小手調べをしていただけだ」

「そーかよ。じゃ行くか。ロイとギラは、メフィリアとロウを守れ。巨鳥<sup>アレ</sup>は俺等が倒す」

「ふん、潰す」

「おまえは吸うんだろ」

「黙れガクフォンス」

「……仲の良い兄弟は放っておいて、行きましようか。示せ、純<sup>シラス</sup>メランテ<sup>剣</sup>」

そう言うと、シラスメランテを片手に5羽の中の1羽に向かって行く。

「テイルが愉しそっだぞヴァルク？危険なのは？」

「うむ、そういう時もあるのでは？さあ一暴れだ、死剣」  
メディメフィユス

「あいつら巻き込むなよ」

「善処する」

「オイ。・・・俺達も行くか、王剣」  
レストシェラン

3人が額にプリズムを光らせながら、それぞれ突っ込んで行く。

「（巨鳥の耐性を破れ）純志を示せ『シアスメランテ』」

「飲み込め、【闇の空間】」  
デス・フオール

「王誇よ来い『レストシェラン』」

巨鳥に向かって闇が勢いよく広がる。

それを避けながら、さっき戦っていた巨鳥へレストシェランを振り下ろす。

三大宝龍角は同じ戦場に3つ揃ってこそ力を発揮する。

斬撃の威力もスピードも上がったレストシェランの攻撃は、巨鳥の片翼を貫いた。

「ギエエエエ！」

「よし、これで飛べねえな。あとは一発だ。よく分かん厄介な耐性も、効力を相殺するレストシェランには関係ねえ」

「シルティス」プリズムより生まれし光の鳥神竜、イフィス・シルティス・ファア。今こそ時空を越え、我に力を貸したまえ。『コウレイショウ進る無数の光よ、四方八方を包み込め』【光麗衝】！！」

ファアへと姿を変えたレストシエランは、巨鳥を光と化した。

「まず1体」

闇がソイツを捕らえる。突然動けなくなったソイツは奇声を上げながら翼をバタつかせる。

私が近づくのが分かると、2つの顔はそれぞれ攻撃を放つ。メディメフィユスの切っ先を、攻撃の迫る方向に向ける。

「死徒に解せ『メディメフィユス』」

闇と一体化した刀身は、相手の攻撃をも飲み込む。

私はプリズムを発動したまま、ソイツの首へ一瞬で移動し、メディメフィユスを突き刺す。

「ゲエアアエエエー!!」

「くく、もうしばらくの辛抱だ。もう少しで楽になれるぞ?」

顔がこちらを向き、炎の玉を放つ。

それを魔法で防ぐ。

「風聖の中・【守風】<sup>シュフウ</sup>」

炎玉は防いだものの、翼やら尾やらで攻撃をしてくるソイツ。  
闇の空間はその場から動けないだけで、その他は動かせられるのだ。

やはりこれだけ巨体だと、生氣も大きい。時間がかかる上に、こちらの器も埋まってくる。

もう1体、吸収できるかできないかくらいか。

守風が先に破られるか、巨鳥が倒れるか。

守風にひびが入り、さらなる尾の攻撃で風が消え去る。  
巨鳥も手応えを感じたのか、甲高く鳴く。

だが・・・

「私の勝ちだ」

巨鳥は一声鳴いた後、首を地面に垂らした。

魔法の耐性？

そんなもの、シアスメランテにかかれば一撃よ。

近くにいた巨鳥へ、‘耐性を破って’、という思いを込めて一撃を放つ。

斬撃は掠っただけだったけれど、それで十分。

あの巨鳥に、最早魔法の耐性はなくなつた。

巨鳥が斬撃を避けた瞬間に私も移動する。

巨鳥の顔の横へ移ると

「雷聖の中・【飛震雷】ヒシンライ」

魔法を放つ。

「ギエアアアア！」

「痛い？ふふ、すぐに楽になるわ」

「ギャエエエアアア」

片方の顔がケガをしながらも、2つの頭で私の手からシアスメラ  
ンテを弾く。

シアスメランテは巨鳥の後ろの地面へ刺さった。

「あらあら、悪い子ね。そんなに苦しみたい？」

「ギエエエエエエ！！」

2つ頭は飛び上がり、首を捻りながら攻撃を放ってくる。

それを避けながら、機を狙う。

私も飛びながら、魔法を巨鳥の足に集中的に放つ。

翼を使っていたって、足も原動力。動きが鈍ってきたところで地  
面へ降りる。

すると巨鳥は空中から、地面にいる私に向かってくる。

「ねえ、良い事教えてあげる。私のシアスメランテはね？遠隔操作も可能なの」

私に2つのくちばしが迫る。

「（来い）純志を示せ『シアスメランテ』」

ガンッ！

「ギヤアアアアエエエ！！」

ケガを負っていない方の顔に、シアスメランテが突き刺さる。

「ばいばい。光聖の中・【滅壊光<sup>メツカイコウ</sup>】」

最後は、ケガを負っている方の顔に魔法を叩き込むと、シアスメランテを引き抜く。

「ふふ、愉快かったわ」

## V S 異大陸（6）

「ギラ、あいつら戦闘となると性格変わるとこ変わってないな」

「らしいね。3人共愉しそうだよ」

まずは1人1体ずつ倒し、残りは2体。

鬼族の頭を守るように飛んでいたが、3体が倒れると怒り狂うように俺達に向かって来た。

「飲み込め、【闇の空間】」  
デス・フォール

闇に2体が囚われる。

「王様よ来い『レストシエラン』」

「（斬り崩せ）純志を示せ『シアスメランテ』」



冷静さを失った上に、こちらは3人。  
2体の巨鳥が敵うはずもなかった。

「なんだと！？戦闘種族の力は衰退していったはずじゃ！？」

力なく地面に伏す、5体の巨鳥を見ながら鬼族の頭は叫ぶ。

「おまえ頭悪いだろ。立派な角に力取られてんじゃね？」

「情報は常に新しいものを。戦闘の常識だ」

「確かに衰退していったけど、私達は別よ」

3人は一旦プリズムを消し、鬼族の頭に向き直る。

3人の体に傷が目立たないのは、間違いなくプリズムのお陰だった。

「何！！？・・・だが甘い！この巨鳥は、鳥の頂点に立つ鳥族だ！  
これくらいでは終わらん！」

アイツが何か叫んでいるが、俺達は気にせず話す。

「大体、なんでアイツ自身が向かって来ねえ？」

「強い者を支配すると眩むものだ」

「なんで鳥族がアイツに従ってるのかしら？」

「薬だろう。目がおかしかったからな。所詮は野生獣」

「でもおかしいわねえ。鳥族といえば、顔が5つと聞いたのだけど  
？」

「そういえば」

「あと、強力な技を使うとか・・・」

「聞いてんのか！！？核<sup>「アイツ」</sup>があれば、元に戻るんだよ！！」

アイツがそう叫び、ソレを空へ投げると5体の巨鳥が青白く光り  
だす。

「まさか」

一瞬強く光ると

『ギエエエエエアア！！』

「あーあ、復活しちゃったよ」

「しかもなんだこの大きさは」

「可愛げの欠片もないわ」

空に飛んでいたのは、城を覆うくらいの5つ頭の巨鳥だった。

そして一声大きく鳴いたあと、

バグッ

「な何を、ギヤイヤアア・・・」

「喰った」

「おいおい」

「大将取られちゃったわ」

「あいつ一応強いんじゃないかなかったか？」

「頭は弱かったのさ」

「今の頭関係なくね？」

しかも・・・

「なあ・・・ヴァルク」

「うるさい。今集中してんだ」

「口調崩れてんぞ。気付いてんだろ？焦ってんだろ？」

「黙れ」

「いやでもこれホント、プリズムが発動しねえんだけど」

「まいったわ、本当に使えない」

「どうすんだ。攻撃力には関係ないが、守備力に大きく響くぞ」

「アレは剣で相手をできる範囲なのか？」

「どの首から狙えばいいのかしら？」

「・・・とりあえず攻撃してみるか」

「どれに？」

「3号」

「だからどれだよ」

「左から1号」

「真ん中か」

「ああ」

「だが下から攻撃しても避けられるぞ」

「あの高さまで跳ぶのもプリズムなしではキツイわ」

「シアスメランテを使うか」

「ああなるほど。荒っぽいが仕方ないか」

「分かったわ」

俺とヴァルクは同時に地を蹴り、高く跳ぶ。

「（傷付けずに飛ばせ）純志を示せ『シアスメランテ』」

ビュオオオ

後ろから斬撃が迫る。背中にと当たると、体は一気に前へ飛ばされる。

同時に魔法の詠唱を始める。

「導かれし聖なる風よ、我が願いを聞き入れ、その力を示せ」

迫る俺とヴァルクに、5つの頭が反応する。

放たれた5つの攻撃を、詠唱しておいた魔法で防ぐ。

「風聖の中・【シュフウ守風】」

顔の正面まで来ると、5号のくちばしが迫った。

それをギリギリでかわして首に手をつくど、反動を利用し5号の首の上へ乗る。

ヴァルクもうまく2号に乗ったようだった。

「王誇よ来い『レストシエラン』」

そこから3号に向かって斬撃を放つ。

向かいからは、ヴァルクが魔法を詠唱していた。

放った斬撃は3号と4号の攻撃を退け、そのまま3号の目を抉る。悲鳴を上げる3号の変わりに4号が大口を開けながら迫ってくるが、上に乗られていることに気付いた5号が首を振り回す。

俺が首を下り胴体へ着地すると、詠唱を終えたヴァルクがこちらに飛びながら魔法を放った。

「炎聖の中・【ツイセキエン追跡炎】」

後ろから迫る炎を3号は首を下げて避けたが、炎はそれを追う。3号に当たったが・・・

「あ。魔法は効かないんだっただか」

「ああそういえば……。なんでアイツ避けたんだ」

「ノリだろ」

「ノリか」

「テイルが必要か」

「そろそろ斬撃にでも乗って来るんじゃない？」

「（斬り崩せ）純志を示せ！」

「後ろか」

「来た来た」

「『シアスメランテ』！！」

後ろから飛んで来たテイルに気付かない巨鳥はテイルの攻撃をモロに受ける。

って

「どこに撃ってんだ！」

片翼が欠けた巨体はグラグラと揺れる。

「順序ってもんがあるだろ！？」

「ノリっていうものもあるわ」

「ふむ、落ちるな」

「翼は案外ヤワだったわね。あとこの子鈍感ね」

「今の俺達は地上戦のいいが、その前にこっから地面に叩きつけられたら無傷は難しいぞ」

「両翼イッておくか。やれガク」

「俺かよ」

「私は……死徒に解せ『メディメフィユス』」

グサ、と胴体にメディメフィユスを刺すヴァルク。

俺も上に飛ぶと、右翼目がけてレストシェランを振り下ろす。翼に斬撃が直撃するのと、俺が飛ばされるのは同時だった。

ちよ、

「つと待てー！」

ヴァルクの剣が刺さったのに気付いた1号が振り向き、丁度近くにいた俺をくちばしで弾いた。

空中にいた俺は、プリズムがないと避けられないわけで、地上に向かって急降下中だった。



「ああー・・・、ガク。向こうで元気だな」  
「メフィリアにはうまく言っとくわ」

なんて会話が、落ちる寸前に聞こえた気がした。

「誰が落ちるぐらいで死ぬか・・・！！」

しかし下は硬い地面。加えて弾かれた左肩からは流血が酷い。  
これだからプリズムがないと・・・

今から『中』の詠唱をしてたんじゃ間に合わねえ。

「導かれし聖なる水よ、我と共に歩み、力を貸したまえ」

右手に持っていたレストシェランを空間にしまい、両手で詠唱を始める。

「水聖の初・【リッスイソウ離水創】！！」

間に合え！

## V S 異大陸（7）

ザブン、ドガガッ

「うぐつ、」

落下地点に水を創りあげること、衝撃を和らげたが勢いの全ては殺せず、多少の傷を負った。

未だ出血している左肩を抑えながら上を見ると、欠けた両翼でジタバタと上空に留まろうと頑張っているみたいだった。

段々と高度が落ちている。落下するのも時間の問題か。

だが……あの2人には借りがある。

「くぐつ。・・・来い、レストシエラン」

レストシエランを再び右手に持ち、左翼の付け根を狙う。

「王誇よ来い『レストシエラン』」

ズバッ

『ギエエエエエエアアア』

「っ！ガク、あいつ・・・！」

「あら、ゆっくりと落ちる予定でしたのに」

完全に飛べなくなった5つ頭の巨鳥が地上へ落下してくる。

「名案を思いついたティル」

「何ですの？」

「おまえがダメ元で『衝撃を和らげる』とシアスメランテを放ちつつ、私がメディメフィユスの間でコイツの落下を直前で止める」

「名案ですわ」

「名案だろう。よし決行だ」

ん？メディメフィユスとシアスメランテの気配？  
何をする気だ？

「（衝撃を和らげる）純志を示せ『シアスメランテ』」

ブオオ

「呑み込め、【闇の空間】デス・フォール」

ゴオオ

突然広がる闇を咄嗟に横に跳んでかわす。

「つぶねえ」

巨体の下に完全に闇が広がりきると、ピタリと落下が止まる。

が、

「っ、テイル・・・無理だ」

「え？・・・きゃあ！」

ドゴオオン

数秒止まっていたが、闇が消え去ると再び落下し派手な音と共に地面に激突した。

モクモクと砂煙が上がり、しばらく様子を見ることにした。

「（煙を飛ばせ）純志を示せ『シアスメランテ』」

少し待つと、煙の中から上空へ向けて斬撃が放たれた。  
同時に煙が消え去る。

「お兄様？全然止まっていなかったのだけど？」

「今日は結構使ったからな、あの巨体を留めるのは無理だった」

2人は言い合いながらスタスタと歩いてくる。

「なんだ、無事だったか」

「あらガク」

「おまえこそ生きていたのか」

「誰かさんの所為で多少ケガは負ったけどな。テイル」

「はいはい。・・・（傷を癒せ）純志を示せ『シアスメランテ』」

グサ、と左腕にシアスメランテが突き刺さる。

「っ、ちよっ・・・ティルさん？なんか無駄にグリグリしてる気がしますけど」

「気のせいよ」

いや、あきらかに・・・

「いたいいたいっ、痛いから。悪かったから決るな」

「ふふ」

ふふ、じゃねえっつの。

シアスメランテが抜かれると傷が段々と癒えていく。

「さてどうする？翼はヤワかったが、体は丈夫なようだぞ？」

地に伏していた巨体がゆらりと起き上がる。

『ギャエエエエエー！』

随分お怒りのようだ。

しかしまだ頭がグラグラするのか視点が定まっていない。

「ふむ、中々骨の折れる相手だ」

「やっぱり普通に左から首を落とすべきかしら？」

「まあ待て。目には目を、歯には歯を、超巨鳥には鳥神竜を、って言うだろ」

「召喚か。どうせなら最初から使えばよかったんだ」

「あんな、あれは極度に疲れるんだぞ？」

「まあ知っているが・・・プリズムを使わないとなると・・・」

「私達には無理よ」

「ああ分かってる。俺が召喚する。さあイフィス、ロート、ピアス、ウィール、ゾルト・・・誰にしようか」

「誰でも一瞬で終わるだろう」

「ふふ、あの子達は派手で好きだわ」

「派手ね・・・ゾルトでいくか。島ごと壊す可能性があるが。俺が倒れたら後は頼むぞ」

「ああ」

「分かったわ」

「ん。・・・『ラミュール』プリズムより生まれし雷の鳥神竜、ゾルト・ラミュール・ブレッディ。今こそ時空を越え、我が元



へ現れたまえ』」

黒雲が空を支配し、俺達の前に一閃の雷が落ちる。

それは型を帯び、額から伸びる角に小さめの翼、そして3本の尾を持つ巨大なドラゴンとなった。

全身に雷を纏うドラゴン 雷の鳥神竜は、黒黄色の瞳をこちらに向ける。

『久しぶりだな』

「・・・ああ」

『プリズムを使わなかったのか。ああ原因はアレか』

「ああ、いくぞ」

『御意』

『ギエエエアア!!』

5つのくちばしが一点に攻撃を溜め始める。

「『天よ猛る魂に応えよ、深き想いよ雷となりて降り注げ』」

俺も詠唱し始める。

『オオオオオオオ！！』

それに応えるようにゾルトも吼えると、ゾルトの体に雷が集まりだす。

そして大きな雷がゾルトの上に落ちると、ゾルトは消えた。変わりに黒雲に覆われた空が、ゴゴゴゴと唸りだす。

「ゾルト！轟<sup>とどろ</sup>け【雷孔<sup>ライコウ</sup>禅<sup>ゼン</sup>】！！」

## VS 異大陸（8）

カツ！ドオオオオオオン！！

島中に、しかし俺達を避けながら、雷が次々と派手に鳴り響く。

『ギエエエエエアア！！』

雷が雨の様に降り落ちる中、どうすることもできずにうつ頭の巨鳥はのた打ち回る。

「・・・・・・・・ん・・・・？」

「メフィリア、起きたか」

「え．．．何コレ！？大丈夫なの？」

「ああ雷か。大丈夫だ」

「でも．．．」

「ガクの鳥神竜の技さ。こんなもん初めて見た．．．」

「大丈夫さメフィリア。ガクを信じな？」

「うん．．．．．！ロウ、ロウは！？」

「大丈夫。ガクが力を与えればすぐに回復する」

「そうなの？」

「ああ。ただ今は無理だけどな．．．」

「はあっ、はっ．．．流石に、きつい．．．」

「私はもう満足した。だから今日はもう戦わないぞ?」

「私もよガク。だから頑張つて」

「なん、だそれ」

「介抱はしてやるから安心しろ」

「・・・もう、前、が見えね、ム、リ・・・」

「というかとつくに十分じゃないか?」

「は、やく、言え」

「自分の限界に挑戦しているのかと」

「あほ、か・・・」

バタ。

ガクが倒れると、雷が止み黒雲が去る。

「ふむ。ギリギリ島の原型は残ったな」

「そうね。良かったわ」

「さて、どう帰ろうか」

ガクを担ぎながらロイ達の元へ歩く。

「ガク！」

起きたメフィリアが走り寄って来る。

「ガク・・・ごめ、なさっ」

「メフィリア、後だ。ガクは少し気を失っているだけだ。問題ない。今はどう帰るかだ」

厳しいかもしれないが、そっちの方が問題だ。

コクコクと頷いたメフィリアをテイルに預け、ロイとギラに向き直る。

「何か方法は？」

「ない」

「ない」

「……」

どうするんだ

しばらく3人で固まっていたが、いきなり空が輝きだす。

よう頑張ったな

「これは……」

「……バズガルか？」

空に問う。

ほっほっ。あたりじゃ。お初にお目見えする。ワシが守神・バズガルじゃ

お目見えしてないけどな。

「助けてくれるのか？」

借りがあるからな

と、いうか・・・

「最初から見てたのか？」

バレたか？嬢ちゃんが死の危機に曝されたら手を出すつもりじゃったが

「それ以前に何故島を放っておいた？あんたの領土だろうっ」

・・・オトナの事情じゃ

忘れてて俺たちの波動で気付いた、という所か。

「・・・流石、適当だな」



ヴァジーの親であるからな

ヴァージスの親って・・・

「関係あるのか？」

まあよい、お主らを帰せば良いのじゃろっ？

何が『よい』なんだ？

「・・・ああ、頼む」

では・・・

カッ！

## V S 異大陸（完）

あの後、守神によってローヴェンドへ戻されたガクフォンス達は一日経てば皆元通りだった。

力が戻ったガクフォンスはロウティスに力を分け、ロウティスはすぐに回復した。

一回使って安定したのであろうメフィリアの力は以後暴走するとはなく、

自分で空間を操れるようになった。

そして無事に夏休みが終わる前に地球へ帰ったメフィリア、ガクフォンス、ロイウェルト、ギラティルトの4人だったが、

メフィリアは大量の宿題に泣くこととなり、3人はメフィリアの宿題を手伝う羽目になった。

・・・ガクフォンスが手伝えたのは、読書感想文だけだった。

V S 異大陸・完

## V S 異大陸（完）（後書き）

あ、あれ？

なんでこんなに短いのも、申し訳ないです。

バトルが過ぎるとなんだか・・・。

次回は兄弟マジ喧嘩編です。メフィリア争奪戦！？

やっぱりバトルがイイ！！

ただ今、もう一つの小説『龍神の想いと守神の願い』を連載中です。  
あっちが本命だったりします（笑）  
よかったら見てください。

兄弟喧嘩

ガン!!

「今日という今日は許さねえ! 死ぬヴァルク!!  
来い、王剣!」  
レストシエラン

「ふん・・・おまえが死ぬ。  
解せ、死剣」  
メディメフィユス

「何事・・・?」

気持ち良く眠っていたティルフェミナは、2つのプリズムの発動

を感じ目を覚ます。

時計を見ると、朝の7時を指していた。

部屋の窓から外を覗くと、案の定額を光らした2人の男が空中で闘りあっていた。

「はぁ・・・」

またか、と1つ溜息を吐くと、侍女を置かないティルフェミナは、さっさと自分で用意をして現場へと向かった。

ギイン！

「俺のモンに手え出しやがって！」

「自分で守っておかないのが悪いのだろう」

「のヤロオー！！」

「何があつたのです？」

群がっている内の一人の兵士に問う。

「ティルフェミナ様！

それが・・・どうやらヴァルク様がメフィリア様に手を出された  
ようで・・・」

それを聞いたティルフェミナは目を見開く。

「お兄様が・・・？」

「はい・・・」

「・・・メフィリアはどこに？」

「あちらで侍女とおられるようです」

兵士に礼を言うと、ティルフェミナはメフィリアの元へ向かった。

ギギン！

「何年待ったか分かってんのか！？」

「10年であろう」

「おまえ知ってて・・・！！」

「喜んでいたぞ・・・メフィリアも」

「アイツを巻き込むんじゃないやねえ！！」

「メフィリア」

「ティルさん！おはようございます」

「ティルフェミナ様、おはようございます」



「ええ、おはよう」

メフィリアと侍女のリチエンダに挨拶を返すと、早速メフィリアに聞いたです。

「メフィリア、お兄様が手を出されたというのは本当なの？」

「あ・・・はい」

あの兵士を信じていなかったわけではないが、心の中では疑っていた。

流星のお兄様でも、弟の妻に手を出すことはしないだろう、と。

しかしメフィリアの様子を見ると、どうも本当らしい。思い出したのか僅かに身体が震えている。

ケンカを止めようと思っていたが、ガクの気持ちを汲み今回は放っておくことにした。

「メフィリア・・・つらかったわね。ごめんね。リチエ、頼んだわ」

「はい」

「ティルさんは・・・？どうするんですか？」

「私は闘いの被害者が出ないように、バリアを張るわ」

ティルフェミナはそれだけ言うと、兵士達が群がっている場所の一番前へと向かった。

城と兵士をバックに立ち、プリズムを発動する。  
恐らく今から闘いはヒートアップしてくるだろう。

「シマスメランテ  
示せ、純剣」

「王誇よ来い『レストシェラン』！！」

「呑み込め、デス・フォール【闇の空間】」

白い斬撃と闇が激突する。

斬撃は闇を突破し、ヴァルクへ向かう。

斬撃を逃れ広がった闇は、ガクフォンスを呑み込む。

ヴァルクは斬撃をメディメフィユスで受け止めると、詠唱を開始する。

「エフィズ・プリズムより生まれし風の鳥神竜、ウィール・エフィズ・クライマリー。今こそ時空を越え、我に力を貸したまえ。」

『見えぬ風の刃よ、嵐の如く荒れ狂え』

切り刻め、【風瞑嵐】！  
フウメイラン

ウィール  
風の鳥神竜の力を纏ったメディメフィユスを闇に向かって振り下ろした。

・・・

闇に囲まれたガクフォンスは、レストシェランを前に突き出し、

詠唱を開始する。

「ラミュール」プリズムより生まれし雷の鳥神竜、ゾルト・ラミュール・ブレッティ。今こそ時空を越え、我に力を貸したまえ。

『天よ猛る魂に応えよ、深き想いよ雷となりて降り注げ』

轟け、ライコウゼン【雷孔禅】！！」

・・・

闇を押し広げ猛撃する雷と、数方向に分かれ迫る風の刃。

空中で2つが激突すると、爆音が鳴り響き周囲に煙が充満する。

その中から2つの影が動き、地上へ着地する。

両者が風の魔法を唱えると煙は一瞬でなくなった。

ヴァルクは左腕から血が滴り、ガクフォンスは左肩にザックリと線が入っていた。

「っ、おまえは相変わらず防御が下手だな」

「ってえ。いいんだよ、攻撃力が弱点を上回ってるからな」

「どうだかな。今の攻撃もおまえの方が確かに威力が上だったけど、ケガが重いのは私じゃなくおまえだ。」

風瞑嵐を1本受け損ねたのだろうか？私だったら全て避けられる」

「だからなんだ。最終的に立ってればそれでいいんだよ」

「そんな事を言っているから大事なものを横取りされるのだろうか？」

「自分が悪いくせに、さも俺が悪いように言ってるじゃねえよ」

「くくっ、しかし美味かったな」

「・・・」

「おーおー、殺気は1人前だな。」

だが、メフィリアも喜んでいたのは事実だぞ？」

「あ？」

「勧めてみたら好奇心が勝つたらしい。その後は美味しそうに次々飲んでいたぞ」

「・・・メフィリアは良い。おまえはダメだ」

闘いを見守っていたティルフェミナは疑問を感じ始めていた。

この2人の特徴として、1度力を発散すると随分冷静に話す所がある。

しかし今回は別で、ガクは自分の妻に手を出されたのだ。今回ばかりは冷静になるとは考えにくい。

どうもおかしい・・・。

「大体なあ、メフィリアはまだ未成年なんだぞ！？早いだろ！」

「ガク、おまえがそれを言うか？幼少期から飲んでいたではないか」

「あれはヴァルクが悪い。最初に俺に無理矢理飲ませたのはヴァルクだ」

「そうだったか？」

「まあ、それはもういい。

今は俺の大切に保管してあったワインだ」

ワイン!!？

・・・ああ。

しかし、メフィリアの震えは？

いえ、そんなことは後よティルフエミナ。  
今は・・・・・・・・あのバカ共を・・・

ふふ、ふふふ。

ティルフエミナは妖しく笑うと、シアスメランテを握り締め、詠唱を始める。

「メルエノール」プリズムより生まれし水の鳥神竜、ピアス・メルエノール・リヴァ。今こそ時空を越え、我に力を貸したまえ。

『全てのものを水と化せ』」

そこまで言うと、水の鳥神竜ピアスの力を纏ったシアスメランテを2人のいる中心部へ素早く投げた。

そして・・・

「スイメイソウ【水冥想】」

中心部の地面へ刺さった剣から、地面に触れずに水が円状に広がっていく。

「なっ、ティルか！」

「マズい!!」

水の円は一気に広がると今度は空へ柱を上げる。  
柱は空まで届くと、どんどん中心部の剣へ向かって細くなっていく。

水の柱がなくなると、水が触れていなかった土以外、何も残っていないかった。

「・・・あら、生きてらして？」

何もなくなった場所に突然現れた2人に、ティルフェミナは笑って言う。

「殺す気がティル」



「ええ」

「・・・（ヴァルク？ティルの顔が危ないんだけど？）」

「（うむ。今日は止めに入らないからこのまま放って置くのかと思っていたのだが・・・どうしたんだ突然？）」

「（俺達何かしたか？）」

「（いや・・・少し暴れただけだな）」

コソコソ話を続ける兄弟に、引き抜いたシアスメランテを向ける。

「ふふ、お話は城で伺うわ。メフィリアも入れて、4人でね」

につこりと、微笑むティルフェミナに2人は何も言わなかった。

兄弟喧嘩（完）（前書き）

かなり前の話と間空きました。すいません。

## 兄弟喧嘩（完）

王の間へと移動する最中メフィリアは私にくっついて歩いていた。ちらちらとガクを見ながら。

「さあ・・・お話を伺いましょうか？」

向かい側のソファに三人を座らせ、私は一人で座り心地の良いソファに腰を下ろした。

「事の発端は？」

「俺のワインをヴァルクが飲んだ」

「簡潔過ぎるんですが」

「朝食を食べてたんだ」

「ええ」

「俺はメフィリアと二人のつもりだったんだが、邪魔が入った」

「・・・ええ」

「お兄様に向かって邪魔とはなんだ」

「で、しょうがなく三人で食べていたら、俺が呼ばれて王の間を出た」

「ええ」

「その隙に・・・」

テイク１・ガクフォンスビジョン

「メフィリア、ワインに興味はないか？」

「ありますけど、まだ未成年なので・・・」

「気にするな。さあ飲め！」

「ヴァルクさっ・・・・・・・・美味い」

「そつだろう？ガクには秘密だ」

『でも・・・』

『ほらもつと飲め。』

どうだメフィリア、ガクなんぞやめて私の所に来

』

「ちよつと待てガクフォンス！

私がいつそんなことを言った。被害妄想が激しいぞ。

本当はこうだ・・・

## テイク２・ヴァルクビジョン

『メフィリア、ワインに興味はないか？』

『あります！前から飲みたかったんです！』

『そうかそうか。ならコレを飲もう』

『はい！ヴァルクさん大好きです！』

『くくつ、ガクは飽きたか？』

『はい・・・。私前からヴァルクさんの事』

』

「アホか！！どんだけ話、造作してんだ！！

メフィリアがそんなこと言うはずねえだろう！」

「はあ・・・。ちよつと二人は黙っていてもらえます？

メフィリア、本当の事を教えてちょうだい？」

「はい……。実は……………」

### テイク3・メフィリアビジョン

『メフィリア、ワインに興味はないか？』

『ワインですか？』

『ああ、極上のある』

『でも私まだ…………』

『気にするな。ガクはもつと幼い頃から飲んでいた。持つてくるから待っている』

『はい…………』

数分後

『これだ。』

…………ん。飲め』

『ありがとございます…………』

『・・・ふむ、なかなか』

『美味しい・・・』

『ふっ、もつと飲むか？』

・・・

「そして私が飲み終わって、ヴァルクさんだけ飲んでいた所にガクが帰って来たんです」

・・・

『ふう・・・。悪いなメフィリア、予想外に時間が　　っ！  
ヴァルク！！』

『なんだ？』

『なんだじゃねえ！！それは俺のだろう！  
なんで飲んでんだ！？』

『細かい事は気にするな。  
メフィリアに捨てられるぞ』

『っのやろっ！！』

パライイイン・・・

『メフィリア！？なんで震えてる？何かされたのか？！』

『ちがつ』

『おまえの怒りを見て怖がっているのだ。気付け馬鹿者。プリズムをしまえ。圧力で器がめちゃくちゃではないか』

『ちつ。外出るヴァルク！！  
許さねえ！！』

．．．．．

「なるほど。お兄様が悪くて、メフィリアが震えてたのはガクのせいね。」

「．．．とりあえず、死んできたなら？二人共」

「待てテイル」

「落ちて着けテイル」

「何度言ったら分かるんでしょうね、あなたたちは」

「いやゝいつだろうな？」

「分からないんじゃないか？」

「やはり三途の川でも見てきては？」



「あの・・・」

「うん？どうしたメフィリア」

「ガク、ごめんなさい。その・・・ワイン・・・」

「メフィリアに怒るわけないだろう？悪いのは全て、ヴァルクだ」

「おい」

「いいな？だから気にするな」

「ありがとう」

「何だこの敗北感」

「良かったですね。貴重な経験ですよ」

ローヴェンドは、今日も平和だ。

兄弟喧嘩・完

## 兄弟喧嘩（完）（後書き）

次回はヴァルクの初恋か、それぞれの生まれた場所の話の予定です。

## ボクの初恋

それは、ヴァルク・ローヴェンド、5歳春の出来事でした。

「父上」

「なんだヴァルク？」

「ボクとお庭で遊んで！」

「ごめんなヴァルク。これから仕事があるんだ。また遊ぼうな？」

「…はい」

ヴァルクは聞き分けの良い子だった。

自分の母親に関して、何かを気付きながらも一切聞くことはなかったし、駄々をこねることもしなかった。

ただ時々皆の目を盗み、城を抜けて町へと降りる。

今日も、いつものように昼過ぎに町へ来ていた。そしてたまたま見つけた小さな公園のベンチに何をするでもなく、座っていた。

「あなただあれ？」

ビクッ。

振り向くと、そこにいたのは自分より身長の低い少女。くりくりとした青い瞳がヴァルクを凝視している。

「わたしニメイユ！」

「・・・ヴァルク」

「まるく？」

「ヴァルク」

「ふあるく？」

「ヴァルクっ」

「みるくっ！」

「！？ヴァルク！」

「ばるく？」

「：そう」

それが、少女　ニメイユとの出会いだった。

ニメイユに出会ってからヴァルクの脱走は多くなった。いつも二人は町近くの小さな公園で会っていた。

「ばるく！キレイ！」

「なにが？」

名前はバルク、で手を打ったらしい。

「ばるくの目！キラキラ！」

「目？」

「うん、目！」

「そう？」

「うん！キラキラ！」

そんなに綺麗とは思わないが、まあ少女が喜んでいるのならいいだろう。

「ニメイユの目も綺麗だよ」

「わたし？わたし海〜！」

ニメイユの瞳は深海のような綺麗な青だった。嬉しそうに輝く瞳は、何にも染まらないで欲しいとヴァルクは子どもながら強く願った。

「ニメイユは何歳？」

「6歳！」

「えっ」

「ばるくは？」

「…5歳」

ヴァルクは驚いた。絶対に自分より下だと思っていたのだ。

「じゃあニメイユがおねーちゃんだね！」

ベンチに座っていたニメイユはピョンと飛び降りると、ヴァルクの方を向き手を掲げて誇らしげに言った。

「…そう、だね」

何か納得のいかないヴァルクだったが、嬉しそうなニメイユの表情を見ると全てを許してしまった。

その気持ちを不思議に思いながらも月日は過ぎていった。

「ニメイユは毎日ここに来るの？」

「うっん！でもここ好きなの！」

「そっか」

「ばるくも来てくれるからもっと好きになった！」

「そ、そっか」

「でもときどき来れないよ」

ニメイユの瞳が悲しげに揺れる。そんな表情を見ていられなくて、  
ヴァルクは話題を変えた。

「ニメイユはどこに住んでるの？」

「えっとね、あっち」

「…」

なんとなく具体的な…。

「城の近く？」

「わかんない！」

「…」

そして一ヶ月と半月が過ぎた頃、父ティファレイマスからお咎め  
を受けた。

「ヴァルク、町へ出過ぎじゃないか？」

「…ごめんなさい」

「多少は社会勉強だと思って放っておいたが、この頃は度が過ぎる  
ぞ」

「はい」

「これから一ヶ月は勉強に励め。良いな？」

「…はい」

そう頷いたものの、ヴァルクは自分が我慢できないだろうと思っていた。

そして案の定、二週間も経たないうちにヴァルクは公園へ向かった。

「…ニメイユ？」

しかしニメイユの姿はなかった。来るたびに会えたわけではないが、次の日もいなかった。

父に怒られることを覚悟して三日連続で来たその日。

「…あなたがバルク君？」

その声に振り向く。その先にいたのは青い瞳をした女性。直感でニメイユの母親だと分かった。

一方の母親は驚いてしまった。金色の瞳。それは王族を意味する。娘は‘キラキラ’としか言っていなかった。そして、これくらいの歳で王族と言えば…‘バルク’ではなく、‘ヴァルク王子’！

「ニメイユは？」

「…し、失礼しましたヴァルク王子。娘は、患っていた病気が悪化し、つい先日…」

母親の声が震える。それはヴァルクに対しての畏怖ではなく、悲しみを乗り切れていないためだ。

「ニメイユが！？だが、あれほど元気に…！」



「ニメイユは、いつもヴァルク様のことを話していました。いつもいつも楽しそうに……」

「そんな……」

「あの娘は今日が誕生日だったんです。そしてこれを渡すのだと張り切っていました」

そうして母親から差し出されたのは、水玉模様の便箋。表紙には「ばるくへ」と書いてあった。

急いで開けて見ると、一枚の紙が入っていた。

【ばるくへ。

いつもニメイユとあそんでくれてありがとう。

まえにニメイユがおねーちゃんってゆったけど、ニメイユはばるくがだいすきです。だからほんとうはばるくのおよめさんになりたいです。

でもおとうさまがニメイユはからだがよわいからダメだってゆうの。だから、だからね。

ニメイユがおおつきくなっただけになったらニメイユをばるくのおよめさんにしてください。

きつとばるくがニメイユしかみれないくらいきれいになるよ。ニメイユより】

ヴァルクは初めて、悲しくて泣くということを知った。

もう戻ることの出来ない日々。もう見ることの出来ない笑顔。もう会うことの出来ない少女。

押し寄せるのは悲しみの波。

「う、あ……うわああ！」

手紙を握り締めて、ヴァルクは泣いた。生涯にただ一度、悲しみに声を上げて泣いた。

それは、儚く散った、誰も知らないボクの初恋。

それから大切なものは、自分で守ると決めたんだ。

『桜花、です』

瞳の色も髪の色も違う。だが、似ている　ニメイユ……。



討伐！

ローヴェンド騎士団の戦闘力はヴァーギス大陸一だが、ゼットヴァン巨大魔獣の相手をするのは騎士団ではなく三兄弟俺達だった。

ダダダダダッバンッ！！

突然入ってきたのは、騎士団団長一級騎士グライド。

「お伝えします！リュイ海にゼットヴァン巨大魔獣が現れたとのことです！！」

リュイ海とはフユイレス、ローヴェンド、リネイメルが囲む東の海だ。

「誰が行く？」

焦っているグライドとは対照的にヴァルクが冷静に聞く。ついでに今は3時のおやつタイムだ。

行く気のなさそうなヴァルクとティルを見て席を立つ。

「俺が行く」

「気を付けてね」

「ああ」

心配そうなメフィリアの頭を撫でると、グライドへ向き直る。

「周辺の住民に被害が出そうなら対処しろ。ゼッドヴァンは俺一人  
でいい。あと超高速竜の用意を」  
リンド＝ヴルム

「はっ！了解しました！！失礼します！」

慌しくグライドは駆けて行く。俺は窓を開けると空に向かって大声で叫ぶ。

「ロウティス！来い！！」

呼んだ後にメフィリアの方を振り向く。

「行つて来る」

そして5階の窓から飛び降りた。

直後に何処から飛んできたロウの背に着地する。

「リユイ海にゼッドヴァンだ。リンド＝ヴルムで移動する。飛行場  
へ行くぞ」

「グルル」

上昇するロウの背でそれだけ伝えたと、プリズムを出してゼッド

ヴァンを確認した。

「結構デカいな。いや長い？住民よりも海の生物に被害が出そうだ」  
「グル」

飛行場へ着くとリンドゥ・ヴルムのグレスティーヌ（ ）がやる気満々にスタンバイしていた。

「出来るだけ早く頼む」  
「グギヤギャー！！！！」

俺の声にもものすごい咆哮で応えると、グレスティーヌは高速で空を飛び始める。

「グギヤツ、グギヤツ、グギヤギャアアー！！！！」

…気が狂っているように聞こえるが、なんだかご機嫌らしい。あ、この頃ハイウエイド（ ）との間に子どもが生まれたからか。あの時はヴァルクの目も輝いていた。

名前は……忘れた。性別はメスだったか？

グレスティーヌに乗ってそんなことを考えていると、リユイ海が見えてきた。

「あれか」  
「グル」

「グレスティーヌ、少し離れた所で待機している」

「ゲギヤ！」

そう言うとグレスティーンを止めて再びプリズムを出し、そこからはロウの背に乗ってゼッドヴァンの近くまで移動した。

「長いな」

「グル」

随分遠くに尾ひれが見える。30m以上か。…最近どこかで見たなあ顔。

あつ、

「ぎやらどす、だったか」

「グル？」

メフィリアの世界へ行った時にやったゲームに登場したヤツだ。確かポケモンとかいう…

「アオオオオアアアア！！」

「おっと」

「グルル」

呑気に考えていたら、赤い目をしたゼッドヴァンの、尖った尾ひれが飛んで来た。水中を移動させたのか。

空間から剣を取り出し、右手に握るととりあえずゼッドヴァンの体に当ててみる。

「硬え」

ギイン、そんな音で弾き返された剣をみやる。普通じゃ切れないな。

「来い」  
レストシエラン  
【王剣】！」

剣をまた空間へ消して、今度はレストシエランを召喚する。

しかしレストシエランで切り込んでもウロコが少し剥がれるだけだった。

そこへ後ろから尾ひれが飛んで来る気配を感じて直前で避けると、尾ひれが水しぶきを上げた。

水しぶきの後ろから攻撃が迫る気配を感じて空へと逃げるが、それより早く下からゼッドヴァンの牙が迫った。

「光聖の初・デンコウハ【伝光波】！」

左手で魔法を放つがそれをもともせず大口を開いて迫って来た。とつさにレストシエランを盾にし飲み込まれるのを防ぐが、そのままゼッドヴァンは水中へ潜り込む。

「ガボッ」

くそつ、抜けねえ！コイツ痛くねえのか！？歯ぐきに剣刺さってるのに！

水中を縦横無尽に泳ぎ回るゼッドヴァンはレストシエランを捕らえたまま。

魔法を撃つにも手が離せない。鳥神竜を召喚するにも詠唱出来ない



い。

「ガボボッ！」

そろそろ苦しい！

そうかつ。あれだ！！

俺はプリズムに神経を集中させる。

ジジジジッ

バシュ！！という音と共にプリズムから光が放たれる。

「オアアアギアア！！」

ドガッ！とソイツの喉に当たると口を最大に開けて奇声を上げる。  
解放された俺は急いで空気を求めて上昇する。

「オオオオオ！！」

怒ったであろうソイツは口から魔法を放つ。それをレストシェラ  
ンで防ぎながら、空気を目指す。

早く、早く早くっ！！

「…がはっ！！！」

ゲホゴホと咳き込みながら上空へ上がると、ロウが飛んで来る。

『死んだかと思っただぞ』

「助けに来いよ」

『あのような巨体に我は向かん』

「おまえな……まあいい。このままじゃ無理だ。鳥神竜を呼ぶ」

『その方が良さそうだ』

「水といえば勿論ピアスだな…。その前に、一発放つとくか」

上空から水中へ切っ先を向けると俺は叫ぶ。

「王誇よ来い」【レストシェラン】！！」

レストシェランの斬撃は海の中のゼッドヴァンへと向かう。  
そして詠唱を始める。

「『メルエノール』プリズムより生まれし水の鳥神竜、ピアス・メルエノール・リヴァ。今こそ時空を越え、我が元へ現れたまえ』」

ゴゴゴゴゴ...

天が唸り、空を黒雲が支配する。海が天へ向かって水柱を上げるとそれは段々と横に広がり、中から小さな翼と長い三本の尾が特徴のドラゴンが現れた。

水の鳥神竜だ。ピアスは他の鳥神竜と比べると基本能力は劣るが、水中では最強。他の追撃を微塵も許さない。

『ガクフォンスにロウティス、久しぶりだね』

ついでにマイペースで楽観的。

『敵は…』

ザバア！

『あれね』

「ああ。予想外に速い上に水中じゃ不利なんだな。任せる」  
『了解。すぐ終わらせるよ』

そう言つとパサと翼をたたんでゼッドヴァンへと急降下するピアス。

ザブンッ

2つの巨体が水中へ沈むと辺りに水しぶきが飛び散る。

・  
・  
・  
・

「アアアアアア！」

『オオオオオオオオ！！』

発せられる奇声に無駄に返してみる。久々に召喚されたことが嬉しくって、ついついネ？どーせ、ガクフオンスとロウティスは「うるさい」とか言っているんだろうね。

さてさて、僕の相手は……あーあー全くう、はしたなく大口開いちゃってえ。

…僕が閉じさせてあげるよ。僕はね、陸よりも水中のが速く動けるんだよ。

相手を上回る速さで移動して思い切り横顔にパンチを食らわす。

「アギヤエアアア！」

しまった。もっと開いちゃった。あは。

飛んで来た尾を、己の三本の尾で対応して口の中で光を溜める。

パリパリ…

ドンッ！と攻撃を放つとそれはものすごい速さでソイツに当たる。中々硬いウロコしてるね。

ゲンと移動して、真ん中の尾で横つ腹をぶっさしてみる。良かった、今度は血が出た。…紫だけど。

一気に充満する紫に気にせずそのままグリグリ尾で押すんだけど進まない。かったいな！。

ガブッ

『いてっ』

あちゃちゃ。グリグリすることに気取られて噛み付かれちゃったよー。んー、どうしようか？地味に痛い。  
十分じゃないけど一応遊んだし、もういっか。

プリズムを光らせて準備に入る。それを感じ取ったガクフオンスが上で詠唱する声がする。

「『全てのものを水と化せ』」

そう聞こえた瞬間、僕の体はゼッドヴァンの牙を逃れ水中へ溶け込む。

突然相手のいなくなったゼッドヴァンは混乱しているようだった。言い残すことは、ない？…ないねっ！

水中に溶け込んだ僕は範囲を選択してゼッドヴァンだけを水の力で囲む。

「呑みこめ！ピアス！【水冥想】<sup>スィメイソウ</sup>！…！」

ガクフォンスの声が聞こえると、技が発動する。

ゴゴゴゴオウン…

いつの間にか巨体は、僕一人になっていた。

・  
・  
・

『終わったよー』

「ご苦労さん」

「ゲル」

『何ロウティスしゃべってくんないの?』

「ゲル」

「さあ帰れピアス」

『ひどっ。僕ががんばったんだよ?』

「誰だすぐ終わらせるとか言ったやつは。遊びやがって。俺は召喚してる間ずっと力使ったんだよ」

『知ってるけどさー。…悪かったって帰る帰る。んじゃねー』

「ああ」

「ゲル」

ヒラヒラと手を振るとロウとグレスティーヌに乗ってメフィリアの元へ帰る。あ、思い出した。ハイウエイドとグレスティーヌの子

どもの名前。

「メリシアン・リンド・ジェシーヌ・ワーパー・ハインドだ。ヴァルクがメリーって呼んでたな、そういえば」  
「グルル」

…俺達の子どもの名前もいつか考えたいな。

討伐！・完

討伐！（後書き）

久しぶりに更新です。学校の宿題も更新しなきゃいけないんですけどね

もっとバトルものが書きたいんですけど、なんか良い案ないですかねー…



完

長々と連載中にしてきましたが、他の作品に集中したいということもあり、完結にさせていただきます。

色んな番外編はちょこちょこ浮かんでいたのですが、あまりにもショートショートショート過ぎるのでUPはやめました。

処女作で、無駄な設定をダラダラ書いて、分からないことだらけの中書いたものでしたが、書き直すとストーリーが変わってしまうと思うのであの書き方で残しておきます。

長々と『異世界の王子様』に付き合っていたいただきありがとうございます。  
いました。

よろしければ、他の作品も読んであげてください^^  
本当にありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6011m/>

---

異世界の王子様

2011年3月5日01時45分発行